

Japanese Studies Journal

Contents

Cultural Phenomena Produced by Paintings of Kabuki Plays:
On the Case of Paintings "EKIN" in Akaoka Town, Konan City, Kochi
Prefecture, Japan
Nagahara Junko ... 1

International Toy Exchanges between Japan and Thailand:
From Sending Toys to Dispatching "Toy Mission"
Berezikova Tatiana ... 14

Yuko Tsushima's Orphan Imagine:
Focusing on Her *Nara Repoto's* "O Gokumatomonahajimari" and "I Nara"
Preechapanya Chayaporn ... 35

On the Culture of Toilet Cleaning in Japan
Sun Mingyang ... 51

On the Meanings of Japanese Learning for Thai Students with Japanese Roots:
The Case of a Graduate from Japanese School in Thailand
Matsuoka Rina ... 71

Conversion between Explicit and Implicit Case Markers in Japanese:
From the Viewpoint of Contrastive Linguistics
Thu Thu Nwe Aye ... 89

A Proposed Course Syllabus for Basic Kanji Courses in Thailand:
A Case Study of the Result of Kanji Proficiency Test
Rodsuk Rudeemad ... 104

The Use and Adaptation of Urashima Folktale
Wakabayashi Porntip ... 126

April 2018
Chulalongkorn University - Osaka University

日本研究論集 第十七号

二〇一八年四月

チュラーロンコーン大学・大阪大学

ISSN 1906-8891

日本研究論集

目次

芝居絵がもたらしたもの—高知県香南市赤岡町の「絵金」を例に—
永原順子 ... 1

玩具贈呈をめぐる日タイ関係—子ども交流からおもちゃ使節まで—
ベレジコワ・タチアナ ... 14

津島佑子が描く孤児
—『ナラ・レポート』「0 ごくまともなはじまり」と「I ナラ」を中心に—
ブリーチャーパンヤ・シャヤーポーン ... 35

日本におけるトイレ掃除文化の考察
孫銘陽 ... 51

日本にルーツを持つ学生の日本語学習の意味に関する一考察
—タイの日本人学校を卒業した学生の事例—
松岡里奈 ... 71

日本語における有形と無形の格助詞の交替現象—対照言語学からのアプローチ—
トウ トウ ヌエ エー ... 89

タイにおける初級段階の漢字教育のためのシラバスの提案
—漢字力診断テストの結果に基づく事例研究—
ロードスク・ルディーマード ... 104

浦島伝説の利用について
ワカバヤシ・ポンティップ ... 126

2018年4月
チュラーロンコーン大学・大阪大学

第17号



この報告書はタイ国トヨタ自動車株式会社の出版助成によるものです。

目次

芝居絵がもたらしたもの—高知県香南市赤岡町の「絵金」を例に—
永原順子…1

玩具贈呈をめぐる日タイ関係—子ども交流からおもちゃ使節まで—
ベレジコワ・タチアナ…14

津島佑子が描く孤児
—『ナラ・レポート』「0 ごくまともなはじまり」と
「I ナラ」を中心に—
プリーチャーパンヤー・シャヤーポーン…35

日本におけるトイレ掃除文化の考察
孫銘陽…51

日本にルーツを持つ学生の日本語学習の意味に関する—考察
—タイの日本人学校を卒業した学生の事例—
松岡里奈…71

日本語における有形と無形の格助詞の交替現象
—対照言語学からのアプローチ—
トウトウヌエエー…89

タイにおける初級段階の漢字教育のためのシラバスの提案
—漢字力診断テストの結果に基づく事例研究—
ロードスク・ルディーマード…104

浦島伝説の利用について
ワカバヤシ・ポンティップ…126

Contents

- Cultural Phenomena Produced by Paintings of Kabuki Plays:
On the Case of Paintings “EKIN” in Akaoka Town, Konan City, Kochi
Prefecture, Japan
Nagahara Junko···1
- International Toy Exchanges between Japan and Thailand:
From Sending Toys to Dispatching “Toy Mission”
Berezikova Tatiana···14
- Yuko Tsushima’s Orphan Imagine:
Focusing on Her *Nara Repoto’s* “0 Gokumatomanohajimari” and “I
Nara”
Preechapanya Chayaporn···35
- On the Culture of Toilet Cleaning in Japan
Sun Mingyang···51
- On the Meanings of Japanese Learning for Thai Students with
Japanese Roots:
The Case of a Graduate from Japanese School in Thailand
Matsuoka Rina···71
- Conversion between Explicit and Implicit Case Markers in Japanese:
From the Viewpoint of Contrastive Linguistics
Thu Thu Nwe Aye···89
- A Proposed Course Syllabus for Basic Kanji Courses in Thailand:
A Case Study of the Result of Kanji Proficiency Test
Rodsuk Rudeemad···104

芝居絵がもたらしたもの
—高知県香南市赤岡町の「絵金」を例に—

Cultural Phenomena Produced by Paintings of Kabuki Plays:
On the Case of Paintings “EKIN” in Akaoka Town, Konan City,
Kochi Prefecture, Japan

永原 順子

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 助教

要旨

幕末の土佐で活躍した絵師金蔵は歌舞伎の芝居絵を多く描き残した。夏祭りにそれらを飾るという風習が、今も高知県内の約 10 箇所に伝えられている。本論文では、その中の 1 つである高知県香南市赤岡町を取り上げる。これらの芝居絵は、幕末に流行した地芝居（素人歌舞伎）を素地として生まれた。赤岡における地芝居の風習は幕末から明治初期にかけて衰退するが、芝居絵を飾る風習は今もなお続いている。その芝居絵を軸として、伝承を育んだ風土、祭礼の変容、伝統芸能の再生、それらを支える人々の思想、などの要素が互いに影響を及ぼしながら赤岡の町の歴史を形作っている。文化伝承の派生・再生は、町の再生にも繋がっているのである。

キーワード：歌舞伎、祭礼、芝居絵、伝承の再生、地域活性化

Abstract

Kinzo, an artist active in Tosa at the end of the Tokugawa period, drew a lot of paintings of Kabuki plays called “EKIN”. A custom of showing those paintings in a summer festival place is still reported to about ten locations in Kochi prefecture. In these locations, I'll pick up one of them, Akaoka Town, Konan City, Kochi Prefecture. These paintings were derived from a JISHIBAI (Kabuki performed by an amateur) that was popular at the end of

the Tokugawa period. Although customs of the JISHIBAI in Akaoka decline from the end of the Tokugawa period to the beginning of the Meiji era, that custom is still continuing. The place of nurturing tradition, the transformation of festivals, the regeneration of traditional arts, the thought of people who support them, etc. influence each other and form the history of the town of Akaoka, based on those paintings as the axis. It can be said that derivation / revitalization of cultural tradition leads to the revival of the town.

Keywords: Kabuki, festival, paintings of Kabuki play, reproduction of tradition, activation of the town

1. はじめに

高知県下には、夏祭りの夜に歌舞伎の芝居絵を飾るという風習がある。江戸末期から始まったこの風習は、現在約 10 箇所で行われている (図 1)。今回はそのうちの一つである高知県香南市赤岡町を取り上げ、芝居絵をめぐる諸相について述べる。

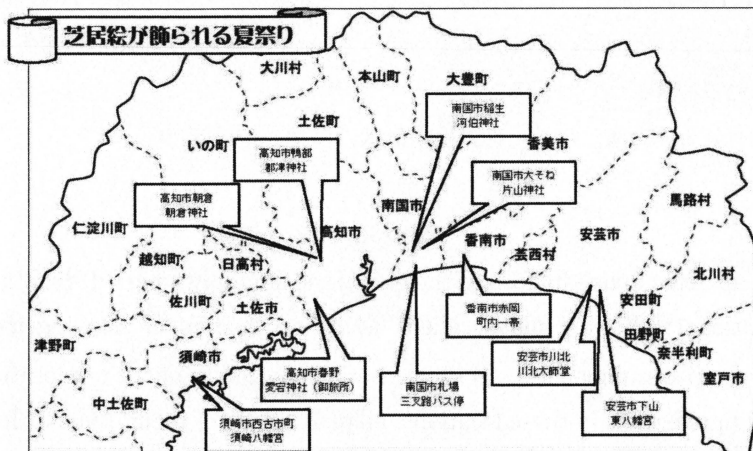


図1 芝居絵が飾られる夏祭り 分布図

2. 地芝居の歴史

冒頭に、「夏祭りの夜に芝居絵を飾る風習」と述べたが、その風習の素地は地芝居の隆盛にさかのぼることができる。

地芝居とは、都市で流行した歌舞伎が地方に伝わり、その土地の人々が祭礼などの際に演じた芝居のことを指す。役者が演じる歌舞伎に対して、素人歌舞伎と呼ぶこともある。地芝居は18世紀中頃から盛んとなり、町や農村の経済的發展を背景として城下町から農村まで全国へ広がった。特に北関東から中部地方、中国地方の山間部で大きな広がりが確認されている。現存の舞台および舞台跡は、東北から九州まで2,000箇所以上にのぼる。

江戸末期から明治にかけては、その豪華さがゆえに、禁制の対象となることもあった。明治期になると、映画などの新しい娯楽が誕生したため、地芝居の風習は衰退していく。現在では、その伝承のほとんどが消滅しているが、1998年に全国地芝居連絡協議会が結成され、地域社会における地芝居の保存振興と発展に尽力している。同協議会には、現在54団体が加盟しており、「全国地芝居サミット」によって各団体の交流が行われている。毎年、同じ日程で上演されている地芝居もあれば、不定期な上演のものもあり、現状は把握しにくい。伝承が一度途絶えていても、町おこしなどをきっかけに復活する場合もある。

3. 赤岡における地芝居の変遷

筆者が調査を行っている高知県香南市赤岡においても、幕末において、町の北側に位置する須留田八幡宮の祭礼で奉納される「宮芝居」として地芝居が盛んであった。一方で、いわゆる旅の一座を祭りの余興として呼んでくる「買芝居」も流行した。それらを支えたのは赤岡の町民の経済力であった。江戸末期、赤岡は良質の木材の集積場とそれを出荷する港町として栄えた。それらの富が、当時の娯楽に充てられたことは言うまでもない。今でも、町の商店街の家々に当時の面影を見ることができる。しかし、赤岡でも奢侈を防ぐための芝居禁制がしかれ、その伝承は衰えていくこととなる。

4. 芝居絵の誕生

地芝居とともに、それら歌舞伎の演目を絵画化したものも流行する。各地方の芝居絵は、絵馬として残るもの以外はほとんど見られないが、高知では、芝居絵の描かれた台提灯が残っている。台提灯は、夏祭りの夜、参道などに屋台を立ててその上に歌舞伎の芝居絵屏風を立てるものである。

先述のように、高知においても他地域と同様に歌舞伎の興行は幕末に衰退するが、台提灯の風習は今も県内に10か所ほど伝わっている。赤岡でも畳二畳分ほどの屏風絵を、夏祭りの夜に氏子たちが各家の軒先へ飾る(図2)。屋台は用いられず、芝居絵屏風のみが置かれる。これらの風習の起源がいつ頃なのかは、資料が乏しくはっきりとは判明しない。ただし、絵馬の奉納年、芝居絵屏風を収めた箱に書かれた年代などから、19世紀後半あたりまでさかのぼることができるという(横田(2012))。



図2 芝居絵屏風

これらの台提灯や芝居絵屏風を多く製作したのが、絵師金蔵、通称「絵金」(1812-1876)とその弟子たちである。

5. 絵金の芝居絵屏風

絵の題材は歌舞伎からとられており、1枚の絵に複数の場面を描くという異時同図法が見られる。大きさは畳2畳分の屏風様式である。江戸末期、赤岡町の旦那衆が須留田八幡宮の大祭に奉納するために絵師金蔵に芝居絵屏風を描かせたという。高知では芝居絵屏風そのものも「絵金」と呼ばれ、現在約200点が現存している。

絵の中には伏線や隠し落款などが描かれており、聞き取り調査では「自分が幼いとき、祭りの夜は祖母の背中におんぶしてもらい、絵の説明を聞いた」という話をよく耳にした。絵金の芝居絵が祭りの娯楽として広く定着していたこと、その伝承を支えていたのは地芝居の記憶の継承であることがわかる。

それらの芝居絵には、血なまぐさい場面が多く描かれ、よく「おどろおどろ」の絵と称される。人物の目には蠟が塗られているものもある。闇の中、揺らめく蠟燭の光の中に置かれると、蠟が入れられた人物の目はぬらぬらと光りだし、さらに「おどろ」感を増す。絵師金蔵は、祭りの提灯や蠟燭の灯りで見られるという前提のもとにこれらの絵を描いたとされる所以である。

6. 「絵金」研究史

絵金芝居絵の詳細な考察に入る前に、これまでの「絵金」研究史を概観しておきたい。

1966年、雑誌『太陽』で取り上げられたのをきっかけに、美術界で絵金ブームが起こる。絵金の展覧会は、その翌年の1967年に初めて開催されている。その後、展覧会は1973年までに6度開かれ、以後、各美術誌をはじめとした多くの書籍で特集が続き、映画や舞台化も行われ、ブームは1970年初頭にピークを迎える。70年代後半になると絵金“熱”は落ち着いたが、日本の美術史の中で、「おどろ」の芸術という位置を築いてきている感がある。

美術史でいわゆるキワモノとして取り上げられる理由としては、絵金の人物像（後に詳述）によるところが多い。吉良川（2008）においても、絵金の生涯が大きなテーマとなっている。

一方、芝居絵の誕生を祭礼と結び付けて論じた研究は、(1968)、藤村(1968)らに始まる。山本(2009)では、赤岡の美宜子(みきこ)神社を例に、赤岡の芝居と宿神信仰との関わりが宗教思想史の観点から論じられている。

祭礼と芝居絵の関係の現状を調査したものには、鍵岡(1996)があり、1995年時点における、芝居絵の点数および形状、所有者、所在地、祭礼における公開の状態などがまとめられている。この調査の目的は、「絵金及びその影響を受けた作品の現状を把握し、今後の保存・活用方策に資するため、基礎的なデータを得ること」とある。これらの祭礼に関する研究を受け、後藤(2012)は、絵馬や台提灯と芝居絵との関連を指摘し、絵金と芝居絵の誕生を詳述している。横田(2012)は、祭礼の現状をふまえて氏子を中心とした土佐の人々の芝居絵

の楽しみ方について述べ、高知の夏祭りには芝居絵が欠かせないものであると指摘する。

松島（2012）は、絵金の芝居絵の色材や制作技法から、それら芝居絵は「祭礼の演出の一部」として用いられていると主張し、絵画美術として論じることの困難さを強調する。絵金の芝居絵は、それ単体で独立した美術品として鑑賞されるべきではなく、その理念は祭礼での「活用」であるとした松島の論は、絵金の美術史研究に一石を投じたものとなっている。

7. 絵金芝居絵がもたらしたもの

以上の「絵金」研究史をふまえ、これらの芝居絵をめぐって、人々、場所、祭礼が時代を超えてどのように影響を与え合ってきたかを以下に考察したい（図3）。

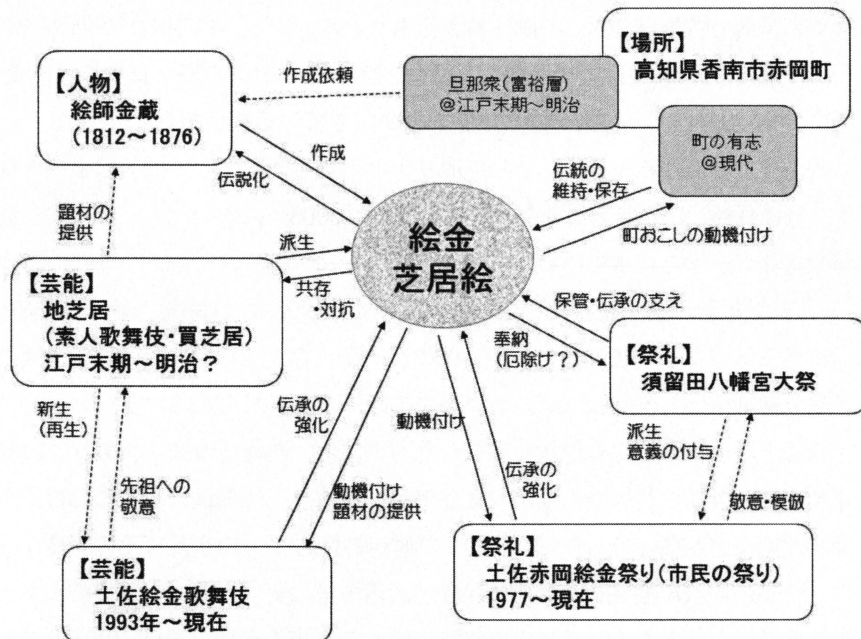


図3 絵金芝居絵をめぐる諸相

7.1 絵金という人物

絵師金蔵は、幕末の土佐（高知）で活躍した絵師である。高知城下新市町に髪結い職人の子として生まれた。20歳のころ江戸で2年間狩野派の画風を学んだのち土佐藩へ戻り、藩の御用絵師となり、林洞意（はやしとうい）と名乗る。33歳の頃、贗作事件（冤罪）のため城下追放の身となる。

実は贗作事件も追放のことも、史料に残ってはいない。吉良川（2008）は、彼は号を棄てて自ら城下をあとにした、つまり贗作事件は単なる伝説であると述べている。「高知城下から姿を消す」他の理由としては、倦怠期を迎えていた江戸後期の狩野派に見切りをつけた、自分の後を追う絵師・河田小龍（かわたしょうりょう）が海外へ興味を持ったことに刺激をうけた、などが考えられている。ただし、事件後の約10年間は公的記録にほとんど名を見せず、「謎の10年」として語られることも多い。彼が史実に再び姿を現すのは、放浪ののち赤岡の伯母の許に身を寄せて「町絵師・金蔵」を名乗ってからである。結果、赤岡のほか、高知県内に多くの芝居絵を残すこととなった。芝居絵の他、そのデッサンのような白描画も多数伝えられている。

芝居絵の「おどろ」のイメージは、絵師金蔵のミステリアスな性格付けにも貢献している。絵師「絵金」、芝居絵「絵金」はお互いに作用しながら知名度を上げたといえる。現在ではあまり聞かれなくなったが、高知で絵描きといえば「絵金」を指し、少しでも絵の上手い子どもがいると「あんた絵金さんになるがや」と言われていた。貴種流離譚を出すまでもないが、絵師金蔵のキャラクターはある種のヒーロー的な位置を確立し、赤岡の町おこしには不可欠な存在となっている。

7.2 祭礼と芝居絵

地元の氏神をまつる須留田八幡宮の大祭の宵宮にあたる7月14日に、邪気を払うために商家の軒下に飾られるようになったという。先述のように、資料が乏しく詳細は判明しないが、幕末の頃からその風習が始まったとされている。絵金蔵が建てられるまでは、各家が独自に芝居絵の保管を行っていた。現在は

23 枚の絵が各家に伝えられているが、祭礼の日以外は絵金蔵に保管され、祭りの夜だけ各家へ戻される。

一方、須留田八幡宮の大祭にならない、1977 年、町の人々の夏祭りとして「土佐赤岡絵金祭り」（以後「絵金祭り」）が開催されるようになる（図 4）。赤岡吉川地区商工会



図4 「土佐赤岡絵金祭り」の様子

（現・香南市商工会）青年部が、商店街の発展を願って始めた。以来、7月14日、15日の氏子達による須留田八幡宮大祭、7月第3土日の町の夏祭りである「絵金祭り」の2つが並行して行われている。どちらの日にも芝居絵が家々の軒下に飾られるが、大祭は静、絵金祭は動という対比が見られる。「絵金祭り」の2日間は、数々の露店、駐車場に設けられたステージでのイベント、お化け屋敷、かつてあった風習をもとに行う絵くらべ展、後に詳述する「土佐絵金歌舞伎」の上演、等々、町の中心部が多くの人で賑わう。地元の人々はもちろん、県内外の観光客が多く訪れる。

氏神をまつる大祭で絵金の芝居絵が飾られたのは、その絵に用いられた「血赤」による魔除けの効果の求めてのことであるとも言われる。その信仰心が芝居絵の伝承を支え、赤岡の芝居絵は時代を超えて受け継がれてきた。その芝居絵が現代において今度は新たな祭りを生む原動力となった。これは、単なる地域活性化や町おこしではなく、根底には伝承を脈々と受け継いできた祖先への敬意があると考えられる。その敬意は町の文化を後世へと伝えていく熱意につながっていく。絵金の芝居絵は祭りから誕生しながらも、祭りそのものを変容させる影響力を持っていることがわかる。

7.3 赤岡 ～場所と人～

赤岡町は、太平洋に面した旧土佐街道沿いの商業都市である。先述のように

近世から昭和初期まで物資の集積地として栄えた。上方や九州への廻船業や製塩業、綿織物業（赤岡縞）が盛んな土地で、当時は富裕層（旦那衆）も多く、今も大きな屋敷や蔵が残っている。特に木材の集積・出荷で財をなした家が多い。現在は漁業と商業が主な産業であるが、近年は芝居絵や歴史的建造物・町屋を中心とした町おこしが積極的に行われている。その中心となっているともいえる施設が、絵金蔵（えきんぐら）と弁天座（べんてんざ）である（図5,6）。



図5 絵金蔵



図6 弁天座

1993年、絵金の芝居絵に描かれた芝居の世界を再現したいという有志が集まり

「絵金歌舞伎伝承会」が発足し、1995年には「やさしく、つよく、ゆめのある」を意味する、主婦中心の絵金グッズ開発グループ「やつゆ会」が発足する。

同年、赤岡を訪れた学生の発案で、「冬の夏祭り」が12月に開催された。これら赤岡の活性化に関する流れを受け、1997年から8年に及ぶ住民参加のまちづくりワークショップが始まったのである。そして2005年、芝居絵の保管と展示のための絵金蔵が完成する。

もともと、弁天座は明治期に住民の娯楽のために建てられた芝居小屋であった。行われる興行が芝居から映画に変わり、老朽化もあって、1970年に閉鎖していた。その跡地は青果の集荷場として使われていた。先述の「絵金歌舞伎伝承会」を中心とした赤岡の人々の熱意が実り、2007年に文化活動拠点として弁天座が同じ場所に復活する。現在では、絵金歌舞伎のほか、松竹歌舞伎、落語会、映画鑑賞会、各種講演会などの自主興行も行っている。

7.4 地芝居の復活

7.2 で述べたように、1993年5月、町の有志らが、芝居絵に描かれた歌舞伎の演目を演じてみたいと「土佐絵金歌舞伎伝承会」を結成した(図7)。同年7月、市民の祭り「絵金祭り」の夜に、第1回土佐絵金歌舞伎の公演が行われた。

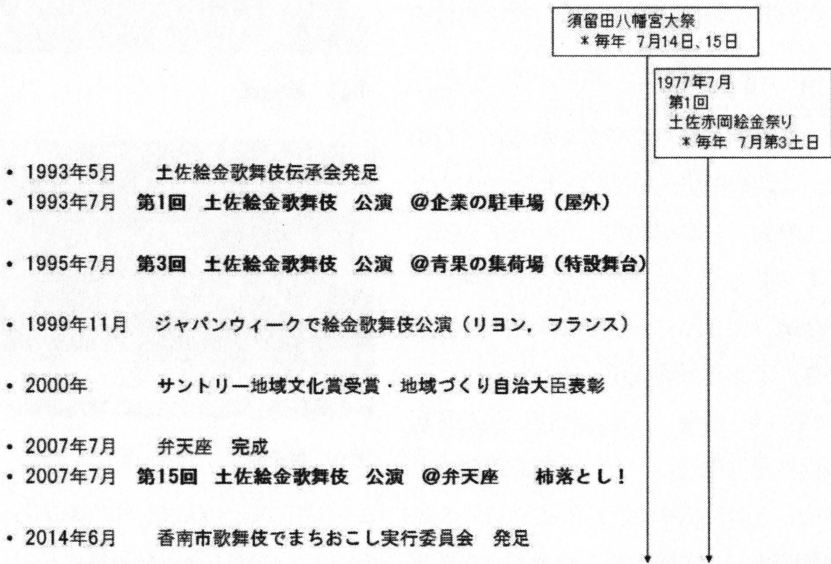


図7 土佐絵金歌舞伎 年表

当初は専用の芝居小屋はなく、駐車場や青果の集荷場(弁天座跡地)などの特設舞台上で演じられていた。その活動は、フランスのジャパンウィークでも紹介され、サントリー地域文化賞も受賞している。



図8 土佐絵金歌舞伎

2007年に弁天座が復活してからは、活動の場を弁天座に固定して、絵金の芝居絵に描かれた歌舞伎を毎年「絵金祭り」の夜に上演している(図8)。入場は無料であるが、活動資金のためパンフ

レットを1冊500円で販売する。一方で、各助成金などを活用し、寄付金も随時募集している。

立ち方、すなわち舞台上で演技をする役者は、赤岡の人々とその知己である。絵金祭りの2、3ヶ月前から稽古を行う。所作や舞踊は花柳貴答師が指導する。2017年の絵金歌舞伎では、花柳氏が考案した絵金を主人公とした芝居を上演したが、彼らはその脚本づくりにも参画している。

下座と呼ばれる楽器演奏を担当するのも、ほとんどが町の人々である。望月左喜三郎師の指導のもと、年間を通じて定期的に稽古を行っている(図9)。立ち方と掛け持ちで担当する人もいる。

義太夫は、高知市在住の中村和子師が担当する。高知県唯一の義太夫演奏者であり、乙女歌舞伎の経験者でもある。県内各地における地芝居の台本、着付、化粧、下座などの指導にもあたる。



図9 下座稽古の様子

裏方の衣装、カツラ(とこやま)、化粧、照明、大道具、小道具など、すべて赤岡の人々が協力して行う。そのほか、受付、場内整理、駐車場の案内など、役所の人々、近隣の学がボランティアで担当している。

確かに、地芝居の風習が伝わっていた土地であり、素地はあったのかもしれないが、幕末から明治初期の頃に一旦途絶えたであろう風習を復活させるということは、ほとんど0からの出発に等しい。ここでもやはり地芝居という芸能の再生を支えたのは芝居絵であった。聞き取り調査では、「うちのじいさんも芝居が好きやったと聞いたことがある」という立ち方の人もいる。それら先祖の記憶をつなぎとめたのが芝居絵であるともいえる。また、芝居絵には残っているが、いわゆる商業歌舞伎では現在すでに演じられなくなっている演目を復活上演する取り組みも行っている。

赤岡の地に根付いていた地芝居が芝居絵を生み出し、その芝居絵によって時

代に合った形で地芝居が再生されるという、一種らせん状のような文化の再生産を見て取ることができる。

8. おわりに

以上、高知県香南市赤岡町における芝居絵をとりまく諸相について考察を行ってきたが、このような調査を行うときに懸念されるのが、伝承を継続することの難しさである。伝承会や保存会を立ち上げたのはよいが、設立時のメンバーが高齢化して後継者もおらず、また無に帰してしまうことも多い。

例えば絵金歌舞伎は、1993年に上演が始まってから20年あまりが経っており、同じような問題に直面している。確かに、伝統への誇りや先祖への敬意が再生の原動力となる。しかしそれはあくまで理想論であって、現実には厳しい。赤岡の地芝居はなぜ20年以上も活気をもって続けて来られたのか。

2017年7月の絵金歌舞伎ではある象徴的なことが起きた。絵金歌舞伎の演目は毎年3つあり、最初に必ず三番叟（さんぼそう）が演じられ、他の2つは絵金の芝居絵を題材としたものとなる。その三番叟はこれまで伝承会が立ち上がったときの役者3名がほぼ演じてきたが、今年の三番叟は3名とも彼らの子どもの世代へと演者が代替わりしたのである。3名とも高校生であり、そのうちの1人は小さいことから親の稽古を見学し（むしろ見所＝観客席が遊び場であった）、子役としても舞台に出ていた。一方で、血縁者に役者がおらず、今回が初舞台という男子学生にきっかけは何かと尋ねると、「かわったことをやるとモテるかなと思って！」とにっこり笑った。先述のように絵金歌舞伎には立ち方から裏方まで、非常に多くの人に関わっている。近隣の学校に通う学生や、高知県内のALT（外国語指導助手）が舞台に立った年もあった。血縁だけでなく地縁や知己へと広がり、いい意味で多くの人を巻き込みながら絵金歌舞伎は存続の道を探っている。

歌舞伎は近世に花開き、以降、各時代の流行を取り入れつつ変貌をとげる一方、その他の文化事象を生み出してきた。芝居絵もその1つである。赤岡では、芝居絵があらたな夏祭りを創出し、地芝居の再生にもつながった。これは文化

のみならず地方コミュニティの再生と深く関わっている。文化伝承の派生・再生は、町の再生にも繋がっているのである。

少子高齢化、産業の衰退、そのほか様々な問題を抱えた各地方の市町村において、いまや「町おこし」ということばが呪文のように唱えられている。赤岡ではこの芝居絵を核とした人々の絆が確立され、諸問題を抱えつつも一步一步前に進んでいる。今後、この町はどのような「再生」の道をたどるのか、引き続き調査・研究を続けていきたいと考えている。

<参考文献>

鍵岡正謹ほか（1996）『高知県絵金保存調査報告書 土佐の芝居絵—絵金及びその後裔—』高知県教育委員会

吉良川文張（2008）『絵金その謎の軌跡—土佐の芝居絵師・金蔵』高知新聞社

藝能史研究会編（1988）『日本芸能史・第6巻 近世—近代』法政大学出版社

後藤雅子（2012）「絵師・金蔵と土佐の芝居絵屏風」『絵金 極彩の闇』grambooks、pp. 206-211

廣末保（1968）「幕末転形期の芸術」『絵金 幕末土佐の芝居絵』未来社、pp. 105-118

藤村欣市朗（1968）「台提灯絵師、絵金」『絵金 幕末土佐の芝居絵』未来社、pp. 119-166

松島朝秀（2012）「芝居絵屏風の科学的調査」『絵金 極彩の闇』grambooks、pp. 186-193

山本ひろ子（2009）「摩多羅神紀行、あるいは服部幸雄『宿神論』の彼方へ」『文学』岩波書店、10巻4号、pp. 184-196

横田恵（2012）「芝居絵屏風のある祭礼—残したい風景—」『絵金 極彩の闇』grambooks、pp. 200-205

玩具贈呈をめぐる日タイ関係
—子ども交流からおもちゃ使節まで—
International Toy Exchanges between Japan and Thailand:
From Sending Toys to Dispatching “Toy Mission”

ベレジコワ・タチアナ

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 D3

要旨

20世紀初頭の日本において玩具の外交的な役割が注目され始めた。玩具や人形を贈呈することによって、国家間の関係をより友好にしようとする考えは、のちの国際関係の展開に影響を与えたものであった。大人の政治家ではなく、一般の子どもを対象とした数々の国際玩具贈呈や玩具使節が広く認識されるようになり、アメリカをはじめ、多くの国の間で贈答が実行された。もちろん、そのなかには、日タイ間の人形・玩具の贈答や交流もあった。本稿では、両国間の文化的交流の一端を担った国際玩具贈呈や玩具使節に注目し、人形と玩具をめぐる日タイ関係の歴史の一端を探ることを目的とする。

キーワード：玩具、日タイ文化交流、国際子ども交流、おもちゃ親善使節、少年赤十字

Abstract

The diplomatic role of children's toys started to draw attention in Japan in early 20th century. From then on, the idea of improvement of relationships between countries through sending toys and dolls influenced the development of Japanese international relationships. Many international gifts and so called “Toy ambassadors of goodwill” and “Toy Missions” sent from Japan during the period from early 20th century to World War II. Also, after the Great War similar activities can be observed.

Similar exchanges of dolls and toys existed between Japan and Thailand.

This research focuses on international toy gifts and their role in cultural exchanges between Japan and Thailand. It also aims to explore a part of cultural exchange history between the two countries.

Keywords: toys, Japan-Thailand cultural exchanges, international exchanges between children, toy ambassadors of goodwill, Junior Red Cross

1. はじめに

明治時代に入った日本において、多くのものが再評価の対象となった。明治以前、「子供を喜ばすといふ意味より出でなかつた」^①玩具も再評価された。明治初頭にドイツやアメリカなどから入った新しい教育思想の影響で、玩具は子ども教育において欠かせないものとして認識されるようになり、やがて明治後期になるとこの考え方が社会通念となって、一般の人の間でも定着した^②。

さらに、第一次世界大戦以前、世界玩具市場において一位を占めていたのはドイツであった。その玩具貿易状況^③に刺激を受けた日本の玩具製造者や商人は、日本玩具の輸出の可能性を探り、国際市場において玩具が果たす役割に注目した。この役割について、当時の農商務省参事官であった山脇春樹は以下のように述べている。

凡て貿易品は需要者が其品を製作する国の風俗、人情などを知るに都合の

^①山田徳兵衛「明治の玩具（上）」『少国民文化』第2巻第8号、日本少国民文化協会、1943年8月、pp.34-39。

^②是澤博昭『教育玩具の近代—教育対象としての子どもの誕生—』世織書房、2009年4月、pp.210-211。

^③当時のドイツは丈夫で安い、巧妙でできている玩具を誇っていた。意匠豊かな玩具を大量で生産し、商品の統一性と品質を厳密に維持していたドイツは、多くの国から信頼されていた。当時のドイツ玩具輸出状況を様々な資料から確認できる。たとえば、永代静雄訳「手工玩具の分業的製作」（『獨逸工業の発達』（新知識叢書第2編）実業之世界社、1915年4月、pp.140-142）や臨時産業調査局編『調査資料』第6号（臨時産業調査局、1918年3月、pp.24-29）などが例として挙げられる。

良いものを選ぶから自然玩具が先駆となるのである。而して其玩具も実質に於て優良なるもの、堅実なるもの、品位あるものと信用されて来れば段々と需要を増し其国の立派な商品も実用に適するものとして賞讃を博するに至るのである。即ち一国と一国の貿易に於ては玩具の如何が先入主となる事が多いのである（『読売新聞』1911年8月3日朝刊第5面）。

つまり、優れた玩具を輸出すれば、他の製品も次第に信頼を得、注文されるようになるというのである。玩具は、貿易拡大において自然と先駆的存在となるのであり、日本の貿易を発展させるには、まず国際市場で求められるような玩具を製造し、輸出しなければならないというのである。

このように、明治期以降の玩具は、子どもの成長において不可欠で、教育上極めて重要なものとして認識されるようになってきただけでなく、他国からの信頼を得るために貿易の先駆になるという役割も担っていたのである。

ただ、玩具の近代的役割はこれだけではない。大正・昭和期の著名な人形玩具収集家であり研究者であった西澤笛畝は、明治以降の玩具の性格について、「(玩具は：筆者補) 最近は一種国際情誼の上に、独自の童話的な似人的な愉快的交歓使命を完うしたり、単にそれが玩具と看做してしまふことの出来ぬやうな、複雑ないろいろの現象を見ることが出来る」⁴とし、玩具が「国際情誼」においても「愉快的交歓使命」を果たしていると述べている。

詳細は後述するが、近代日本において国際親善を願って外国の子どもたちなどへ人形と玩具を贈呈することが、外交の一つの手段となり、日本の国際関係において重要な役割を果たしていたのである。しかし、この役割も、人形と玩具をめぐる国際関係の歴史も、先行研究においてほとんど注目されず、看過されてきた。本稿では、この歴史の一端を明らかにすることを目的とするが、そのなかでもとりわけ、日タイの間で行われた玩具贈呈の事例に注目することによって、玩具をめぐる日タイ関係の歴史と玩具が果たした役割について考察す

⁴西澤笛畝「天平時代の玩具」『週刊朝日』第12巻第21号、朝日新聞出版、1928年5月、p.24。

る。

次に、先行研究と一次資料を簡単に紹介したい。

日本の玩具に関する先行研究は、多岐にわたり、様々な観点から考察がなされているが、他国の玩具に関する研究は少なく、さらにいえばタイ玩具についての言及は少なく、管見が及ぶ限り、研究と言えるほどの分析と考察は未だになされていないという状態である。例外としては、西澤笛畝が中心となった1932年のタイ玩具調査に関して論じた拙稿があるくらいである⁵。また、日タイ関係における玩具贈呈や玩具交流に注目した研究も全く見られない。

だが、以下に述べるように、日タイ関係における玩具関連資料が実在する。そして、それらを分析すれば、両国間で行われた文化交流の新しい側面が明らかになることが期待される。

次に、一次資料について述べる。

本稿では、主要な資料として、以下に示す三つの資料群を用いる。一つ目は、国際子ども交流に大きく貢献した日本少年赤十字の機関誌である。本研究においては、子ども向けに出版された『少年赤十字＝The Japan Junior Red Cross』（日本少年赤十字の機関誌：1926年～1943年季刊発行）という雑誌を扱う⁶。

もう一つの主要な資料は『読売新聞』の記事である。

三つ目の資料は、1903年4月以降、東京玩具人形問屋協同組合によって玩具製造者や玩具商人向けに刊行された雑誌『東京玩具商報』である。この雑誌は、現在でも『トイジャーナル』と改名され、刊行されているものである。

もちろん、この三つの資料群のなかに、すべての日タイ間における玩具関連記事や事例が掲載されているわけではない。むしろ、ある程度話題にならないものは、載せられなかったという可能性も高いだろう。また、三つの資料群は

⁵ベレジコワ・タチアナ「タイ玩具への道程—玩具蒐集から調査団派遣まで—」『日本研究論集』第15号、チューラーロンコーン大学・大阪大学、2017年4月、pp.120-139。

⁶日本少年赤十字が発行していた雑誌は、ほかに『少年赤十字＝The Kyoto Junior Red Cross』（京都支部の機関誌：1924年～1934年月刊発行〈以降未詳〉）、そして指導者向けに出版された『海外少年赤十字彙報』（1928年～1942年季刊発行）が存在しているが、この二つの雑誌には、日タイ間の玩具贈答に関する記述は見られない。

いずれも東京を中心にしたものであるため、地方で行われた交流についての情報は掲載されない可能性も高い。だが、一方で、全国的に話題になった事例だけが掲載されているのであれば、その事例の話題性のある程度推察することができるという利点もある。そのように考えると、この三つの資料群のなかで紹介された事例は、当時広く注目されたものだったと推測できるのである。

さらに、この三つの資料群を扱うことによって、当時の日タイ関係を三つの側面から捉えることができる。『読売新聞』からは全国的に話題になった事例を収集することができるし、少年赤十字の機関誌からは国際子ども交流の参加者・指導者が注目した事例を集められるし、東京玩具人形問屋協同組合が発行した『東京玩具商報』からは玩具界で話題となった事例を確認できる。これによって、玩具をめぐる日タイ関係をより深く考察できると思われる。しかしながら、これでも両国の間に贈られた玩具に関する事例を全て収集し、玩具をめぐる日タイ関係の全貌を明らかにすることは不可能であろう。したがって、タイ側の資料収集と分析が必要となるが、それは今後の課題にしたい。

ちなみに、本稿で取り上げる事例は、すべて「国際親善」という目的や意味が読み取れるもののみであり、これ以外の事例（「慰問」、「慈善活動」、「個人的贈物」など）は本稿の目的から外れるので省くことにする。そして、本稿においては、人形を玩具の一種として捉えていることをあらかじめ断っておきたい。

最後に本稿の構成を紹介して、本文に入りたい。

まず、第2章では外交の手段としての玩具に注目し、続く第3章では、玩具をめぐる日タイ関係を考察する。そのため、第二次世界大戦を境目とし、玩具をめぐる日タイ関係を戦前と戦後の時期に分ける。さらに、戦前の両国の関係において二つの流れを追う。一つ目は子どもたちの間の玩具交流。そして二つ目は、日本の団体や組織が行った玩具贈呈である。戦後においては、「おもちゃ使節」という特殊な形をとった玩具贈呈に注目して論じる。最後に、全体をまとめて、稿を閉じたいと思う。

ちなみに、本稿の引用は、読みやすさを考慮して句読点を補い、必要な箇所以外はふりがな(ルビ)と記号を省き、二字以上の繰り返し記号に該当する箇所に

はそれに相当する文字を当て、そして漢字を通用するものに改めたことをあらかじめ断っておく。

2. 玩具外交

前出の西澤笛敏が説いた玩具の「国際情誼」における「愉快な交歓使命」がどのようにして始まり、日本においてどう評価されたのか、という点について、本章で考察する。

玩具が日本で外交の手段として初めて好評されたのは、1909年のことであつたと思われる。この年の5月の『朝日新聞』には以下のような記事が見られる。

本月一日北京西陵に行はれたる光緒先帝の大葬に特使を差遣したのは日露仏西墨伯の六ヶ国で孰れも各主権者を代表して今年漸く三歳に渡らせ給ふ幼帝溥儀陛下に山なす贈物をなした中に最も幼帝を始め奉り堂上三千珠履の客をアツと驚嘆せしめたのは実に露国皇帝の贈物であつた、近頃の外交に於て玩具は中々華やかな役前を持つ事になつた（中略）仏国流の玩具外交術を転用せられた露帝が帰朝の特使を引見して深宮の裡に其成功の程を聞しめされた時お鼻の高さ亦如何ばかり（『朝日新聞』1909年5月29日朝刊第5面）。

上記に挙げた記事の内容をまとめてみよう。1908年12月に清国の最後の皇帝となった幼い溥儀の即位に際して、ロシア皇帝ニコライ2世より16万円の玩具の汽車が贈呈された。想像を越える精巧で美しいこの玩具に幼い溥儀は御満悦だった。このような外交手段は、「仏国流の玩具外交術」、つまりフランス流の玩具外交術と称され、日本で高く評価され、玩具外交も一時的に話題になった⁷⁾。

⁷⁾ この事例を扱う記述はほかにも見られる。たとえば、「玩具外交」（『東京パック』第5巻第18号、東京パック社、1909年6月、p.3）と「列国の新手段 外交に玩具を使ふ」（『日本事業新報』第78号、日本事業新報社、1910年3月、p.5）が挙げられる。

さらに、この記事で示されている他の事例を見ると、このような外交手段はなぜ「フランス流」と呼ばれたのかが推測できる。以下はこれらの事例を挙げてみよう。一つ目は、1907年にフェリックス・フォールとイミール・ルーベのフランスの両大統領がロシア皇女に人形を贈ったというものであり、二つ目は、フランス大統領アルマン・ファリエールが、ロシア皇太子に4千円の玩具の汽車を贈呈したというものである。フランス大統領が人形や玩具を贈呈するによって、露仏同盟がより友好的なものになり、それによって外交上大きな成功を博したことが記事のなかに記されている。つまり、1909年以前にも、外交上の効果を考えた玩具贈呈が行われ、このような外交手段は主にフランスの政治家によって行われたことが、この記事からわかる。

これらの人形贈呈は、アメリカにおいても話題になった。アメリカの人形収集家であり研究者であったローラ・スタールは、フランス大統領フェリックス・フォールによる人形贈呈の詳細について述べている。スタールによると、人形は3体贈られたが、1体の人形を仕上げるには600~700ドルもの費用がかかり、髪飾りだけでも50ドルはしたという。そして、人形の他に、パリの最新ファッションの衣装をつめたスーツケースが20個も送られ、人形の荷物を管理するために、特別な書記官が派遣されたという⁸。

このような人形贈呈は、15~16世紀から行われているものである。ファッションの最先端に立ったフランスは、最新の流行を発信するために、いわゆるファッションドールを多くの国へ送っていた。この動きは18世紀になると、特に顕著になり、人形は最新のファッションを届ける「ファッション特使（“le grand Courrier, de la Mode”）」と呼ばれるようになった⁹。ただ、1909年以前に、これらの人形贈呈が、外交的な効果を持つものとして評価されたかどうかは、不明である。

ただ、前述したように1909年に「玩具外交」が、一時的に話題になったこ

⁸Starr, Laura B. *The Doll book*, New York: The Outing publishing company, 1908, pp. 27-28.

⁹Starr, Laura B. *The Doll book*, The Outing publishing company, 1908, pp. 46-47.

とは事実である。この後、人形が再び国際舞台に立ち、大きく脚光を浴びるのは、1927年のことである。この年、いわゆる「青い目の人形」が約1万2千体でアメリカから贈られた。それに対し、日本からはそのお礼として58体の「答礼人形」が返送されたことがわかっている。このイベントについて、すでに数多くの研究成果が公表されていることは、周知の事実であろう⁴⁰。また、この交流によって一時的ではあったが、アメリカと日本の関係が進展し、人形贈呈の外交的な効果が広く注目されたことも、またよく知られている。この交流が、民間外交の成功例となり、それ以後の国際人形や玩具交流を促進させたものと思われる⁴¹。

これ以降も、1933年に日本から送られた「日満親善人形使節」など、近代日本の国際関係において数々の人形や玩具の贈呈が行われた。この贈答の実行には、日本や外国から様々な施設や団体が加わっていたことと、実際に行われたものには相互的な交流もあったが、一方的な贈呈もあった、という点が特徴的である。

こうして、人形と玩具をめぐる国際関係の歴史をたどっていくと、日本とタイとの玩具交流も、1930年代以降に顕著になったことが確認できる。次章では、その具体例を挙げながら、玩具をめぐる日タイ関係を追っていきたい。

3. 玩具をめぐる日タイ関係

「はじめに」で述べたように、玩具をめぐる日タイ関係を、第二次世界大戦の前後によって、戦前と戦後に大別する。前者は、両国の子どもたちの間の玩具交流と、日本の団体や組織による玩具贈呈という二つの流れに分けて論じ、

⁴⁰たとえば、是澤博昭（『青い目の人形と近代日本—渋沢栄一とL. ギューリックの夢の行方—』世織書房、2010年10月）、高岡美知子（『人形大使—もうひとつの日米現代史—』日経B P社、2004年3月）、武田英子（『人形たちの懸け橋—日米親善人形たちの二十世紀—』小学館、1998年10月）などを参照されたい。

⁴¹近代日本における国際人形交流と人形外交の発展については、拙稿「日本における人形の近代的役割—1920-40年代の国際交流と外交を中心に」（『間谷論集』第11号、日本語日本文化教育研究会、2017年3月、pp.181-210）を参照されたい。

後者は、「おもちゃ使節」という特殊な形をとった玩具贈呈について論じる。

3.1 子どもたちの交流

日タイ両国間における玩具交流で最初に確認できるのは、1931年の交流である。両国の少年赤十字団員¹²が、自国の人形を含んだプレゼントを贈ったということが、1931年12月6日の『読売新聞（よみうり少年新聞）』の記事から確認できる。以下に示すのは、それを伝える記事の一部である。

少年赤十字社では世界各国の少年少女達によつて、毎年クリスマスの贈物を交換し、世界の平和と親善に努めてみますが、今年も、もうこのプレゼントが取りかわされてみます。(中略) シヤムから来たお人形も次の様なお手紙を持つて来ました。

親愛なる日本のお友達へ

お手紙と贈物をありがとうございました。これはそのお礼のしるしです。

(中略) この贈物は、私達の手で作つた郷土人形です。外に小さいお台所道具と、仮装芝居で使ふ王様と女王の冠が入れてあります(『読売新聞（よみうり少年新聞）』1931年12月6日別刷第2面)。

この手紙と贈物は、バンコクのラジニ小学校の少年赤十字団¹³からクリスマスにちなんで贈られたものであり、日本から贈られたプレゼントに対するお礼であった。ちなみに、日本の子どもたちが何を贈ったかは、不明である。タイ

¹²少年赤十字の運動は第一次世界大戦中、アメリカやカナダを中心として始まったもので、終戦後、アメリカを中心に世界各国へ広がっていった。各国の少年赤十字の団員と指導者は、国際平和と国際理解を強く意識し、国際通信交換という活動を展開していった。1922年に成立された日本少年赤十字は、国際通信交換に加わり、交流の規模を急速に広げていった。

¹³タイ・バンコクのラーチニー・スクール (Rajini School) において、現在でも少年赤十字の活動が続けられているようだ。この学校の最初の校長となった安井てつ (1870～1945) は、文部省によってタイに派遣され、1904～1907年の3年間をタイで過ごした。つまり、当校は創立のときから日本と深い関係を持っていたのがわかる。

の子どもたちが贈ったのは、手作りの人形2体と小さな台所道具、そして仮装芝居に使う王様と女王の冠であった。これらの人形に関する記述は、日本少年赤十字の機関誌にも見られる。人形は、「その一つは学生の、今一つは少年団員の制服をつけて」いるというように記載されている¹⁴。そして、上記の新聞には、人形と冠の写真も載せられている（図1）。

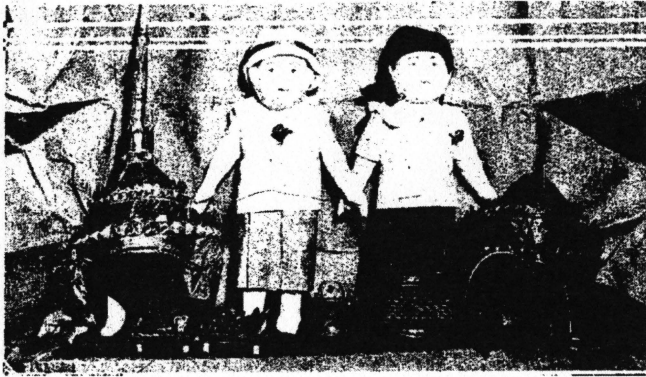


図1：シヤムから来た可愛らしいお人形¹⁵

ただこの交流は、最初の国際交流ではなかったと推測できる。なぜなら、日本においてもタイにおいても少年赤十字は、すでに1922年に成立されており、1926年7月から両国の交流に関する記録を日本少年赤十字の機関誌によって確認できるからである。この年に、東京にある少年赤十字団がタイへ通信を送ったが、日本の子どもたちが何を送ったのかは確認できない¹⁶。また、同年の10月にも岐阜県の少年赤十字団がタイへ通信を送ったことが確認できる¹⁷。

¹⁴ 「シヤムの蛍と田植」『少年赤十字＝The Japan Junior Red Cross』第7巻第3号、日本赤十字社、1932年7月、p.18。

¹⁵ 『読売新聞（よみうり少年新聞）』1931年12月6日別刷第2面。

¹⁶ 「通信交換の現状」『少年赤十字＝The Japan Junior Red Cross』第1巻第3号、日本赤十字社、1926年7月、p.19。

¹⁷ 「通信交換の現状」『少年赤十字＝The Japan Junior Red Cross』第1巻第4号、日本赤十字社、1926年10月、p.19。

それ以降、タイとの交流数は、ほかの国（特に、欧米諸国）と比べて、少数ではあったが、1943年に日本少年赤十字の国際活動が戦時中に途絶えるまで着実に続けられていた。しかし、その規模や贈物に関する詳細は、日本側の資料から確認できないが、日本少年赤十字の活動の性格を考えると、少なくとも一年に一回、クリスマスや新年にちなんで贈物が発送されたことが推測できるし、それ以外の時期にも何らかの交流が行われた可能性は高い。

なぜ両国の交流が安定したペースで行われたかという点、その理由は少年赤十字の国際通信交換活動の方針にあると思われる。その方針とは、贈られたものに対して必ず返礼し、交換を維持することと、交流の範囲をできるだけ広げて、より多くの国や多くの団と、できるだけ頻繁に交換を行うこと、であった。ちなみに、これらの特徴は、アメリカ少年赤十字の方針に則したものであり、日本だけの特徴ではなかった¹⁸⁾。

しかし、このような方針があったとしても、タイとの交流数は少ない。その理由の一つは、タイの団員数が少なかったからだと推測できる。たとえば、1927年には、タイの団員数は約3万5千人であったが、同時期の日本では、約85万6千9百人の団員数がいた。ちなみに、当時、世界一位を占めていたアメリカは、約573万8千6百人であった¹⁹⁾。これ以降のタイ少年赤十字の団員数は、現在のところ確認できないので、タイ少年赤十字の発展や国内活動の方針、それに国際活動の範囲や内容などは、今後の課題としておきたい。

ちなみに、1943年には「大東亜戦の勃発によって欧米との通信交換、贈物の贈答は中断」され、「満州国、中華民国、タイ国、仏印其の他可能の範囲に於て正月贈物を贈與すること」になったという。その際、人形や玩具も贈られたことが確認できる²⁰⁾ (図2)。

¹⁸⁾ Irwin, Julia F. Teaching “Americanism with a World Perspective”: The Junior Red Cross in the U.S. Schools from 1917 to the 1920s, *History of Education Quarterly*, volume 53, issue 3, Cambridge University Press, 2013, pp.255-279.

¹⁹⁾ 「各国少年赤十字団員数」『少年赤十字=The Japan Junior Red Cross』第2巻第2号、日本赤十字社、1927年4月、p.19。

²⁰⁾ 「お正月の贈物」『少年赤十字=The Japan Junior Red Cross』第17巻第4号、日本



図 2：共栄圏のお友達へ²¹⁾

この交流は戦前・戦中の最後の人形交流となったのか、その詳細が未詳である²²⁾。

以上のように、1926年に始まった少年赤十字団員による日タイの交流は、1930年代になると、『読売新聞』や、日本少年赤十字の機関誌においても注目される。この二つの資料から玩具贈呈の事例が、二例確認できた。しかし、少年赤十字団員と指導者は、クリスマスや新年にちなんだ贈答を重要視し、「返報・報恩的」方針をとっていたことを考えると、この二つの事例の他にも玩具交流が行われたことは容易に推測できる。そのことを証明するためには、タイ少年赤十字関連資料の調査が必要であるため、これも今後の課題にしたい。

次に、少年赤十字の国際活動とほぼ同じ時期に併行して展開された玩具贈呈の歴史を見てみよう。

赤十字社、1942年10月、p.20。

²¹⁾ 「共栄圏のお友達へ」『少年赤十字=The Japan Junior Red Cross』第18巻第1号、日本赤十字社、1943年1月、口絵。

²²⁾ 第二次世界大戦後、両国の少年赤十字の間で交流が復興されたようだ。その規模や頻度は未詳であるが、Thai Red Cross Youth Museum のホームページには日本から贈られた交換アルバムや人形が確認できる。

3.2 玩具贈呈

玩具贈呈の最も早い例は、1931年5月のものである。「おもちゃ祭り 二十六ヶ国へおもちゃ大使 無邪気な国民外交」という見出しの記事では、日本玩具協会から26カ国へ人形を中心に様々な玩具を集めて贈ったという記述が見える。

日本と親交ある二十六ヶ国の少年少女参列の上、サンタクロースそつくりの塚本靖博士が日本の少年少女から各国の少年少女への友情の印としておもちゃ大使を送るメツセージを述べる。おもちゃ大使は純日本風のお人形を中心とし、まはりに沢山のおもちゃをならべ(中略)各国へ送られ少年少女を通じて無邪気—国民外交が行はれる(『読売新聞』1931年5月9日朝刊第7面)²³。

つまり、日本玩具協会主催で26カ国へ「おもちゃ大使」が贈られ、「無邪気な国民外交」が実行されたのである。この記事では、「おもちゃ大使」が贈呈された国が具体的に示されていないが、別の資料からその内容が確認できる。斎藤良輔によると、1931年5月に「日本玩具協会主催の『おもちゃ祭り』が東京・日比谷公会堂で国際色豊かに開催、ドイツ、ロシア、シャム、インドほか在日大公使館関係など三〇カ国の外国児童と日本の子どもたちが交歓、日本側から『おもちゃ大使』と名づけて、日本人形や国産玩具入りの大きなおもちゃ箱を、各国代表の子どもたちに贈った」という記録が残っている²⁴。つまり、斎藤の記述から、玩具がタイにも贈られたことが確認できるのである。そして、「おもちゃ祭り」は子どもたちの交歓できる場となり、その際に日本人形や日本国産玩具が贈られたことがわかる。

²³ ちなみに、おもちゃ大使を送る前に行われた「おもちゃ祭り」の主催者になったのは、塚本靖東大名誉教授、閑屋文部省社会教育局長、巖谷小波、倉橋藤治郎、西澤笛畝、阿部文理大教授(いずれも日本玩具協会の会員であり、三越児童博覧会、「日米親善人形交流」などに携わった人物)であった。

²⁴ 斎藤良輔『昭和玩具文化史』住宅新報社、1978年3月、p.64。

これ以降も、玩具贈呈の事例がある。それは、1938年に東京吉祥寺明星学園の3～4年生60名と校長・照井猪一郎が横浜港に入港しているタイ軍艦を訪問し、艦長に桃太郎の人形を土産品として贈呈したというものである²⁵。

タイの前大使夫人への贈呈については、1942年1月11日の『読売新聞』の記事に記載されているので、その内容を見てみよう。

帝国児童教育会（会長秋元春朝子爵）では近く帰国するセナ前泰国大使夫人に一メートル大の汐くみの羽子板を贈ることになり十日午後四時宿舎帝国ホテルに石井理事長が持参贈呈、日泰両国の児童を通じての一層の親善強化を約した（『読売新聞』1942年1月11日夕刊第2面）。

この年、帝国児童教育会を代表した石井理事長は、セナ前大使夫人へ1メートルもする大きな汐波の羽子板を贈呈し、両国の親善を一層深化させることを約束したという。

この贈呈を主催した帝国児童教育会の国際活動は実に興味深い。同会は、1927年に国際子ども絵交換を実行したときから、徐々に国際活動を拡大している。国際活動は、交換や贈呈、展示などを通じて行われ、贈物や展示品は、絵や子どもたちの手工芸品、そして人形であったようだ²⁶。新聞記事を追っていくと、同会の活動が徐々に活発化していくことを確認できるが、タイとの交流の例はわずかしか出てこない。しかしながら、同会の活動の規模を考えると、

²⁵ 「シヤム艦長へ桃太郎のお人形 軍艦訪れて小学生」（『読売新聞』1938年9月16日第二夕刊第2面）。

²⁶ 帝国児童教育会の活動の例として、日満洲支の子ども作品交換・人形贈呈については「児童教育会の特使」（『朝日新聞』1938年7月25日朝刊第11面）、日支親善を深化させるため、東京小学校から支那の小学生への人形贈呈については「日支童心の握手 東京の小学生から可愛いお人形贈呈」（『朝日新聞』1938年10月19日朝刊第10面）、ベルギー大使への雛人形贈呈については「白国大使へ内裏雛」（『朝日新聞』1939年2月5日夕刊第2面）、支那の子どもたちへ石井理事長から「親善人形」の贈呈については「親善使 歩く人形 上海で大よろこび」（『朝日新聞』1939年7月9日朝刊第6面）などの記事が挙げられる。

本稿で取り挙げた事例の他にも、交流や贈呈があったことが予想される。さらなる調査が必要であろう。

3.3 おもちゃ使節

第二次世界大戦中、日タイの間の玩具贈呈に関する記録は、ほとんど見られない。1942年末に少年赤十字団員によって贈られた新年プレゼントが、唯一の例である。そして、終戦後の約7年間、両国の間で玩具贈呈が行われなかったようだ。しかし、1952年になると、日本独立にちなんで人形使節がアジア各国へ贈られていることがわかる。

物いわぬお人形でも外交官以上の動きが出来ますと藤娘、汐汲み、道成寺、花嫁など日本趣味あふれる人形七十三点がアジア各国に独立日本の善意を伝えるためお使いすることになり、(中略)サンカー・タイ国大使はじめフィリピン、インド、インドネシア各国代表に贈られました。サンカー大使は『私も故郷のタイの人々も人形は大好き、こんな立派な贈物を頂戴してみんなみんな大喜びでしょう』(『読売新聞』1952年8月9日夕刊第3面)。

このとき、日本から贈られた人形は、日本文化を象徴する汐汲み、娘道成寺、花嫁などの姿をしたものであり、その数は73体もあった(図3)。送り先は、タイ、フィリピン、インド、インドネシアを始めとする、アジア各国であった。人形を受け取ったタイ国の大使は、タイ人は人形が好きなので、この贈物はタイ人たちにも喜ばれるだろう、という感想を述べている。



図3：お人形とサンカー大使²⁷⁾

そして、一ヶ月後の『読売新聞』には、以下のような記事が載っている。

友愛の心をこめて日本からタイ国に贈られた娘道成寺、汐汲みなどの小さなお人形使節が大きな親善の実を結び、タイ国から日本人形の製作技術を修得し、逆にタイ人形の造り方を日本に教えるため留学生十名が近く来日するという話が進められている（『読売新聞』1952年9月11日夕刊第3面）。

日本から贈られた人形使節は、両国の親善を深化させ、タイ側の関心と呼んだようだ。日本人形に興味を抱いたタイ人は、日本人形の製作技術を学ぶことと、タイ人形の作り方を日本に伝えることを目的として来日したという。この人形使節は一方的に贈られたものであったが、結果として両国の間に交流が生じたのである。

これ以降、「世界友の会」主催によって実行されたのは、1957年の40カ国への人形親善使節²⁸⁾や、1959年の25カ国への人形使節²⁹⁾であった。1957年の

²⁷⁾ 『読売新聞』1952年8月9日夕刊第3面。

²⁸⁾ 「世界の四十ヶ国へ二百点の人形親善使節」『東京玩具商報』（復刊第68号）通号第541号、東京玩具人形問屋協同組合、1957年7月、p.84。

使節は、タイへも贈られたことが、その返礼品となった人形の写真を収録した
展覧会図録から確認できる。この図録には、タイの踊り子の人形の写真が載っ
ている²⁹。そして、1959年にもタイへ人形が贈られた可能性が高い。

ちなみに、「世界友の会」の活動については、以下のような記述がある。

昭和二十三年から、人形や桜の種子などを各国に贈りつづけてきた世界友
の会では、これらの返礼としておくりかえされてくる各国の珍しい人形を
計画的に交換しはじめ、現在五十四カ国三百五十点におよぶ世界の人形を
蒐集しました。(中略)すでにこれまで全国主要都市において展覧会をひ
らき、世界の人形の人気は、老若男女をとわず大変なもので、一都市で数
回に及ぶ展覧会が開かれたところも少なくありません³⁰。

つまり、「世界友の会」の活動は新聞の記事から見えるよりも、活発であつた
のである。この会が人形を贈り始めたのは、1948年のことであり、1963年時
点では、54カ国から350点にも及ぶ人形のコレクションが収集されたことが
わかる。さらに、人形交換は定期的に行われたものであり、外国からの人形は、
全国主要都市で出品されたという。

これらの人形贈呈は、各国の外務省・各国大使館及び日本外務省の力を借
りて交換されたものであり、「国際親善の結晶」として高く評価された³²。

さらに、1966年になると、全日本玩具人形小売組合連合会主催で「日タイお
もちゃ親善使節」が実行された。同会は、1956年に結成され、毎年東京都内の
保育園や福祉施設などに玩具をプレゼントする（いわゆるトイ・プレゼント、

²⁹ 「世界友の会の主催で二十五カ国へ人形使節 日本人形協会が百五十個を寄贈」『東京玩具商報』（復刊第91号）通号第564号、東京玩具人形問屋協同組合、1959年6月、p.114。

³⁰ 世界友の会編『世界の人形』保育社、1963年8月、p.5。

³¹ 同前、p.99。

³² 同前、「はじめに」より。

またはトイプレ) 事業を行っていた³³。

この会は1966年に10周年記念を迎え、初めて海外へのトイ・プレゼントの企画を立てた。これについては、1966年1月19日の『読売新聞』において以下のような記事が載っているのので、それを見てみよう。

この「日・タイおもちゃ親善使節」は全日本玩具人形小売組合連合会（鎗田喜三郎会長）の四十一人。同会では十年前から国内の身障児施設などに、おもちゃを贈りつづけていたが、ことしは「こどもの世界に国境はない。同じアジアの国の子どもたちにも」とタイ国大使を通じて申し込んだ（『読売新聞』1966年1月19日夕刊第7面）。

「日タイおもちゃ親善使節」は、バンコク国立孤児施設に向けて贈られたものであった。その際、約千点の人形とおもちゃが寄贈された。この使節の一員であった玩具評論家・斎藤良輔は、使節の目的について以下のような記録を残している。

（昭和：筆者補）四十年度日本からタイへ輸出した玩具総額は、わずかに二八万六千ドル。アメリカ向の六千万ドルに比べれば、その二〇〇分の一にも足りない。（中略）トイプレをおこなっても、商業的なPRにはならない、という声もきいた。しかし、それだからこそ「親善」の純粋さが生きてくるともおもわれた³⁴。

斎藤は、トイ・プレゼントが、決して商業的なPRではなく、純粋に両国の「親善」を願ったものであると強調している。

³³ その例として、「こんなに沢山うれしいな 生まれぬ子らにおもちゃとお人形の贈り物 本組恒例の児童福祉施設慰問 今年はマハナヤ学園と星美学園へ」（『東京玩具商報』（復刊第67号）通号第540号、東京玩具人形問屋協同組合、1957年6月、pp.47-49）などが挙げられる。

³⁴ 斎藤良輔『おもちゃと人間』雪華社、1967年7月、p.58。

この使節は、1月19日に日本を出発し、台北などを立ち寄って、バンコクへ向かった。そして、20日には国立ラジビティ孤児院で贈呈式が行われた。タイの子どもたちは、お礼としてタイ舞踊を見せてくれたようだ³⁵。その後、一行はシンガポール、香港などを視察し、1月27日に帰国した³⁶。

タイに向けての「おもちゃ親善使節」は1966年のものだけであるが、翌年には、「トイプレ海外版」の第二回目として沖縄および台湾を訪問し、「それぞれの施設へ玩具・人形をプレゼント」する計画が立てられた。「このため同小売組合連合会では、“沖縄台湾玩具親善使節”（約五十名）を十一月末日までに結成」したという³⁷。

ただ、これ以降は、全日本玩具人形小売組合連合会主催の玩具親善使節に関する記録は、見当たらない。1967年の使節が最後になったのか、以降の記録が載せられなかったのか、この点は不明である。

しかし、1979年になると、新たな使節が派遣された。同年4月3日の『毎日新聞』では、「世界平和の人形使節展」（第一次）に関する記述があり、そのときカップル市松人形1組ずつが「欧、米、アジア、アフリカの百カ国とスイスのエスペラント本部」へ贈られたという。各組は「平和のメッセージを添えて」贈られたことが報告されている（『毎日新聞』1979年4月3日朝刊第20面）。このとき、タイにも人形が贈られたに違いない。

4. まとめと今後の課題

最後に、本稿の内容を簡単にまとめておこう。

以上のことから、玩具贈呈に関わる日タイ関係は、1931年に始まり、様々な形で行われてきたことが明らかになった。この関係の先駆けとなったのは、両

³⁵ 鎗田喜三郎「日ータイおもちゃ親善使節記」『東京玩具商報』（復刊第169号）通巻第643号、東京玩具人形問屋協同組合、1966年2月、pp.18-21。

³⁶ 「東天紅」で解団式一日・タイおもちゃ使節団一」『東京玩具商報』（復刊第170号）通巻第644号、東京玩具人形問屋協同組合、1966年3月、p.62。

³⁷ 「玩具親善使節団の旅路決める 1月19日出発、沖縄、台湾へ」『東京玩具商報』（復刊第177号）通号第651号、東京玩具人形問屋協同組合、1966年10月、p.110。

国の少年赤十字団であった。日本少年赤十字は、1926年からタイへ通信交換品を送っていたようだが、人形と玩具を送る最も早い事例は1931年のものであったと推測できる。この交流は、第二次世界大戦までは、安定したペースで行われ、両国の間で様々な交換品が贈られた。そして、第二次世界大戦の勃発によって一時的に中断されたが、終戦後もある程度復活したと推測できる。

さらに、戦前の時期において、帝国児童教育会による玩具贈呈や、日本玩具協会主催の「おもちゃ大使」贈呈なども実行された。

現時点では、少年赤十字と帝国児童教育会による玩具贈呈の事例を少数しか確認できない。しかしながら、この二つの団体の性格を考えると、本稿で取り上げた事例以外にも交流や贈呈が行われたことは想像に難くない。これらを探るには、タイ側関連資料調査が必要であるので、これを今後の課題としたい。さらに、タイ少年赤十字団の方針や国際活動の範囲、国際通信交換品の種類なども非常に興味深い点である。

今回は少年赤十字の活動に注目したが、同時期に活躍したボーイスカウトもタイの同団体と深い関係を持っていたことがわかっている。両国のボーイスカウト（当時は、少年団とも呼ばれた）の交流の一例として、日本への象の寄贈が挙げられる。具体的にいうと、1935年に「シヤム少年団から日本少年団へ『平和の使節』として」2頭の象が寄贈された（『朝日新聞』1935年5月19日朝刊第11面）。この象が、「平和の使節」として贈られたことは非常に興味深い。

さらに、戦後になると、日本独立にちなんだ人形使節が贈られたり、全日本玩具人形小売組合連合会主催で「日タイおもちゃ親善使節」が派遣されたりした。そして最後の事例は、1979年の「世界平和の人形使節」であった。

これらの事例はいずれも両国の親善を願って行われたものであり、友好関係の維持と深化を目的にしたものであった。さらに、玩具をめぐる日タイ関係の特徴として、形の多様性と長期間継続が挙げられる。

前述したように、本稿ですべての事例を示したわけではない。むしろ、ほかに多くの人形使節や玩具贈呈が存在したものと推測できる。本稿は玩具を介した日タイ関係史研究のほんの第一歩にすぎない。

<参考文献>

斎藤良輔『おもちゃと人間』雪華社、1967年7月。

斎藤良輔『昭和玩具文化史』住宅新報社、1978年3月。

世界友の会編『世界の人形』保育社、1963年8月。

榎居孝「大正期・昭和初期の国際理解教育－1920年代～30年代の「少年赤十字」の国際交流活動－」『戦争と平和:大阪国際平和研究所紀要』第12号、大阪国際平和センター、2003年12月、pp.73-86。

Irwin, Julia F. Teaching “Americanism with a World Perspective”: The Junior Red Cross in the U.S. Schools from 1917 to the 1920s., *History of Education Quarterly*, volume 53, issue 3, Cambridge University Press, 2013, pp.255-279.

Starr, Laura B. *The Doll book*, The Outing publishing company, 1908.

Thai Red Cross Youth Museum のホームページ中「土産品」

(<http://rcythaimuseum.org/museum/sitemuseshowcat.php?catid=138>

: 最終閲覧日 : 2017年12月19日)

津島佑子が描く孤児
—『ナラ・レポート』「0 ごくまともなはじまり」と
「I ナラ」を中心に—
Yuko Tsushima's Orphan Imagine:
Focusing on Her *Nara Report's* "0 Gokumatomonahajimari"
and "I Nara"

ブリーチャーパンヤン・シャヤンポン

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 M1

要旨

津島佑子の作品は、女性の主人公や未婚の母の視点から描かれていることが多いが、2004年に発表された『ナラ・レポート』は亡くなった母を追い求める孤児の姿と母に対する孤児からの視点が描かれていることが特筆に値する。これは津島の作品にしては珍しい例であり、そのことの意味を考えるべきであろう。

本稿では、『ナラ・レポート』の「0 ごくまともなはじまり」と「I ナラ」の章に注目しながら、孤児が母と対面する場面や、孤児が母について言及する場面を手がかりとして、孤児文学としての『ナラ・レポート』を再検討する。なぜなら、この二つの章には、モリオと母が初めて再会する場面が用意されており、そこにモリオと母の互いに対する感情や価値観が読み取れるからである。

さらに、孤児を描く作品の中でも、『ナラ・レポート』と似ている場面を描いた谷崎潤一郎『少将滋幹の母』を例として取り上げ、本作と比較した。『少将滋幹の母』は有名な作品であり、孤児の母に対しての気持ち様が描かれ、亡き母も登場する。最後に孤児と母が再会した場面も描かれた。

『ナラ・レポート』は、子がシングルマザーを選択する母の生き方を認めていない状況を描く作品であると定義することができる。作中には母が〈権力〉を意識していない場面もあり、二人の意識のずれも表現されている。また、『少

将滋幹の母』を参照することで谷崎が描く孤児が母の美しさを求める一方、『ナラ・レポート』で描かれる孤児は母を美化しないことがわかった。

キーワード：津島佑子、孤児、シングルマザー、谷崎潤一郎

Abstract

Most of Tsushima Yuko's literary work were written in the point of view of women and unmarried women. However, *Nara Repoto* that was written in 2004, is the novel which represents the point of view of the orphan who chases after his dead mother and the point of view toward his dead mother which is a rare example of Tsushima Yuko's literary work. Additionally, this article shows revision and reconsideration on *Nara Repoto* by focusing on *Nara Repoto's* [Ogokomatamahajimari] and [I Nara]. This article mainly analyzes conversations between the orphan and his mother and situations that the orphan refers to his mother. These two chapters were written about the reunion between the orphan and his mother which would be possible that feelings and sense of values between two of them could be comprehended.

Moreover, this article selected Junichirou Tanizaki's *Shojou Shigemoto no Haha*, which was written about orphan's emotions towards his dead mother and the reunion between the orphan and his mother as was written in *Nara Repoto*, to compare with this novel.

As a result, by comparing with *Shojou Shigemoto no Haha*, the orphan that was illustrated by Yuko Tsushima in *Nara Repoto* did not appreciate his mother who chose to be a single-mother while the orphan that was illustrated in *Shojou Shigemoto no Haha* did beautify his mother. Moreover, *Nara Repoto* shows the differences between the single-mother and the orphan's consciousness of one's responsibility.

Keywords: Yuko Tsushima, Orphan, Single-mom, Junichirou Tanizaki

1. はじめに

1.1 タイ文学を視野に入れて

2007年、タイの女性作家アンシャンが『ムン・パーク・ローク』を発表する。この小説は、13歳の時に強姦された女性が主人公となっている。この女性はその後性欲の強い女性となり、奔放な性生活を送るが、男性に殺害されてしまうという内容である。この作品を解説するものには「女主人公の死は家父長制の社会を認め、自分の性を自由に扱っている女性を放棄している」^①というものがある。ここから、現代のタイ社会では、自分の性を自分で自由に扱おうとする女性に対して否定的な評価が与えられていることがわかるだろう。一方、『ムン・パーク・ローク』とはほぼ同時期に発表されている津島佑子『ナラ・レポート』にもまた、性を含めた自分の生き方を、自分の好きなように決定する女性が登場する。『ナラ・レポート』はそのような女性を取り上げることで、何を表現しようとするのだろうか。

1.2 『ナラ・レポート』のあらすじ

津島佑子『ナラ・レポート』は2003年から2004年にかけて「文學界」に連載される。そのあらすじは次の通りである。主人公、森生（モリオ）は二歳の時に母を失った。十二歳になった森生は母の魂を探すため、奈良公園の鹿を殺して耳を切り取る。一週間後、母がハトの姿で森生の前に現れると、森生は大仏を倒してくれと願った。母が大仏を破壊すると、二人の転生の物語が始まる。

1.3 発表者のこれまでの研究

『ナラ・レポート』の母子の関係に着目することで、母子は深い愛情を持っており、仏教が作った社会の価値観を批判し、抵抗する作品だと論じた。そして、母が子にどのように向き合っているかに注目することで母性と女性の自由

^① เสียงข้างน้อย. "มุมมองโลก:ผู้ชายตอนหลังกับขนาดผลของการถูกข่มขืน." [ออนไลน์]

<https://blogazine.pubcolumn-archivesnode/1621>

のもう一つのパターンを読み取った。母は自分を優先せずに、子供のために、母の役割を果たしているように見られたが、母の役割は「国民」として子供を育成するのではなく、人間らしく子どもを育成することであったと論じた。しかし、本稿はまた全く別の試みを行う。本作が孤児文学の側面を有するところに着目し、これがシングルマザーを評価する言葉を含む意味について考察する。

1.4 問題意識

『ナラ・レポート』には子どもの視点から母に対する思いが語られる箇所がある。従来、とりわけ注意が払われることはなかったが、子どもの母に対する感情や母の振る舞いに対する評価について考える必要はないだろうか。なぜかといえば子どもの視点からシングルマザーを捉えることではじめて見えてくることがあるはずだからである。

本稿では、シングルマザーをめぐるシングルマザー本人と子どもの意見の対立に注目しながら、孤児文学としての『ナラ・レポート』を再検討する。孤児はどのように描かれているのだろうか。孤児と母が対立する場面では、どのような対立が描かれているのだろうか。

2. 先行研究

2.1 シングルマザーをめぐる

本稿では、『ナラ・レポート』の孤児がどのように描かれているかという問題を中心としながら本作を再考しようとしているが、先行研究の概観をみると、シングルマザーを取り上げる作品について論じた研究としては、八木恵子（1980）、Amy Christiansen（1992）や小林富久子（2009）などが挙げられる。まず、八木恵子（1980）は、昭和55年に発表された三作『燃える風』、『山を走る女』、『幻』に登場する女主人公を際立たせているのは、このような性の衰弱ではない。ここでの「女」主人公たちは、「父なし」「未婚の母」という、世間的にはむしろ弱い立場に置かれ、それゆえに孤立する者たちである。津島佑子は、こうした主人公たちの「女」としての性のたくましさ、性感の豊

饒や「母親」であることを、肯定的に与える。そして、その上で、世間的に孤立した存在とされる主人公たちと肉親や他者との関係を模索しようとしているようなのだと述べている。それに対して、Amy Christiansen (1992) は、『山を走る女』において走るという行為を注目することで、登場人物の多喜子の社会から離れた孤独さをさすが、山姥的で、生理的な存在を表現している。それで、私達の周囲の社会的、体制的な現実を否定して、孤立した未婚の母の自分が受け入れられる世界を支えているのだと述べている。さらに小林富久子 (2009) は『山を走る女』について、実際には未婚の母でかつ生まれ付き身体に欠陥をもつ子を育てる多喜子は、家父長制が決める幸福へのパスポートの必要条件からは遠い存在にみえる。事実、多喜子は、望んだようには、神林と結ばれなかった。しかし、多喜子にとって神聖な場所としての「三沢ガーデン」の「山」で、神林と彼の知的障害をもつ息子、それに自身の息子の晶とともに過ごせる未来を手に行っているだけでも、十分「多くの喜び」をもつ女としてみられるべきだろうと指摘している。

以上の先行研究によると、70年代から80年代にかけての高度経済成長期の日本は、女性にとっては生き辛い状態であった。当時の津島佑子の作品から考えると、シングルマザーである女主人公は家父長的な価値観のもとにおいて立場が弱く、孤独な者と位置付けられていた。しかし、『燃える風』、『山を走る女』、『幻』では津島佑子は家父長的価値観が定める幸福から遠い存在のシングルマザーとして主人公を位置づけても、その主人公は喜びを十分に享受する人物として描かれていることが明らかである。では、『ナラ・レポート』における母についてはどのように考察されているのか見てみよう。

2.2 母に着目して論じられる『ナラ・レポート』

『ナラ・レポート』における母子関係や、母の心情について論じる先行研究の中で、川本三郎 (2004) は変幻自在のファンタジーを根底で支えているのは、繰り返し語られる母と子の別離である。若くして子供と別れなければならなかった母親の悲しみである」と述べている。そして、勝又浩 (2004) は少年の母恋

は、いつの間にか所を変えて母親のわが子への愛執、妄執の話に入れ替わってしまうと述べている。また梅原猛（2005）は津島佑子が描く作品は孤独に耐えながら自立する女性の姿や血縁で結ばれた家族の幻想性など、「母子」「家族」をモチーフにした作品を数多く書いていたが、『ナラ・レポート』は奈良の伝統文化をぶち壊す迫力を秘めている。人間が鹿（シカ）や鳥になるなど世界が自在に動き、その中に母子の悲しみが詰まっていると述べている。これらの作品解説からわかるのは、いずれも本作を母の立場や母の心情に沿って読もうとしていることである。川本氏は母親の悲しみについて述べ、勝又氏は、母の子への愛執を指摘し、梅原氏は母子の悲しみに言及している。

津島佑子がシングルマザーを作品に取り上げる際、その多くはシングルマザー本人の視点で描かれる作品ばかりであった。しかし、『ナラ・レポート』にはシングルマザーである母を見ている子の側の気持ちもはっきりと示されている。『ナラ・レポート』の多くの先行研究もまた母を中心にして論じている。モリオが孤児であることに着目し、そうした文脈で論じる研究はほとんど行われていない。次の章では、時空を超える前の亡き母を追い求めるモリオの姿や、二人の再会を初めて描く章である「ごくまともなはじまり」と「I ナラ」にまずは目を向けたい。

3. モリオと母のすれ違い

『ナラ・レポート』には、二歳で病気の母を失って孤児になったモリオとその母がめぐりあった後、それぞれ相手に対して求める要求が何であったかを見ていくと、そこにはすれ違いが見てとれる。孤児であるモリオは子の立場からシングルマザーである母をどのように評価しているか考察するため、モリオと母の対話を見ていく。

初めに、作品の冒頭「0 ごくまともなはじまり」の章において、モリオが母の魂を呼ぶため霊媒師に頼んだ場面を見ていく。母の魂を呼ぶ場面において、モリオは子どもとして、母にどのような感情を抱くのかを見てみよう。

少年は思いを集中させつづける。とまどいながらも確信をこめて、想像の重力に身をまかせる。確信はある。なぜなら、それは自分の母親にほかならないのだから。ずいぶん前にこの世を去っても、母親は母親にちがいないのだから。地上にひとり残してきた自分の息子に無関心でいられるはずはない。(5頁)

この語り手の言葉は、母親というものは死んだ後も子のことを気にかけるに違いないと考えるモリオの期待を示す。そして、モリオ次のように述べている。

〈.....お母さん.....、お母さん、としか呼べないから、お母さん、と呼ぶよ。
.....お母さんは感じたんだね、ぼくが泣いているのを感じていたはずだ。ぼくが悲しくて泣いているんじゃないということも。.....そんな涙をぼくは流さない。お母さんもそうだったんじゃないか？ ぼくのそういうところはお母さんととても似ているとも思う。男の子は母親に似ているって言うし。オババも、ぼくによくそう言う。と言ってもあの人はチチの母親だから、お母さんについてはなにも知らなくて、ただのイヤミとしてぼくに言うだけなんだけど。.....ぼくはつまり、くやしくて、腹が立って、すごく腹が立って.....。悪いことがどんどん起きている。悪いことしか起こらない。いよいよもう、どうにもならなくなってきた。.....お母さん.....、お母さんにはわかる。ぼくのやったことが理解できる。ぼくのお母さんなんだから.....。〉(9頁)

これはモリオの心の中の声であるが、ここでも死んでしまった母が自分の行動を理解してくれていると信じていることが示される。

次の章「I ナラ」は、モリオとハトになった母が対面し、生前の母と父のなれそめや、別れた経緯が明かされる場面を含む重要な章である。ハトとなった母はモリオにシカを殺した理由を問う。すると、モリオは次のように答えた。

うるせえな！ もとは、あんたのせいじゃないか。あんな男といいかげんに子どもを作って、そのうえ、さっさと死にやがって！

(中略)

「...それで、わたしのせいってどういう意味なの？ モリオ、わたしがいいかげんに子どもを作ったって、そんなはずないでしょ！」 (45-46 頁)

ここには、母に対するモリオの怒りが見られる。母が先に死んでしまったことで、モリオはナラに連れて行かれ、父にも見捨てられてしまったので、孤独感を抱きながら、ナラに閉じ込められているように感じていた。モリオにとっては母がモリオの人生を破壊した人なのだろう。というも、モリオは、母がいい加減に自分を作ったと考えているからである。しかし、引用の後半のように、母はそれを否定した。では母にとって、モリオの存在はどのような意味を持っているのか。「I ナラ」の記述を確認しよう。

母と父は外国で出会った。父は既婚男性で日本からの駐在員として外国で働き、外国での一人の生活を基本的には気楽に楽しんでいる人間として描かれている。母は半年の語学研修として、毎日、勤勉な学生生活を送っていた。もともと東京で働いていたが、会社が給料不払いになったので、レストランやビデオショップの店員として働きお金を貯めてから、外国に渡航した。母は人生に疲れを感じている。しかし、父と出会ってから、妊娠したことで、母の内面的変化が生まれた。まず、母にとって、森はどのような意味を持っているか確認するため、次の本文を見てみよう。

けれども、父との出会いが外国の都市だったこと、母の思いのなかではその重要性が光を放ちつづけていた。出会いの特別な意味が妊娠によって証明されたかのようだった。あの輝かしい五月の森は本当に、新しい物語のはじまりだった！ そんなことはない、東京で会おうがどこで会おうが同じこと、といくら自分に言い聞かせても、母はその思いから逃がれることができなかった。 実際のあの森にしろ、休日の昼間以外はひとりで行くべ

きではないとされている場所なのだった。街のなかでは出没を許されない性を売る女たちや女装の男たちが、その森を縄張りに行っていると言われていた。朝になればあちこちにコンドームが落ちている森は決して、童話の舞台などではなかった。(63頁)

父と母が出会った森は、実際には性が乱れている場所であると説明されるが、傍線部からは、森は母にとって父と出会った場所で、そこから母の新しい物語が始まったと考えるため、母は特別な意味を持つ場所であると考えていることがわかる。またその森とモリオの関係を見てみよう。

はじめて父と母が出会ったのが別の場所だったら、森生はこの世に誕生しなかったのだろうか。

母はある日、森のなかを散歩していた。父も同じ時間に、同じ森を散歩していた。五月の新鮮な緑が森全体を輝かせ、小鳥たちがその輝きのなかでさえずり、リスたちがせつせと一駆けまわる、そんな期間だった。(49頁)

(中略)

森生も知っているように、母はそののち、森でのこうした出会いがあったからこそ、この子どもが生まれたという思いをこめて、自分の産んだ赤ん坊に「森生」という名前をつけた。(53頁)

ここからも母が森という場所に自分だけの意味を与えていることがわかる。そして、次の箇所には、モリオの出産に対する、母の決意が表れている。

母は結局、父を無視したまま、森生を出産した。

そんな母にはつまり、父への「愛情」が欠如していたにちがいない、

と父にとって、このことはのちに、疑いのトゲになりつづけた。

愛情というものはこうした場合、あとさき考えず、相手に自分の悩み、苦しみ、痛みを浴びせるものではなかったのか。それなのに母は父を

求めようとはしなかった。いちばん大切なときに、父を見捨てたのだ。

もし、母が悩みを訴えていたら、自分はどんな助言を与えていたのか、母の希望に寄りそって森生の誕生を受け入れていたのか、父の関心はそうした部分を省略し、母が自分を見捨てた事実集中しつづけた。

(56頁)

母が父を無視したままモリオを出産したのは父を夫として頼らないことを表している。母にとって、父の存在は、恋愛を求める相手だが、頼る相手というわけではない。必要なときしか頼らないようにしているのである。モリオは自分のものであり、父と自分をつなぐ鎖とは見なしていないのである。しかも、父に出産を報告しなかった理由は、母にとって、自分が産んだ子どもは自分の新しい物語のはじまりの印であり、その印を自分だけのものとして独占し、子どもにとっては父の存在が不要というような生き方を選択したからだ。しかし、モリオはこのような母を否定しようとしている。子どもの立場からは自由に生きているシングルマザーを認めないことがわかる。

それから、母とモリオのすれ違いの様子について確認するために、他の点にも注目したい。本作にはモリオが母に要求を行う場面がある。そこには顕著にすれ違いが確認できるのである。モリオは母にシカ殺しを告白した後、母に大仏の破壊を要求した。なぜ、大仏を破壊しなければならなかったのか。前述のように、母は先に死んでしまったので、モリオはナラに閉じこめられたように感じていた。次に引用する箇所にはモリオがそのナラを認めず、不安感を持っていることが見受けられる。

〈……だから、ナラがいけないんだ。そうとしか言えない。ナラはぼくを認めないし、ぼくもナラを認めない。でも、ぼくはナラに住んでいる。今のところ、ここを離れることはできない。じっとしていたら、どうしたらいい？ ぼくがナラにつぶされて、こなごなにされて、シカのエサにされてしまう。だったら、どうしたらいい？ ぼくがナラを

ぶつつぶして、こなごなにしてやるしかないじゃないか。... (33頁)

モリオは母が死んだ後、父にナラへ連れて行かれ、父が生まれた土地であるナラに住むことになった。モリオは孤独で疎外されていることを感じているので、ナラで生きるのは辛く、ナラからも認められないため、ナラの中で権力を象徴している大仏を倒してほしいと要求している。その要求に対して母はどのように考えているか、次の本文を見てみよう。

〈大仏をこわしたら、あんたはこのナラで生きていけるの？ ナラの大仏
って、たしか、とても大きくて、とても有名なものだったわね。 太
仏がなくなれば、ナラは変わるって、あんたは言いたいよね！
ナラの大仏ってシカを信じたえらい人が作ったものなの？ えらい人って、
大きなものが作るのが大好きなのねえ。...でも、モリオ！ ねえ、あんた
はそんなにナラが嫌いな？ ナラって、そんなにいやなところなの？
ねえ、モリオ！ モリオ！ 〉 (45頁)

ここを見ると、母はモリオの気持ちが理解できないことがわかるだろう。母は大仏をなぜ破壊しなければならないのかと問いかけることしかできない。大仏を権力の象徴として捉えておらず、その存在を負担に感じてもない。ではモリオは大仏にどのような気持ちを抱いているのであろうか。次の引用を見たい。

〈モリオ！ モリオ！ わたしも泣きたくなる。シカを殺したぐらいで、
死刑になるわけないでしょ？ しっかりして！ 今は時代がちがうわ。
でも、あんたにはもう、逃げ場がないの？ ...もう、遅すぎるの？
本当に？ わたしのせっかく産んだ子どもがこんなに泣きつづけなければ
ならないなんて。あんたの笑顔を見せてほしいのに。...モリオ！ ねえ、
わたしはどうしたらいいの？ わたしになにができるの？ 〉

森生はしゃくりあげながら、悲鳴に似た声を出した。

ーだから……、だから……お母さん、あの大仏をこわしてよ！ ぼくにはむりだけど…、お母さんにはできるだろ？ ぼくは、あの大仏がこわい。ぼくを殺しに来るんだ。ぼくを見張りつづけているんだ！ (67頁)

モリオは、大仏さえいなければナラに生きつづけられると信じているが、自分で大仏を倒すことはできない。ナラ育ちであり、ナラに住んでいるモリオにとって、大仏は権力の象徴である。ナラの中にいながらナラから疎外されてきたと感じているモリオは、権力を思わせる大仏に強い恐怖を感じているだろう。しかし、母はその権力の存在を全く意識せずにいるのである。大仏への認識を通して、モリオと母の権力に対する意識のずれが見て取れる。

モリオの人生にとって大きな問題となったのは、まずは母がシングルマザーの道を選んだことであり、次に、母が病気になったことであった。母が亡くなった後は父がモリオを引き取るが、父にはもともと別の家族があった。モリオはナラに捨てられたも同然であった。モリオにとっては、ナラで生きることが辛いことだった。そのため、モリオはナラが嫌になり、ナラを認めなかったが、一方、ナラから自分のような存在が認められない不安も感じていた。しかし、子供であるモリオはナラから逃げられない。もし、母が先に死ななかつたら、頼るものが何もない境遇に陥らなければ、モリオは権力のすみずみまで行き渡る世界としてナラを意識することはなかっただろう。「0 ごくまともなはじめ」から「I ナラ」にかけて、モリオと母のすれ違いが描かれるが、それは権力の存在を意識するか、意識しないかの違いによって生じたすれ違いだと言える。

4. 孤児の系譜

本作には孤児としてのモリオと、亡くなったはずのその母との間の、ぶつかり合いやすれ違いが描かれる。そうした特徴がどのような意味を持つかを考え

るためにも、日本文学史を見渡し、亡くなった母を追い求める孤児はどのように描かれているか、今後追っていきたいと考える。本稿では、孤児の登場する作品の中でも有名であり『ナラ・レポート』と同じように孤児の思いが作中に語られる谷崎潤一郎『少将滋幹の母』をほんの一例として取り上げる。『少将滋幹の母』（1950年）は、左大臣藤原時平に美しい妻を奪われた高齢の大納言藤原国経の遺児である藤原滋幹が愛しい母の面影を追い求める物語である。滋幹の日記を通して、母についての記憶と母を追い求める愛が語られている。ここでは滋幹の母への愛着について見てみよう。

滋幹がそう云ふ齡になつてもなほ、母のことが忘れられず、折にふれては面影を想ひ浮かべてなつかしがつていたと云ふのには、尤もな理由が存するのであつて（373頁）

滋幹は年をとつても、一度だけ見たことがある美しい母の姿を忘れなかつたという。そして、母の美しい姿に対する感情も表わされている。

滋幹は、後にも先にも母の顔をまぎ／＼と見たのはその一瞬間だけであつたが、而もその時の目鼻立の印象と、その美しさの感銘とが、長く脳裡に焼きつけられて、生涯消えずにゐたのであつた。（376頁）

美しい母の姿はずっと滋幹の記憶に残っている。ここからみると、孤児は母の美しさに愛着を持っていることがわかる。さらに、この愛着の強さの様子を見てみよう。

父が折角美しい母の印象をそのままに大切に保存しようと努めないで、それをことさら忌まわしい路上の屍骸に擬したりして、腐りたゞれた醜悪なものと思ひ込もうとするのは、何か、憤りに似た反抗心の湧き上るのを禁じ得なかつたのであつた。実際、彼はもう少しで、

「お父さま、願ひです、私の大好きな母さまを汚さないで下さい」

と、話の途中で幾度か叫びたくなつたのを、辛うじて怵へたのであつた。

(386頁)

滋幹が、母の美しさを強く感じており、さらにその美しさを永遠に保存したがつていることが分かる。傍線部からはその母の美しさを清く美しいままにしておきたいという感情も読み取れた。次に母と再会した様子を見てみよう。その場面の記述は次のようになっている。

白い帽子の奥にある母の顔は、花を透かして来る月あかりに暈されて、可愛く、小さく、円光を背負つてゐるように見えた。四十年前の春の日に、几帳のかげで抱かれた時の記憶が、今歴々と蘇生つて来、一舜にして彼は自分が六七歳の幼童になつた気がした。彼は夢中で母の手にある山吹の枝を払ひ除けながら、もっと／＼自分の顔を母の顔を近寄せた。そして、その墨深の袖に沁みてゐる香の匂いに、遠い昔の移り香を再び想ひ起こしながら、まるで甘えてゐるように、母の袂で涙をあまたゝび押し拭つた。

(392頁)

作品の結末の場面では、滋幹は出家した母が住んでいる西坂本の家に入った。滋幹はそこにある桜の木を見ると、母が現れ、母と再会することになる。滋幹は匂いで昔の思い出が蘇つたと語つた。ここから息子が母を追い求めていたことがわかるが、その母は高齢の母ではなく、若く美しい母である。

『少将滋幹の母』は、孤児の立場から母という存在は永遠に美しい女性であることを描いている。そして、その母の姿を清く美しいままにしておきたいという感情も表されている。それに加えて、母に対する批判の言葉も見られない。これに対して『ナラ・レポート』では、我が子を孤児にしてしまった母について、その容姿や美しさには触れられず、その代わりに母の選び取つた生き方を批難する言葉が見られる。

5. 結論と今後の課題

本稿では、『ナラ・レポート』の「0 ごくまともなはじまり」で孤児とシングルマザーがどのように描かれているか考察してきた。その結果、孤児となったモリオはシングルマザーの生き方を選択した母を認めていないことがわかった。そして、この母とモリオは〈権力〉の存在を意識するかしないかによってすれ違っていることがわかった。また、母恋いのテーマを持つ作品として有名な『少将滋幹の母』を参照することで『ナラ・レポート』には母を恋しく思い、求めていたとしても、その存在を美化しない孤児が描かれていることを明らかにした。

今後は、本稿で取り上げなかった「タカマド山」、「ナラ坂」、「ヨシノ」、「カササギ」と「00 大仏供養」の章を考察していく。そして、母恋いのテーマを持つ作品を幅広く検討し、日本文学史上に本作を位置づけたい。

<本文>

谷崎潤一郎『谷崎潤一郎集（二）』筑摩書房、1956

津島佑子『ナラ・レポート』文藝春秋、2004

<参考文献>

勝又浩「「ナラ・レポート」津島佑子—古物語の蘇生の母子叙情の飛翔—」『文學界』2004年12月

川本三郎「母と子をめぐるファンタジー」『新潮』2004年12月

小林富久子『フェミニズム文学批判』岩波書店、2009、169-172頁

八木恵子「津島佑子」『「国文学」解釈と鑑賞』1981年2月

「「肉体滅びても記憶、言葉残る」新作「ナラ・レポート」、津島佑子さんに聞く」『読売新聞』2004年11月1日大阪朝刊

「人と作品—説話・説経節から浮かび上がる日本の裏面史—津島佑子と『ナラ・レポート』」『有隣』2004年

「紫式部文学賞：『ナラ・レポート』津島佑子さんに称賛の声—贈呈式」『毎日

新聞」2005年11月25日大阪夕刊

Amy Chirstiansan 「津島佑子と山姥」『国際日本文学研究集会会議録（第16回）』1992年11月

เสียงข้างน้อย. “มุมมองโลก:ผู้ขายต่อแหล่งกับบาดแผลของการถูกข่มขืน.” [ออนไลน์]
<https://blogazine.pubcolumn-archives/node/1621> (8月12日最終閲覧)

日本におけるトイレ掃除文化の考察

On the Culture of Toilet Cleaning in Japan

孫 銘陽

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 M2

要旨

現代日本において、トイレ掃除が重要視されている。トイレをきれいに保つことが、個人修養や企業文化、そして国のソフトパワーの重要な一部になっているのである。トイレ掃除を社是とする会社も日本では決して少なくない。

本稿は、日本のトイレ掃除文化を分析し、日本人がトイレ掃除を重要視している理由を明らかにするものである。とりわけ本稿では、その基盤となっていると思われる文化と、それが今日の企業文化とどのように関わっているのかについて考察する。

たとえば、禅宗においてはトイレをきれいに保つことが大事な修行の一つとして定められていたり、茶道の世界においては「雪隠拝見」がおもてなしの一つの方法として考えられたりしてきた。それに加え、トイレや廁神に関する民間伝説や口伝などの戒めが現在も多く残っていることから考えると、日本においてトイレを清潔にすることがいかに重要だったとされてきたかがわかる。現代の日本企業の中にも、トイレ掃除を重要な個人修養として守る経営者は少なくない。そうした経営者によると、トイレ掃除をすることは、従業員の育成に寄与するだけでなく、経営にも良い影響を与え、それが利益にもつながるといふ。

要するに、現在の日本のトイレ掃除文化は日本の伝統文化に基盤を持つものであり、現代の経営者たちもトイレ掃除が有する効果を利用しているのである。
キーワード：便所文化、トイレ文化、トイレ掃除、企業文化

Abstract

In present-day Japan, toilet cleaning is highly valued, as a part of self-cultivation, corporate culture, and even the country's soft power. Numerous Japanese companies even include toilet cleaning in their company policy.

This paper will analyze the Japanese toilet cleaning culture and aims to clarify as to why toilet cleaning is regarded as important in Japan. We will focus on two parts: the traditional cultural elements that can be considered the foundation of the Japanese toilet cleaning culture, and how these are linked to company policies in present-day Japan.

For example, in Japanese Zen Buddhism, keeping the toilet clean when using it is considered a part of the training. In the Japanese tea ceremony, cleaning the toilet before visitors arrived is considered one of the basic principles of hospitality. Furthermore, the many traditional folk tales about “the toilet god” stimulate people to keep the toilet clean. These examples show that toilet cleaning has occupied an important place in Japanese culture. As for contemporary Japan, some of CEOs regard toilet cleaning as an important part of self-cultivation. According to them, having employees clean the toilet, contributes not only to employee development, but also greatly influences management, which in turn leads to higher profits.

In conclusion it can be said that Japan's present-day toilet cleaning culture has its roots in traditional culture, and is also used as an effective management method by CEOs in contemporary Japan.

Keywords: toilet culture, toilet cleaning, corporate culture

1. はじめに

世界中で、トイレが国の重要文化財として認定され、貴重なものとして保存されている国はたしてあるだろうか。日本には重要文化財に指定されている便所建築がいくつか存在している。そのなかでもとりわけ有名なものは、1902年に現存最古の便所建築として重要文化財に指定された東福寺の東司(トイレ)である。日本以外にこのような国があることを、筆者は寡聞にして知らない。

他方、現在の日本のトイレにおける多機能さ、利便性の高さ、清潔さは、日本のソフトパワーの一つであるときえ言えるだろう。2010年の上海国際博覧会の際、日本産業館で植村花菜が日本で大ヒットした「トイレの神様」という歌を歌ったことや、展示会場に「世界一トイレ」と称された黄金のトイレが展示されたことは、現代日本におけるトイレに対する関心の高さを雄弁に物語る出来事であるといえよう。

2015年、東京成田国際空港で「GALLERY TOTO」という体感型ギャラリーが設置された。そこでは「日本の快適なトイレ文化と技術力を、ここ成田国際空港から世界に発信したい」という目標が掲げられた(GALLERY TOTO公式ホームページ)。

ところで、日本のトイレの優れている点は、常に清潔に保たれていることである。その背景には、頻繁な清掃とチェックがある。特に不特定多数の人が使うトイレの清潔さは、管理する立場にある人や経営者の考え方を如実に反映し

ていると考えられる点に特徴がある。飲食店や百貨店などでは、トイレを清潔に保つことが、「お客様を大事にしていますよ」ということをアピールとほぼイコールの関係にある、と考えられているのである。翻って言えば、トイレが清潔でない店は客のことを、まったく考えていないと解釈されても仕方がないのである。

企業においても、トイレをきれいに掃除することが重視されている。ここでは、企業経営理念や従業員育成倫理の一部としてトイレ掃除が実行されている。企業内の組織を一体化させるために、社長から社員まで全員が参加してトイレを掃除するという活動が見られるのである。もちろん、トイレ掃除は「下層の人がやる仕事」、「汚い仕事」などと考える人も少なくないだろうが、その一方で、トイレ掃除こそが仕事の基本であると考える人も少なくない。したがって、トイレを綺麗に掃除する事は、自分の内面を整える作業であり、その作業をすることによって心も磨かれると考えるのである。

ともあれ、以上のことから、日本では、個人から民間企業、国に至るまで「トイレ」に高い関心を示していることや、その背景には様々な思いや考えが存在する事がわかるだろう。

したがって、本稿の目的は、現在の日本のトイレ掃除文化の起源となった思想やその歴史的発展と定着過程をまず明確にし、その後、日本においてトイレ掃除が重要視されている理由について考察するものである。

2. 先行研究と参考資料

2.1 先行研究

日本のトイレ掃除文化に関する先行研究は、二種類に大別することができる。一つ目は、トイレ空間と便器に注目する研究である。これらの研究は、数多

く存在しているが、例として以下のようなものが挙げられる。

李家正文 (1932、1961) は、トイレの歴史や俗信を網羅的に調査し、廁の「掃除衛生」について考察している。例えば、日本では古代の宮廷のトイレ掃除が賤人の職業であり、トイレ掃除が刑罰の一種であったことが指摘されている。また日本以外の多数の国においても、昔の廁は汚い場所だとされたところも述べられている。一方、自主的にトイレ掃除をした人物や、トイレにまつわる事件なども例示されている。ただし、李家の研究には、雑考も多く、紹介にとどまっている事項も少なくなく、分析も系統的になされていない所もある。とりわけ、トイレ掃除文化に関する考察は、事件や関わった人物の貢献に関する記述にとどまっているといううらみがある。ただ、李家の研究はトイレ研究の先駆的なものであり、李家によってトイレが研究対象となった点は高く評価していいだろう (李家 1932、pp.335-365)。

谷直樹・遠州敦子 (1986) は便所の歴史、便所と生活、風俗との関係を考察している。日本において昔からトイレ掃除が重要視されてきたことについてもいくつかの言及が見られる。例えば、茶人の千利休は雪隠 (トイレ) 拝見を行ったことや、トイレの神様の伝説などが紹介されている (谷・遠州 1986、p.13、p.29、p.75)。ただ、これらの話が日本のトイレ掃除文化と関わっていることを示していない。

大野盛雄・小島麗逸 (1994) は日本、韓国、中国に代表される東アジアの国々だけではなく、東南アジアや南アジアなどを取り入れアジア各国の屎尿と生活、社会との関係、そしてトイレ事情を概観し、考察した。しかし、日本のトイレ掃除文化、その歴史や関わる思想はほとんど扱っていない。

屎尿・下水研究会編 (2016) は「トイレで日本再発見」という発想を基にして、トイレの歴史を概観し、屎尿処理、屎尿の価値が変わっていく過程を考察

している。この研究ではトイレが「クールジャパン」と呼ばれていることが示され、現在日本のトイレは日本文化のソフトパワーになっていることも指摘されている。そして、この研究は日本のトイレがどう変わってきたのかを考察しているものであるが、分析が主に機能的変化に集中し、清潔的な面に至っていないのである。

これらの研究はトイレの歴史と文化的背景を取り上げ、トイレと社会生活の関係性を探求しているものであるが、日本人が持っている「トイレをきれいに掃除すべき」という意識の起源や成立過程などについては考察していない。

二つ目は、経営学の視点からトイレ掃除の効用を分析する研究である。例えば、大森信（2011、2015、2016）は近代企業の経営学の角度から、トイレ掃除の効用を分析した。具体的には、近現代のトイレ掃除を大切にしている経営者に関する分析を行なっている（大森 2016、pp.33-72）。そしてトイレ掃除をする企業を三種類に分け、それぞれのトイレ掃除の場所、必要性、効用、実施方などを分析した（大森 2011、p.106）。

さらに、山本健治（2017）はトイレ掃除の個人性格への影響と経営的効用を、例をあげながら分析している。例えば、松下政経塾の掃除思想、丸井と中野のトイレ掃除テスト、三越百貨の「トイレを東京名所にする」エピソードなどの例を挙げながら、トイレ掃除の企業経営への効用を考察している。（山本 2017、pp.169-186）

大森の一連の研究と山本（2017）はトイレ掃除を企業の管理法の一つとして扱っている。この管理法の効果は経営の倫理という視点から分析されている。しかし、経営の倫理に関わる思想はいつ、そしてどう発展してきたのかという疑問が残る。

高木裕宜（2006）は日本の近代企業における掃除を含めた 5s（整理・整頓・

清潔・清掃・躰」というスローガンをもとにした活動の展開を明らかにしている。高木によると、安全衛生運動は戦前、戦後を通じて一貫して存在していたものであったが、「5s 運動」は標語として初めて整えられたのは戦後のことであつたと指摘している。高木の研究は、現代企業における掃除思想の発展過程を明らかにしたもののだが、トイレ掃除の思想の考察には至っていない。

これらの研究は、近現代企業におけるトイレ掃除を経営法の一つとして明示しているが、トイレ掃除をする行為を文化的視点から全面的に考察していない。そして今までのトイレ掃除を大切にしている意識の形成と定着過程に全く注目していない。

以上のように、日本におけるトイレ掃除の思想を対象とした研究は、管見の及ぶ限り、欠如の状態である。そして、現在の日本におけるトイレ掃除の思想はどこから発展してきたのか、また一般「汚い仕事」と考えるはずのトイレ掃除は、日本においていつから好評されるようになったのかという疑問が残っている。本研究においては、トイレ掃除の基盤となった思想に注目し、現代日本においてトイレ掃除が重要視されている理由をより明らかにしたい。さらに、近現代の宗教者や企業者の活動に注目し、この思想がどのように受け継がれたのかを分析したい。そのため、以下のような参考資料を扱いたい。

2.2 参考資料

トイレ掃除に関する思想や民間伝承、そしてトイレ掃除を重要視した人、団体、企業などの活動を伝える資料が数多く存在している。そのなかで、人物の伝記や書物、社会団体の機関誌、そして企業の社内報などがあれば、民間伝承や思想をまとめたものもある。

李家正文の『厠考』(六文館、1932年)では、1930年代の日本トイレの衛生や掃除の実態、そして当時の事件などについて書かれている。例えば、関東大

地震大火災直後、青年団が自発的に滝野川のトイレ掃除をした美談、そしてある家のお嬢さんが一燈園に入って便所掃除をした話などが記載されている。

宮田昌明の『西田天香—この心この身このくらし—』（ミネルプア書房、2008年）では、西田天香の生涯と入道した契機を分析し、そして西田天香の講演活動と一燈園の六万行願を詳しく記載されている。

松下幸之助の『決断の経営』（PHP 研究所、1979年）では、従業員を育て方の一つとして、自分でトイレ掃除をした経験を詳しく述べた。さらに、松下政経塾の成立からの経緯や松下の掃除思想が多数の人に受けられてきた過程に関する言及も見られる。

鍵山秀三郎の『掃除道—会社が変わる・学校が変わる・社会が変わる—』（PHP 研究所、2005年）はトイレ掃除をする動機、トイレ掃除の方法、「日本を美しくする会」の活動について詳しく述べられており、特に「日本を美しくする会」が各種の勉強会や実際の掃除活動に注目している。さらに、会社・学校・社会に至るまで影響力を広げてきた過程は、実例を基にして考察されており、現在の日本のトイレ掃除文化を知るには重要な手がかりになっている。

3. 現代日本のトイレ掃除文化の基盤となった思想

昔の日本において、トイレ掃除を重要視する思想がいくつか見られる。このような考え方は当時主流ではなかったかもしれないが、後世には影響を与えたと考えられる。この章では、トイレ掃除に関わる思想を紹介したい。

3.1 禅宗の修行

日本の禅宗文化において、便所は重要な地位を占めている。七堂伽藍とは寺院の具有すべき堂宇の総称であるが、禅宗では浴室と並んで東司（便所）を七堂の一つと数えている。これは、禅宗の思想が経文や儀礼のみならず、日常生活も重視していることを示唆していると考えられる。

鎌倉時代に曹洞宗を開いた道元禅師によって書かれた『正法眼蔵』の中で、「洗淨」の巻があり、そこでトイレ掃除について以下のような記述が見られる。

(便槽の：筆者補) 両縁を汚してはならない、便槽の前後にかけてはならない。(中略) 鼻水や唾を周囲に散らしてはならない。(中略) 箆を使いあるいは紙を使ったのち、洗淨するには、右手に浄桶を持ち、左手を十分に濡らしてから、左の掌を窪めて水を受けて、まず小便をした部分を三度洗淨する。次に肛門を洗う。このようによく洗淨して清潔にせねばならない。

(道元・石井恭二訳 2004、pp.333-334)

『正法眼蔵』は、道元禅師が弟子や大衆に説示した教えを集めた仏教の思想書であり、日本曹洞宗の最も重要な根本教典である。それと同時に、哲学書としても評価されている。そのなかで、便所に行く時に守るべき行動規範を明らかに定め、用便時に便所をきれいに保つこと、用便後に便所を洗淨することが具体的に規定されている。

3.2 茶道の精神

茶道の世界においても、トイレをきれいに掃除することが重要視されていたことを示す例が見られる。茶道の精神の一つはおもてなしの心である。お茶と茶道具だけではなく、茶室や露地庭も心込めて怠ることができない。この精神は、雪隠（トイレ）の扱い方にも反映していた。利休は茶会でおもてなしの一つとして雪隠拝見をしたという記録がある。これについては、谷・遠州（1986）の研究で以下のように述べられている。

利休の教えを伝えている『南方録』によれば、茶会の当日になると亭主は雪隠を特別に清掃し、また招かれた客はわざわざ雪隠の内部を見て、亭主の心配りに感じ入るのが作法とされていた。いわゆる雪隠拝見である。(中略)『譬喩尽』に三物と題して、「茶の湯せば 亭主に三つの 馳走あり 酒・飯・雪隠 気をば付くべし」とある所以である。(谷・遠州 1986、p.29)

つまり、茶会の当日、酒と食事のほかには大切なのは、トイレ念入りに浄め、客を招く亭主の心得であるという。これは茶の湯の精神である。お茶の世界において、トイレを掃除することはおもてなしの一つとして重要視されていたことをこの記録からうかがえる。

3.3 民間伝承

先行研究のなかで、特に李家正文(1932)、谷直樹・遠州敦子(1986)、そして大森信(2016)は、トイレ掃除に関する民間の伝説や戒めについて言及している。本節では先行研究からトイレ掃除に関する民間伝承を収集し、再まとめをする。

まず、昔の日本において、廁神についての伝承が残っている。昔の便所は暗く、気味の悪い場所だったので、昔の人々は便所に廁神がいると信じ、悪い神や怨霊が取り憑かないように廁神に願っていた。

谷・遠州(1986)は、廁に美人の神様ががいるという伝承を伝えている。便所を新築する時に便壺の下に紅・白粉・鏡・針などを埋める風習が残っている地方がある。これをしておけば、美人の神様がきて、便所を汚くする悪神が取り憑けなくなると昔の人が信じていたのである。(谷・遠州 1986、p.75)

また、廁神に関する伝説のなかで、出産と関係する話が少なくない。これら

を二つの種類に大別できる。

一つ目は、トイレ掃除をよくすると、神様が喜び、人がご利益を受けることについての話である。例えば、妊婦が便所を掃除した後、「鼻高くなれ、鼻高くなれ」と唱えて鼻をさすると、鼻の高い子が生まれる。あるいは、生まれたばかりの女の子をトイレに持ってきて「雪隠参り」をさせると、えくぼができて愛嬌のある綺麗な娘になるという類の口伝が残っている。(谷・遠州 1986、p.75)

その一方、便所を汚いままにしておくと、廁神の罰が当たる。例えば、生まれてくる子どもが不幸になるという伝承がある。(谷・遠州 1986、p.75) また長崎市附近では難産の時や正月の前、12月29日に廁を清潔にして燈明をつけるという風習がある。飛騨地方では「廁神の手伝いがないと出産が軽くない」という口伝がある(李家 1932、p.196)。

他に、トイレ掃除を勧め、トイレ掃除を怠ってはいけないということを強調する口伝が残っている。例えば、「廁の掃除如何を見れば一家の主婦の心の締り工合がわかる」という口伝がある(李家 1932、p.201)。鳥取の家庭や村落に伝わる禁止事項の一つとして、「便所と壺所の汚いのは女の恥」という戒めがある。愛知では掃除や整理整頓のできている者を尊敬する「ギダンシヤ」と呼び方が残っているようだ(大森 2016、p.45)。

以上に取り上げた民間伝説のなかで、特に女性がトイレを掃除することが勧められている傾向がある。さらに、戒めを見ると、トイレ掃除は主婦の責任として考えられているのがわかる。このような習慣や伝承は今の日本人のトイレ掃除の習慣に影響を及ぼしたのではないかと考えられる。

3.4 まとめ

以上述べたように、現在日本のトイレ掃除文化の基盤には三つの思想があると確認できた。禅宗の修行において、用便するときにトイレの清潔さを守るべくという規範意識がみられ、茶道のおもてなしの精神からみると、トイレを清

潔に掃除することも重要視されていたのがわかった。さらに、民間伝説や戒めでは、トイレ掃除、特に女性がトイレ掃除をすることが強く求められたこともうかがえる。

もちろん、現在日本のトイレ掃除文化の背景には、必ずしもこの三つの思想のみ存在していたとは限らない。ただ、この三つの思想は、現在のトイレ掃除文化の根元にあったことは間違いないだろう。

4. 近現代日本におけるトイレ掃除文化

第3章で考察したトイレ掃除文化の基盤となった伝統的思想や民間伝承は、現代日本のトイレ掃除文化の形成に大きな影響を考えたと思われる。しかし、近代以降の日本においても、多数の宗教者、経営者、社会活動者の努力も不可欠の条件だったに違いない。彼らはトイレ掃除を重要な個人修養として守り、そしてそれぞれ違う方法で他の人にも影響を与えてきたのである。彼らの努力によって、トイレを掃除するという行為は企業、学校、社会全体に至るまで影響を及ぼしたと思われる。これらの人物や社会団体などの活動を本章で紹介したい。

4.1 西田天香と一燈園

西田天香(1872~1968)は思想家、宗教家である。彼は1910年代に宗教者として活躍するには、我を捨てて、神仏への感謝と奉仕の精神に基づく無償の労働をしていた。一燈園は、西田が1905年に創立した社会奉仕団体である。一燈園の活動を支えた「六万行願」は、他家の便所の掃除することを通じて下坐の心を養い、争いのない世界の将来を祈り念ずる行であった。この活動の際には、西田らが京都・滋賀を始め、日本各地の家庭や学校、事業所等を訪問し、

無償で便所の掃除をしていた。

一燈園の活動と「六万行願」の歴史を追っていくのは、宮田昌明（2008）の研究である。宮田によると、一燈園の機関誌として発行された『光』では、1936年3月1日からの6日間の「本格的六万行願の事始め」、「最初の六万行願」について記載されている。この行願には小中学の生徒51名が参加したという点も画期的であった。宮田は行願についての小学生の感想を取り上げているので、それを見てみよう。

行願が終わった後、小学生が「私の六万行願で一番感じたことは、学校のお便所掃除をさして頂きに行くと、わいわいさわいで、おしよせて来られます。そして有難うと言われる人や、『便所掃除、便所掃除』とはやされる人もあります。有難うと言った人は大変お行儀良い人ばかりでした。私は、先生の前ばかりでお行儀がわからないで、こんな所からわかるのでと思ひました」という感想文を提出している。（宮田 2008、pp.232-233）

そして1937年3月1日からの6日間、第二回六万行願の大結成が行われた。そのとき、参加者は千4百名余、1万2千戸余の便所掃除を通じて契縁を行ったようだ。そして、これ以降の行願は、一燈園の中心となった機関光泉林から、より一般人の参加を想定する智徳研修会に移り、より広い範囲の一般人の参加が可能になった。

一燈園の活動に関する記述は、李家正文の『廁考』でも見られる。

廁の掃除は賤人にのみ限つたわけではなく、昔者雪隠和尚自ら廁を清められ、或いは先年某家の令嬢も共同奉仕をした。先年新聞で某家の令嬢が一

燈園に入つて便所掃除をして居た珍しく掲げてありました。(李家 1932、p.339)

李家は近年、トイレ掃除は、賤人のみ行う仕事ではないと主張している。その証拠として、一燈園の活動に参加し、トイレ掃除を行ったある家の娘の活動を挙げている。

また、鈴木清一も一燈園の影響を受けている人物である。彼は、1938年に一燈園で身を投じ托鉢求道の生活に入る。そして、1958年にケントクの前身となったケントク新生舎を創立し、1963年に「清掃・衛生用品のレンタルと販売、プロのお掃除サービス」を扱う会社ダスキンを創業した。鈴木清一の「物心ともに豊かになり」という思想は、愛と奉仕を捧げ、他人のために力尽くすことによって、お互いが「生きがいのある世の中にする」と願っている。これは西田天香の「物集まらざるは恥なり。集めた物を己の物とするも恥なり。」の精神を生かされたものである(株式会社ケントク公式ホームページ)。

当時一燈園の活動は宗教的活動ではあったが、それと同時に実際に社会に影響を与えた活動でもあったと言える。一燈園のトイレ掃除活動を参加し、深くその影響を受け、その事業の精神を受け継いで活動を続けていった人たちが多く存在していたのではないかと推測できる。この人たちは、現代のトイレ掃除文化にも影響を与え、トイレが清潔に保たれるべきところであるという思想の拡大に貢献したのではないかと推測できる。

4.2 松下幸之助

大森信(2016)によると、経営の神様と呼ばれる松下幸之助も、トイレ掃除にこだわりを持った経営者である。松下幸之助は『決断の経営』のなかで以下

のように書いている。

たしか大正十二年、関東大震災のあった年の暮れである。松下工場は、年末の仕事じまいで朝から大掃除をした。(中略)ところが、ふと便所を見してみると、ここは少し様子がちがう。整理されていない。そこで、これはどうなっているのかとよくよく見たら、なぜかここだけ全く掃除ができていないのである。そこで私はいぶかしく思ってみんなの顔を見回したのだが、誰も知らん顔をして掃除しようとしな。また掃除を命じるべき立場にある者たちも命じようとしな。そこで私は、よし自分がやろうと考え、バケツに水をくみ、ホウキを手にもって掃除にとりかかった。水を流してホウキで床をゴシゴシこすってきれいにした。(松下 1979、pp.184-185)

松下幸之助が述べているように、会社の従業員たちは掃除するとき、「トイレもきれいに掃除する」意識を持ってなかつた。社長であった松下幸之助は、社員たちの前で自ら手で丁寧にトイレを掃除する見本を示し、「トイレ掃除は汚い仕事や下層の人がやる仕事ではない、トイレをきれいに掃除することはいいことだ」ということを従業員に伝えようとしたのである。

4.3 本田宗一郎

大森信 (2016) によると、本田宗一郎は徳義心を社内に呼びかける文章を書いた。

創業員諸君に、わたしが「工場を綺麗にするように」と、云うのは、外面を繕うためではありません。工場を汚くし、不整理、不整頓のままにして

において顧みないような心からは、決して、優れた製品は生まれないからです。工場は、全従業員の生活するところです。ここを整えようという心の無い人に、優れた製品が作れるはずはありません。(大森 2016、p.40)

本田宗一郎は、掃除や整理整頓の大切さを社内報で示し、皆んなで掃除と整理整頓をしようと提唱していた。

その後も本田の社内報で作業の環境を綺麗にし、整理整頓と掃除の大切さを示す文章が載っている。本田は、ドイツの工業参観した後、ドイツの工場がよく整理整頓されているので、それを学ぶ必要があるということを提唱した。本田宗一郎が提唱した整理整頓は工場の効率を高めるためだけではなく、従業員たちの徳義心を養うためでもあった。掃除することによって従業員の心構えを整えるという経営者の考えは本田が提唱したことで明確に現れている。

4.4 鍵山秀三郎と日本を美しくする会

トイレ掃除を大切にしていることで最も有名であったのは、経営者、イエローハットの創業者、鍵山秀三郎だろう。彼は、1961年10月に社員の規律や勤勉性が欠いた状況を改善するために、トイレ掃除を始めた。

2005年に出版された鍵山の『掃除道』には以下のような記述がある。

私は掃除を始めるようになりました。入社してくる社員が汚れやゴミを目にしなくてもいいように、職場環境をきれいにしておきたかったのです。きれいにしておけば、社員の心の荒みもなくなるはずだと考えたからです。きれいに掃除しておくことが唯一、私が社員にしてあげられる感謝の気持

ちではないかと信じていたからです。ところが、掃除を始めたころは、私がトイレ掃除をしている横で平気で用を足していく社員や、階段を拭いている私の手の上を飛び越えていくような社員ばかりでした。その後、なんと最初の10年間はたった独りでの掃除が続く。やがて10年を過ぎた頃から数名の社員が手伝い始め、20年を過ぎた頃にはほとんどの社員が掃除に参加するようになりました。(鍵山 2005、pp.22-23)

鍵山秀三郎は社員の心の荒みを癒すため、トイレ掃除を自分一人でやり始めたが、最初の頃は手伝ってくれた人がいなかった。20年ほどをかかり、大部分の社員が掃除をするようになった。

また、鍵山はトイレ掃除の方法について相当のこだわりを持っているようだ。『掃除道』のなかで、トイレ掃除の方法について詳しく書かれている。

とくに私は、トイレ掃除を素手でするようにしています。素手のほうが、髪の毛一本まで直接感じ取ることが出来るからです。人間の指先は非常に敏感にできています。その敏感な指先から直接感じる事が、問題解決の早道だと信じているからです。ゴム手袋をしたり、長い柄の道具を使いますと、その分だけ得る感覚から遠ざかってしまいます。(鍵山 2005、p.57-58)

鍵山秀三郎は、素手でトイレ掃除をするのが大切だとすすめている。ゴム手袋や長い柄の道具を使うより、人間の敏感な指先で直接に感じる事が良いと主張している。

また、鍵山は「日本を美しくする会」の相談役として活躍していた。日本を美しくする会、全称「特定非営利活動法人日本を美しくする会」は1998年に

鍵山によって創立された団体である。日本を美しくする会の宗旨では、「美しい街づくりと学校や公共施設の環境美化・保全のための街頭清掃やトイレ掃除の指導援助事業」ことが含まれている。

この会は、「人がトイレ掃除によると、謙虚な人になれる、気づく人になれる、感動の心を育む、感謝の心が芽生える、心を磨く」ということをアピールしようとしている。

日本を美しくする会の多様な活動は、学校教育、企業経営、地域社会に影響を与え、中国、台湾にも影響を及ぼしたものであり、大きな成果を上げていると言える。鍵山はトイレ掃除を個人修養の一つとして守り、会社の経営者として自分の会社の従業員たちにも影響を与え続けていった。

以上紹介したように、近現代において、宗教的な目標を持って活動していた西田天香、その活動に刺激を受けて掃除事業を創立した鈴木清一、会社内部で掃除の必要性を提唱している松下幸之助と本田宗一郎、そして社会全体にも影響を与えた鍵山秀三郎は、近現代日本のトイレ掃除思想を支えてきた人物であったと言える。彼らの努力によって、トイレ掃除の思想は実際の行動に移った機会を迎えたと考えられる。

5. まとめと今後の課題

以下は論文全体の内容をまとめておこう。

「はじめに」で示したように、現代の日本において、トイレを常に清潔に保つことが非常に重要なこととして考えられている。これを示唆しているのは、企業や飲食店、百貨店のトイレの頻繁な清掃とチェック、日本の快適なトイレ文化と技術力を伝える成田国際空港の「GALLERY TOTO」の活動などである。トイレの清潔さは、日本のソフトパワーの一つとなっていることも、トイレと

いう空間が重要視されていることを示しているのである。

本稿において、日本人がトイレ掃除を重要視している理由を様々な側面から考察した。とりわけ、現在日本のトイレ掃除の思想を支えている伝統的思想の存在を明らかにし、それが基盤となったという可能性を示した。具体的にいうと、禅宗の修行において、用便するときトイレの清潔さを守るべきという規範意識、茶道のおもてなしの精神、民間伝承に見られるトイレ掃除、特に女性がトイレ掃除をすることが強く求められていたことを明らかにした。この三つの思想は現在日本のトイレ掃除文化の基礎になったと考えられる。

さらに、近代以降は、多数の宗教者、経営者、社会活動者の努力も不可欠の条件になったと考えられる。彼らはトイレ掃除を重要な個人修養として捉え、様々な方法で他の人にも影響を与えた。彼らの努力によって、トイレを掃除するという行為は企業、学校、社会全体まで広がっていき、少なくとも一部の人の間でトイレ掃除は「汚い仕事」より、「心を磨く」仕事として考えられるようになったことを促したと思われる。特に、西田天香の社会奉仕活動のなかのトイレ掃除に影響を受けた人が少なくなく、松下幸之助のトイレ掃除をする美談も従業員たちに見本を示した。本田宗一郎が社内報で工場の整理整頓を強く求め、鍵山秀三郎の社会活動も大きな成果につながった。彼らの努力によって、トイレ掃除の思想が実行されることになった。

しかし、現段階では、宗教的な観念と企業家たちの行動は、直接とつながっていない。その関係性には不明な点がまだ多く残っている。例えば、1930年代の西田天香の一燈園の活動は、多くの人に影響を与え、一部の人に受け継がれたと推測できるが、その実態はまだわからない。特に、現代企業者の活動と一燈園の活動のつながりを、1930年代に活躍した人物の活動を調査しながら、考察していきたい。この時期に、思想的な転換期であったと現在仮説を立ててい

るが、その証明も今後の課題にしたい。

＜参考文献＞

- 大野盛雄・小島麗逸（1994）『アジア廁考』出もの文化事情
- 大森信（2011）『トイレ掃除の経営学—Strategy as Practice アプローチからの研究—』白桃書房
- 大森信（2016）『掃除と経営—歴史と理論から「効用」を読み解く—』光文社
- 鍵山秀三郎（2005）『掃除道—会社が変わる・学校が変わる・社会が変わる—』PHP 研究所
- 屎尿・下水研究会編（2016）『トイレ—排泄の空間から見る日本の文化と歴史—』ミネルヴァ書房
- 高木裕宜（2006）「5s 活動の生成と展開」『経営論集』第 16 巻第 1 号、文京学院大学総合研究所、pp.127-143
- 谷直樹・遠州敦子（1986）『便所のはなし—物語ものの建築史—』鹿島出版会
- 道元・石井恭二訳（2004）『現代文訳 正法眼蔵 3』河出文庫
- 松下幸之助（1979）『決断の経営』PHP 研究所
- 宮田昌明（2008）『西田天香—この心この身このくらし—』ミネルヴァ書房
- 李家正文（1932）『廁考』六文館
- 山本健治（2017）『便所掃除はお金を払ってでもさせてもらいなさい』三五館 GALLERY TOTO の公式ホームページ (<http://www.toto.co.jp/gallerytoto> : 最終閲覧日 : 2017 年 11 月 26 日)

日本にルーツを持つ学生の日本語学習の意味に関する一考察
—タイの日本人学校を卒業した学生の事例—
On the Meanings of Japanese Learning for Thai Students
with Japanese Roots: The Case of a Graduate
from Japanese School in Thailand

松岡里奈

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 D1

要旨

本研究は、外国語としての日本語教育を行っている教室に、継承語として日本語を学んでいる学生が混在している現状に注目し、日本にルーツを持つ学生、すなわち継承日本語学習者が何故日本語を学ぶのか、彼らの日本語学習の意味づけを明らかにすることが目的である。第1回調査当時（2016年5月）タイ・X大学の日本語学科に在籍する、日本人の父親とタイ人の母親を持つヤス（仮名）という日本にルーツを持つ学生を事例に、彼のライフストーリーを通して、考察を試みた。分析の結果、ヤスは高校時代にタイ語の学習言語の壁に悩まされ、自己否定をし続け、自身に劣等感を抱いていたことが分かった。そして、その環境から逃避することが彼にとっては重要な日本語学習の意味だったのではないかと考えられる。

キーワード：日本にルーツを持つ学生、継承日本語学習者、日本語学習の意味、ライフストーリー

Abstract

This paper is a case study which investigates the meanings that Thai students with Japanese roots have toward their learning of Japanese as a heritage language at a university in Thailand. It is concerned with a case of Yasu with Japanese father and Thai mother, who is majoring in Japanese

language at X university in Thailand. He graduated from Japanese elementary and junior high schools in Thailand. As a result of the analysis, his decision to learn Japanese at the university level was not to learn the language per se, but the consideration that it was an escape from his feelings of self-denial and inferiority.

Keyword : Students with Japanese roots, Heritage Learners of Japanese, the meaning of learning Japanese, life story

1. はじめに

国外の日本語教育機関には多様な背景を持つ学習者がいる。筆者が 2014 年から 2016 年まで勤務していたタイ・X 大学の日本語学科も同様である。X 大学の日本語学科には、筆者が知る 2014～2016 年では、1 年生～4 年生まで各学年に 2～5 名、「日本にルーツを持つ学生」^①が在籍しており、外国語としての日本語 (Japanese as a Foreign Language: JFL) 教育を行っている教室の中に、「継承語^②としての日本語 (Japanese as a Heritage Language: JHL)」を学んでいる学生が混在している状況にあった。これは、タイに限らず、その他の国外の日本語教育機関でも指摘されている状況 (池田,2004、Yoshimitsu, 2008、尾関,2016、ダグラス・知念 (発行年未定) 等) であるにも関わらず、その後、これに関わる教育実践研究が各地で積極的に行われているとは言えるだろうか。そこで、本研究は、JFL のクラスに JHL 学習者が混在しているクラスにおける、よりよい日本語教育のあり方を追究することを目標とし、本稿はその基礎研究として、JHL 学習者に焦点を当て、本人の語りから、JHL 学習者の日本語学習の実態や課題を把握することを目指す。複数言語環境で育つ子どもの日本語学習について考察した尾関 (2011) によると、当事者の子ども自身が「日本語学習をどのように捉え、意味づけているのか」ということが日本

^①「日本にルーツを持つ学生」というのは、本稿では片親がタイ人で、もう一方の親が日本人である学生のことを指す。

^②中島 (2010) の定義に従い、「親から継承する言語」とする。

語学習を大きく左右する」としており、当事者による日本語学習の意味づけを探ることは、彼らの日本語学習の核心に迫ることができる重要な課題であると考えられる。したがって、日本にルーツを持つ学生、すなわち JHL 学習者が何故日本語を学ぶのか、彼らの日本語学習の意味づけに関して考察を試みることを、本稿の目的とする。本稿では紙幅の都合上、タイの日本人学校を卒業し、タイでの高校生活を経て、タイの X 大学日本語学科に入学したヤス（仮名）を事例として取り上げる。

2. 先行研究

本研究で取り上げる、日本にルーツを持つ学生は、幼少期から複数言語環境で育った学生である。そのような複数言語環境で育ってきた当事者の日本語学習の意味づけに関して言及した先行研究としては、山口 (2007)、尾関 (2013)、川上・尾関・太田 (2011) が挙げられる。山口 (2007) は、ドイツで育ち、ドイツの現地校に通いながら、週末の日本語補習校で日本語を学習した経験を持つ3名の日本人の若者のライフストーリーを通して彼らの日本語学習の意味に関して考察を行い、当事者3名ともに、なりたい自分の姿の獲得が、日本語を学習する積極的な意味であったと述べている。尾関 (2013) は、4名の若者にライフストーリー・インタビューを行い、複数言語環境で生きた彼らにとって、日本語を学ぶこととは、重要な他者によって支えられた「自分自身を形成し、更新していくプロセス」(p.161) だったとし、当事者の自己形成に大きく影響を与えていると述べた。また、川上・尾関・太田 (2011) は、複数言語環境で育ち大学生になり日本へやってきた当事者たちにとって、日本の大学における日本語学習は、幼少期から日本語とどのような関係にあったのかという「日本語との距離感」(p.66) と密接に関連しているとした。この「日本語との距離感」は変化し続けるもので、対象者たちは日本語を学ぶことを通じて、成長の時間軸に沿って自らが納得する「日本語とのつきあい方」(p.67) を見つける作業をしていると述べた。以上の先行研究の協力者たちは、親の仕事の都合で移動した先での日本語学習に対しての自らの意味づけを追ったものである一方で、本

稿で対象とするヤスは、日本国外の大学で日本語を専攻する学科に進学することを自らの意志で主体的に選んだ学生である。したがって、これらの先行研究における当事者の意味づけとは異なってくると考えられる。また、本研究のようにJFL環境にJHL学習者が混在するクラスにおける日本語教育を考えるという目標に向けた立場で、JHL学習者の日本語学習の意味を探ろうとした研究は、管見の限り行われていない。

3. 研究の方法

3.1 調査概要

本稿の目的は日本にルーツを持つ学生にとっての日本語学習の意味を捉えることだが、それには彼ら自身がこれまでの人生の中でどのような体験をし、その体験をどのように意味づけているのかが影響していると考えられる。そこで本研究ではライフストーリー研究を用いる。ライフストーリー研究とは、「語り手が何を伝えようとしているのか、いかに自己と自分の人生を解釈しているのか」（桜井・小林,2005:129）を、当事者の語りを聞くことで明らかにしていく研究手法である。第1回調査では、彼らの人生を知り、彼らがどのように人生の出来事を意味づけているのかを捉えるために、ライフストーリー・インタビューを行った。第2回調査では、第1回調査で収集したインタビューデータの分析後、詳細に話を聞きたい箇所、聞き逃した点を中心に質問をし、語ってもらうために、フォローアップとして半構造化インタビューを行った。インタビュー調査の場所は、できるだけ協力者がリラックスして語れるように配慮し、協力者の大学近くの喫茶店で行った。表1は2回に渡る調査の概要である。

表1 インタビュー調査概要

	第1回	第2回
日程	2016年5月	2016年7月
調査方法	ライフストーリー・インタビュー	半構造化インタビュー
場所	タイ・X 大学付近の喫茶店	
時間	3時間	3時間
協力者との関係	教師と学生	元教師 ^③ と学生
使用言語	日本語	

第2回の半構造化インタビューでは主に、①学校選択②家庭内言語・環境③周囲の人々との関係④自身のタイ語と日本語の複数言語能力について語ってもらった。この④に関しては、欧州評議会「ヨーロッパ共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages: 以下 CEFR) の日本語翻訳版である吉島・大橋(2004)の自己評価表(pp.28-29)を使い、自身のタイ語と日本語の「読むこと」「聞くこと」「表現」「やりとりする」「書くこと」の自己評価もしてもらった。この目的は、自身の言語能力に対する意識を探るためであり、実際にどのぐらいの能力を持っているか、言語テストなどを通して測り客観性を高める必要はないという考えに基づいている。また、2016年7月にヤスの自宅を訪問し、ヤスの両親へ、半構造的に、主にヤスのタイ語能力の伸長に関わるサポートについてタイ語と日本語でインタビューも行った。調査は全て、インタビューの目的を伝え、協力者の許可を得てから録音し、文字化した。タイ語の部分はタイ語母語話者の協力を得て、日本語訳をした。筆者とヤスとは大学での2年間の日本語の授業の内外で交流を深め、ラポールが形成された状態で調査を行った。また、データ収集から分析にいたる基礎的な過程を明らかにしていくこと、つまり「手続きの「透明性」をはかり」(桜井・小林,2005,pp.49-50)、語りの内容に矛盾が見られた場合には、LINEメッセージを使用して再確認をするなどして、信頼性と妥当性の保持に努めた。

^③筆者が退職した後のインタビューとなった。

3.2 分析方法

分析の対象としては、文字化した全ての語りをメインデータとする。それに加えて、フィールドノーツ、フォローアップとして第2回調査以降に使用したLINEメッセージを対象とする。本研究における分析の手順は以下の通りである。手順(1)と(2)は本稿と同様にライフストーリー研究を手法とした尾関(2013)を参考にした。

- (1) 全ての文字化したデータを、Excelで定性的コーディング(佐藤,2008)を行い、やりとりにコードをつける。データとコードを載せたユニットをカードにし、そのカード同士の関連性を探る。さらに大きなユニットに分け、ユニットを相互に比較し、関連性を探る。この作業は何度も繰り返し行った。
- (2) それと並行して、言語・家族・周囲の人間・学校・自分に関する出来事を時系列に並べ直し、通時的にその当時の経験に関する思いを捉える。
- (3) 日本語学科を選択した理由に関する語りを抽出し、理由をいくつかのカテゴリーにまとめる(表3参照)。
- (4) その理由に見られる意識⁴はどのようなものか、影響を与えたものは何か、どのように影響を与えたのかについて、(1)と(2)の結果から導き出し、各自にとっての日本語学習の意味を捉える。

3.3 調査協力者のプロフィール

ヤス(仮名)は、第1回調査当時(2016年5月)大学2年生で20歳の男子学生である。父親の国籍が日本で、母親の国籍がタイ、兄弟はおらず、現在もタイに家族3人で暮らしている。ここでヤスを想像してもらいやすくするために、第2回調査で行った言語能力の自己評価の結果を表2に示す。この結果よりヤスはタイ語より日本語のほうに自信がある学生であると言える。

⁴本稿では、国際結婚家庭のアジア出身母親の母語教育意識を探った谷口(井出)(2012)と同様に、「意識」を「調査協力者がどのように捉えているか」という意味で使用する。

表2 ヤスの言語能力の自己評価

	聞く	読む	やりとり	表現	書く
タイ語	B2	B1	B2	B1	B1
日本語	C2	C1	B2	B2	B2

ヤスは、タイで生まれ、タイの日系幼稚園に入学し、小学校 1, 2 年生の時には父親の仕事の都合で日本に滞在し、日本の公立小学校に通った。その後タイに戻り、日本人学校小学部、中学部を経て、タイの X 大学附属のタイ語と英語で授業が行われるバイリンガルスクール、そして X 大学の日本語学科に入学した学生である。ヤスの家庭内言語は、父親とは日本語、母親とはタイ語で話し、両親同士は主に英語を使用している。

4. 分析結果と考察

本章より、ヤスの日本語学習の意味を探っていく。まず、ヤスが X 大学の日本語学科を選択⁵した理由に関わる語りを示す。

(1=第1回調査、*=筆者、Y=ヤス、数字=通し番号)

1*1118: 大学入る、どの大学入るかって決めたのは、自分?

1Y1119: んー——自分、自分の学力で、はい、他の大学に入るには、入れると思うんですけど、そのあとの勉強がついていけないと思ったんですよ。

1*1120: それはどうして?

1Y1121: タイ語。経済に、経済にも入りたかったんですけど、経済とか経営とか、入りたかったんですけど、・・・入れたとしても、そのあとの勉強でどう・・・どうするかは・・・たぶん、ついていけないと思います。たぶん留年、2年くらいすると思います。

<中略>

1*1132: 日本語学科にしようって決めたきっかけは?

1Y1133: はあ。タイ語、タイ語ができないなら、日本語学科に入って、空い

⁵X 大学の日本語学科には入学試験がなく、申し込めば基本的には誰でも入学できるため、「選択」と呼んでいる。

てる時間に何か他の事でもしようって思って。

1*1134：うん。

1Y1135：まあ・・・その・・・経営経済に入ろうと思ったけど、自分にはできないから、で、他に何かできそうかと思ったら、通訳、

1*1136：通訳。うん。

1Y1137：目指そうと思って。

1*1138：うん。

1Y1139：日本語学科入って。もし他の例えばスペイン（語）とかだったら、その教えてる内容もタイ語だから、二倍勉強しなきゃいけないじゃないですか。

1*1140：うんうんうん。

1Y1141：そういう感じ。ついていける気がしなかったです。

1*1142：うーん。

1Y1143：もう、日本語学科でいいやって。

1*1144：日本語学科でいいや。

1Y1145：もうほとんど考えないで、決めました。

1*1146：あーもう考える、力？元気？みたいなのも、もうほんとに削がれてるよね。もういいよってなってるよね。

1Y1147：ちょっとちょっと・・・疲れた。(苦笑い)

※（ ）は語りの様子を示す

以上の語りから、ヤスが日本語学科を選択した理由は、以下の表3のようにまとめられる。

表3 ヤスの日本語学科選択理由

ヤスの日本語学科選択理由	データ番号
Y1) 自信のないタイ語能力	1Y1119,1Y1121,1Y1133,1Y1135,1Y1141
Y2) 余暇時間の獲得	1Y1133
Y3) 通訳という目標	1Y1135,1Y1137
Y4) 投げやり	1Y1143,1Y1145,1Y1147

表 3 を見て分かる通り、日本語学科を選択した理由について、Y1)「自信のないタイ語能力」とコーディングできる語りを 5 回にわたって述べた。他の語りの回数と比べると、Y1 がヤスの日本語学習の意味づけに最も関わりが深いと考えられる。紙幅の都合により、本稿では、Y1 の語りに注目し、考察を進めていく。

では、この「タイ語ができない (1Y1133,1Y1135)」、「(勉強・授業に) ついていけない (1Y1119,1Y1121,1Y1141)」という、否定的な意識には、何が影響しているのだろうか。これには、調査の結果から、彼のこれまでの学校選択が大きく影響をしている可能性が考えられる。表 4 に、彼の語りをもとに作成した学校選択の変遷と、それに伴う学習言語の変遷も併せて表にした。

表 4 学校と学習言語の変遷

生まれ (0~2)	幼稚園 (3~6)	小学校 (6~12)	中学校 (12~15)	高校 (15~18)	大学 (18~)	
タイ	日系幼稚園	小1-2 公立小学校	小3- 日本人学校 小学部	日本人学校 中学部	X大学附属バイリンガルスクール	X大学 日本語学科
日本語				英語	日本語	
				タイ語		

※網掛けは「タイ」、網掛けのないところは「日本」に在住したことを示す。

4.1 幼少期~中学校の言語生活

ヤスは幼稚園から中学校を卒業するまで、学習言語は日本語で育った。それまでのタイ語を使用する機会といえば彼の語りから主に、1)家庭内での母親との会話、2)幼稚園・小学3~5年生の時の週末に通っていたテニス・水泳教室の生徒同士の会話、3)小~中学校時代は月に一度母親の実家を訪れており、そこでの親戚との会話だった。一方で、日本語を使用する機会は、仕事の忙しい父親との会話というよりも、主に学校生活だったようだ。また、幼少期には、日本のアニメがタイ語に吹き替えられて放送されているものを見ていたこともあ

ったようだが、学校を終えて自宅に戻ってから彼が触れる漫画・アニメ・ゲームの大半が日本のものだった。映画も見たようだが、父親の趣味で洋画のアクション映画を英語で見ることが多く、その内容に関しては、「2Y262:わかんなかったです」(2Y=第2回調査のヤスの語り)と述べた。つまり、彼の生活の中心は日本語で、日常的にタイ語を使用するのは母親との会話だったようだ。

また、中学校卒業時の彼は、学校の授業を理解するために必要な教科学習言語能力⁶ Academic Language Proficiency : 以下 ALP)は当然のことながら日本語で育ってきていた。では一方でタイ語の ALP を伸ばすサポートがあったかという点、それはヤスの母親の語りからも窺うことはできなかった。表5に、日本人中学校卒業時の彼の言語能力を、彼と彼の母親の語りをもとに、カミンズ(2011)が示した言語能力の3つの側面を参考にして、日本語とタイ語の言語能力をまとめた。

表5 ヤスの日本人中学卒業当時の日本語とタイ語の言語能力

	会話の流暢度 ⁷ (Conversational Fluency: 以下 CF)	弁別的言語能力 ⁸ (Discrete Language Skills: 以下 DLS)	教 科 学 習 言 語 能 力 (Academic Language Proficiency: 以下 ALP)
日本語	日系幼稚園	日系幼稚園～日本人小学校	日本人小学校～日本人中学校
タイ語	幼少期～:主に母親との会話 小1-2:日本の夏休みにタイへ一時帰国し近所の幼稚園に通う	幼少期:母親の家庭内での文字指導 小3-4:タイ語の塾に通い、タイ語の読み書き、簡単な文法を習う	データなし

⁶ 「習得に長時間がかかる読解力、作文力、発表力、応用力など」を指し、教科学習言語とは「学校という文脈で効果的に機能するために必要な一般的な教科知識とメタ認知ストラテジーを伴った言語知識」だとしている。(カミンズ 2011)。

⁷ 「よく慣れている場面で相手と対面して会話する力」(カミンズ 2011) のこと。1年～2年で獲得できると言われている。

⁸ 「文字の習得とか、基本文型の習得など、ルール化ができて個別に測定可能な言語技能」(カミンズ 2011) のこと。スキルそれぞれによって習得に必要な時間は異なるが、5年～7年かかる ALP とは別建てとなると言われている。

表5を見て分かる通り、日本語のCF、DLS、ALPは獲得していった様子が窺えたが、タイ語の場合CF、DLSに関係する語りはあったが、中学を卒業するまでにタイ語のALPの発達、伸長に関するサポートがあったかどうかは窺うことができなかった。この結果、中学卒業当時の彼のタイ語のALPは年齢相当地に発達していなかった可能性が推測される。

4.2 高校選択

そして、ヤスは高校選択について次のように語った。

1Y719: 中学2年の時に、その、好きな、好きな先生が、その、昔は、昔は、俺も、あの一、中学の時、Z高校っていうのを受験したけど、もし受かってたら、お前らには会ってないかもなって聞いて、それで気になって、

1*720: あーそれがどんな学校だったんだろうって？

1Y721: はい。あの一、お金もあんまりかからないし、で一、寮に入るんで、日本に行っても、日本、日本の学校に入りたかったんですよ。

1*722: ほ一。

1Y723: でもお父さんとお母さんは、お父さんは仕事があるから行けなくて、お母さんも一お父さんと一緒にいるんで、日本に行って一、おじいちゃんおばあちゃんのうちに住むにしても、ちょっと迷惑がかかるから、1人で行ける高校はないかって探して一、それで一番お金もかからなくてひとりで行けるのがZ高校でした。

1*724: ふーん。どうして日本に行きたかったの？

1Y725: タイにずっ、タイの学校に入れる気がしなかったんです。

ヤスは中学2年当時の担任の男性教師に信頼を寄せていた。その教師に影響を受け日本のZ高校に興味を持ち、さらにZ高校が全寮制で、かつ金銭的にも親に迷惑をかけず通えるということから、Z高校を目指そうと決意した。しかし、それと同時に、「1Y725:タイの学校に入れる気がしなかった」とも語り、ヤスはタイでの高校進学に対する諦念の感情を抱いていたようだ。これには、当時彼自身が自らの言語能力を自覚していた可能性が見られる。またそれだけではなく、タイには日系の高校が殆どない⁹⁾というタイにおける現在の教育環境が影

⁹⁾知る限りでは、バンコクに1校存在する。しかし、定員は30名と少なく、日本人中学

響しているとも考えられる。タイで日本人学校中等部を卒業した生徒の進学先について尋ねると、以下のように答えた。

1Y795：タイの学校には絶対に入らないです。みんな。

1*796：ふーんそれはタイ語の壁ってこと？それとも教育？

1Y797：タイ語の壁です。

1*798：うーん。

1Y799：みんな、タイ語、中学でタイ語話す授業ありますが、書く授業はないですから。

タイで日本人学校を卒業した生徒は主に、日本の高校に進学、またはタイ国内のインターナショナルスクールへの進学を目指すことになるようだ。日本人学校ではタイ語を話す授業はあっても書く授業はなく、「タイ語の壁」(1Y797)があるために、現地の高校への進学は考えないそうである。そこでヤスは「1Y727:インターの高校も見たんですけど、お金がすごい高くて、あと、英語一、英語を使いますから、ぼくあんまり得意じゃなかったんですよ。」と、金銭面と英語への苦手意識から、日本のZ高校の受験を選んだことを語った。しかし、日本でのZ高校の入試を終え、タイに戻ってきた彼は入試の手応えがなかったことを親には言い出せなかった。

1Y785：でー試験の結果が出た日に、やっぱりだめだったなって、親に言おうと思ってたら、お父さんが落ちたんだったら、あの、この学校に入れて、あの調べてくれてたみたいです。

1*786：万が一のことを考えて。

1Y787：はい。

<中略：X大学の立地が良かった>

1*790：それは一、Yも納得してそこ入ろうかなって思って入ったの？

1Y791：ほんとにどこにも行けなかったんですから、・・まあ。

受験に失敗してしまった結果、「どこにも行けな」(1Y791) なくなってしまう彼は、父親が調べておいてくれた学校に入学するしかなかった。その学校が、

校を卒業した学生の大半が進学することはできない。

X 大学附属の英語とタイ語で授業が行われるバイリンガルスクールだった。しかし、中学卒業当時の彼の言語能力は表 11 の通り、タイ語の ALP は年齢相当には発達していなかったと考えられる。このインタビュー以前に彼はこの高校の学習言語としての英語の授業は、他のタイの学生にとっても難しく、授業を担当する先生は手加減をしながら授業を進めてくれるため、英語で行われる授業は特に心配ではなかったと述べていた。よって、ここからは高校の学習言語としてのタイ語に注目して進める。

4.3 高校時代の学習

では、高校 3 年間の学習は彼にとってどういうものだったのか。ヤスは入学当時理系クラスを希望したが、定員超過で文系クラスに入れられることになった。その文系クラスは、不良のたまり場でまともな授業が行われなかったという。入学から 3 か月後、友人数名で教師に頼み込み、理系クラスに入れてもらった。

1Y871: でもやっぱり理系入っても、ちょっちょつと、あのっ (笑いながら)
勉強ついていけなかったんですけど。

1*872: それは一どういう問題でついていけなかったの?

1Y873: タイ語と、英語。あんまりわかんなかったです。

1*874: うんうんうんうん。そうだよねそうだよね。学習言語が日本語だったのが、突然タイ語と英語だもんね。

1Y875: (頷く)

1*876: 逆に 3 年間、私だったら 3 年あってもついていけない気がする。

1Y877: 本当にお情けで出してもらったようなもんですよ。

しかし、理系クラスに移動しても、学習言語の問題で、授業についていくことは難しかったという。だが彼は高校を卒業することはできた。そのことを彼は、「お情けで出してもらったようなもんです」と表現した。これには、学校側が卒業させてくれなかったら自らの実力では卒業することができなかったと、自らを卑下しているように捉えられる。

具体的に、彼はタイ語で行われる授業についてはこのように語った。

1*896 : お母さんとタイ語で話してるのと、授業で先生がタイ語を使って話してくるのは全然違う？

1Y897 : 違います。あの、先生が使ってくるタイ語は、こっちが知ってる前提で話してきますんで、その、あのー、先生が言ってる単語がわかんなかったら、近くの友だちに聞いて、なんていう意味できくんですけど、ともだちが説明してくれるんですけど、それもわかんなかったら、うんあーあーそっかって一応わかったフリをします。

タイ語で行われる授業では、友だちの説明を経ても理解できない言葉があり、「わかったフリ」をしていたこともあったようだ。やはりタイ語の ALP が高校レベルの科目内容を理解するほどまでには発達していなかったのだろう。カミンズ (2011) によると ALP の習得には 5~7 年かかると言われている。中学まで学習言語が日本語だった彼が、この高校 3 年間だけでタイ語の ALP を習得できたとは考えにくい。そして、高校での授業を振り返りこのように語った。

1*898 : どうだった？高 1 高 2 高 3 ででも自分の能力に変化が出たなって思う？

1Y899 : 中学と変わんないと思います。

1*900 : どういう意味？

1Y901 : とにかくー・そのー・能力っていうんですか？中学とは全然変わんないと思います。

1*902 : ストップしたっていうこと？

1Y903 : (頷く)

1*904 : それはやっぱり、でもタイ語と英語でこなすのに必死だったから？

1Y905 : あーでも英語はちょっと上達しました。

1*906 : あーそうか。そうだよ、頑張れば英語はね。

1Y907 : あっタイ語と英語は上達したんですけど、数学やら理科やら化学やらは中学でストップしたままな感じです。

<中略：数学がいかに理解できなかったかという説明>

1*936 : 数学用語は、それはそれであるんだよね。そっかー。あー、自分の中で中 3、あ、高 1 高 2 高 3 はそのー

1Y937 : まるで何もないような。

<後略：この語りを調査者が受け止めた後、タイ語や英語以外にできるようになったことをもう一度質問すると、ヤスはタイ人との接し方を学んだと述べた。>

ヤスは、「タイ語と英語」の能力は「上達した」と肯定的な評価をしたが、一方で、高校レベルの科目内容は身につかず、中学生のときと今の自分は変わらない(1Y899、1Y901、1Y903)と述べ、いかに数学の授業が難しかったかを説明した後に、「1Y937:まるで何もないような。」と語った。この「まるで何もない」という語りは、高校三年間の勉強で学んだことは何もないという文字通りの意味なのか、それとも数学などの科目に関してのみ何も学べなかったということを表しているのかは判断が難しい。しかしながら、「できない」「ついていけない」(1Y1119 等)という語りからも、当時から周囲と自身を比べ、3年間「できない」自分を痛感し続け、自身に劣等感を抱き続けていたのではないだろうか。ヤスはこの高校3年間は、タイ語の能力が「上達した」(1Y907)とはいえ、タイ語のALPの側面は十分に獲得できないまま卒業したのだと考えられる。そのため、高校レベルの科目内容の習得には至らなかった自身を蔑むことにつながったのだろう。

4.4 X 大学・日本語学科選択

したがって、この劣等感が、学習言語としてのタイ語への否定的な意識につながり、大学選択に大きく影響を与えたのではないだろうか。つまり、タイ語のALPが未発達の状態で入った高校で、3年間を通じて授業が理解できなかった自分に劣等感を感じ、それが学習言語としての「タイ語」への否定的な意識となり、大学・学科選択にあたり「(授業に)ついていけない」可能性がある学科選びを避けることにつながり、日本語学科選択に至ったのだと考えられる。

しかし、ここで日本語学科に入っても一般教養の授業などでタイ語の壁にぶつかるのではないかという疑問が生じた。調査後、LINEメッセージを使用し、一般教養のタイ語で行われる授業の試験について、「ヤスはその試験の問題文のタイ語わかった?タイ語で書いて答えるとき、書けた?」と尋ねると、ヤスは「わかりましたけど、かけませんでした。英語で書いていました」と答えた。各科目の担当教師に英語で解答してもいいという了承を事前にとってから試験に臨み、どの科目も単位を落とさずとることができたようだ。

4.5 日本語学習の意味

では、「Y1) 自信のないタイ語能力」の側面から見た、ヤスにとって日本語を学ぶ意味とは、どういうことだったのか。ヤスにとって日本語学科選択は、日本語そのものを勉強するため、というわけではないことがわかった。日本語学科選択理由の「タイ語ができない」、他の学科だと授業に「ついていけない」というのは、これまで劣等感を抱き続けた高校時代のような環境を避けようとしていたのだろう。他の学科を選択すると、またも学習言語のタイ語の壁にぶつかり、劣等感をまた抱くことになるかもしれない、自身を蔑む必要のない逃げ場を求めていたのではないだろうか。彼にとっては、表2で見た自己評価から、タイ語より日本語のほうに少なくとも「できる」意識を抱いていることが分かる。つまり、彼にとってはそれほどまでに自己を否定する必要のないものが「日本語」だったのだと推測できる。したがって、「(授業に) ついていけない」不安を抱かず、「タイ語ができない」と自己卑下する必要もなく、自分が「できる」日本語を学ぶ場所が彼にとっての逃げ場であると感じたのではないだろうか。彼にとって日本語を学ぶということは、自己否定をし続け、劣等感を抱かざるを得なかった環境からの逃避だったのだろう。

5. おわりに

本稿では、ヤスのライフストーリーをもとに、彼の日本語学習の意味を探ってきた。紙幅の制限により、彼の日本語学習の意味に関して、最も影響していると考えられた「自信のないタイ語能力」への意識を中心に考察を進めた。ヤスは、高校時代にタイ語の学習言語の壁に悩まされ、自己否定をし続け、自身に劣等感を抱いていた。その環境から逃避することが彼にとっては重要な日本語学習の意味だったのではないだろうか。

本稿はヤスが語った日本語学科を選択した理由の一部から考察を進めたにすぎず、その他の「Y2) 余暇時間の獲得」、「Y3) 通訳という目標」、「Y4) 投げやり」に注目して、ヤスの日本語学習の意味の全体を捉えていくことは今後の課題としたい。また、本稿はタイにおける日本にルーツを持つ学生の内、一人

を事例として取り上げたため、結果を一般化することはできない。しかし、これまで知り得なかった、教室におけるマイノリティの学生の日本語学習に対する意識を明らかにできたことには意義があると考えられる。今後もさらに多くの日本にルーツを持つ学生の日本語学習について考察を進め、またマジョリティである JFL 学習者側からの視点も含めて考察していき、JHL 学習者が外国語として日本語を学習するクラスに混在したクラス環境における日本語教育は、どのようなものであるべきなのかについて考え続けていきたい。

＜参考文献＞

- 池田佳子 (2004) 「第 13 章 現代ハワイ日系人の「多言語」生活」後藤明他編
著『ハワイ研究への招待－フィールドワークから見える新しいハワイ像』
関西学院大学出版会、pp.215-228
- 尾関史 (2011) 「日本語を学ぶ子どもは自らの日本語学習をどう捉えているの
かー子ども自身の語りから探る日本語学習ー」『小出記念日本語教育研
究会』国際基督教大学、19、pp.57-70
- 尾関史 (2013) 『子どもたちはいつ日本語を学ぶのか 複数言語環境を生きる
子どもへの教育』ココ出版
- 尾関史 (2016) 「継承話者・外国話者・母語話者が共に学ぶ教室での日本
語学習の意味ーハワイの高校の日本語クラスでの「言語ポートレート」
活動からの考察ー」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究会
2016 年度研究大会予稿集』p.54-55.
- カミンズ, J 著・中島和子訳著 (2011) 『言語マイノリティを支える教育』慶
応義塾大学出版会
- 川上郁雄・尾関史・太田裕子 (2011) 「「移動する子どもたち」は大学で日本語
をどのように学んでいるのかー複言語環境で成長した留学生・大学生の
日本語ライフストーリーをもとにー」『早稲田教育評論』早稲田大学教
育総合研究所、25(1)、pp.57-69
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学ーライフストーリー・インタビュー

の聞き方』せりか書房

桜井厚・小林多寿子 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房

佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社

ダグラス昌子・知念聖美 (発行年未定) 「アメリカの継承日本語教育」『アメリカにおける日本語教育の過去・現在・未来』American Association of Teachers of Japanese、<https://www.aatj.org/resources/publications/book/Heritage_DouglasChinen.pdf> (2017年12月3日閲覧)

谷口 (井出) 恭子 (2012) 『国際結婚家庭における母親から子どもへの母語教育意識—日本に暮らすアジア出身母親のライフストーリー—』大阪大学大学院修士論文 (未公開)

中島和子 (2003) 「JHL の枠組みと課題—JSL/JFL とどう違うか—」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』プレ創刊号, pp.1-15

中島和子編著 (2010) 『マルチリンガル教育への招待 言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房

三代純平 (2015) 『日本語教育学としてのライフストーリー—語りを聞き、書くということ』くろしお出版

山口悠希子 (2007) 「ドイツで育った日本人青年たちの日本語学習経験：海外に暮らしながら日本語を学ぶ意味」『阪大日本語研究』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座、19、pp.129-159

Council of Europe. (2001). Common European Framework for Reference of Languages: Learning, teaching, assessment. Cambridge University Press. (吉島茂/大橋理枝 (訳・編) (他) (2004) 『外国語教育Ⅱ—外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』朝日出版社)

Yoshimitsu, K. (2008). Japanese Language Socialisation of Second-generation Japanese in the Australian Academic Context. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 5(Supple.1), pp.156-169. Singapore: Centre for Language Studies, National University of Singapore.

日本語における有形と無形の格助詞の交替現象
—対照言語学からのアプローチ—
Conversion between Explicit and Implicit Case Markers
in Japanese:
From the Viewpoint of Contrastive Linguistics

トウ トウ スエ エー

大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻 D2

要旨

日本語とビルマ語には、独立した機能を持つ無形のゼロ助詞が存在するという考えに立てば、格助詞が付加されないのは、省略ではなく、有形助詞とゼロ助詞との交替による結果だと言えるだろう。格助詞が無形となった場合、日本語では、有形の格助詞が示していた意味機能の損失の程度が大きいのに対し、ビルマ語では、意味機能を特定するために必要な情報の損失はそれほど大きくない。本稿では、日本語の格助詞の自立性がビルマ語より高いことがその背景にあることを明らかにする。さらに、日本語とビルマ語における無助詞の生起頻度の差や格助詞の交替現象に見られる意味的・機能的な差異も、格助詞の自立性の違いに起因するとの主張をおこなう。

キーワード：格助詞、格体系、ゼロ助詞、格の自立性

Abstract

If it is assumed that there is an implicit zero marker with an independent function in Japanese and Myanmar languages, it can be said that the marker drop is the result of the conversion between explicit and implicit case markers rather than an omission. With an implicit marker, the degree of depletion of the semantic function that the explicit case marker would have is high in Japanese. On the other hand, the loss of information

necessary for indicating the semantic function for the noun is not so large in Myanmar. We can, therefore, conclude that the Japanese case markers are more autonomous than those in Myanmar. This paper explains the difference between the frequency of occurrence of implicit case makers in Japanese and Myanmar, and the semantic and functional differences which are observed in case marker conversions. We propose that both differences above are derived from the difference in the degree of autonomy of case markers in Japanese and Myanmar.

Keywords: case markers, case system, zero marker, autonomy of case markers

1. はじめに

日本語で、特に話し言葉において格助詞が「省略」されることがある。しかし、どの格助詞でも「省略」できるわけではない。ビルマ語でも日本語と同じように格助詞があり、同じく「省略」が可能である。日本語同様、全ての格助詞が「省略」できるわけではないが、ビルマ語のほうが日本語よりも格助詞の脱落に対する許容度が高いように思われる。本稿では、両言語のこの相違がどこから来るかを対照言語学の観点から考察する。

2. 日本語における格助詞の省略とゼロ助詞

日本語の話し言葉では格助詞が省略されることがある。＃は（有形の）助詞がない状態を示す。

(1) a. 友達と映画＃見に行って、帰りにマンガ＃買った。

(近藤・姫野 2012)

しかし、以下の例では、格助詞を省略することができない。

(1) b. 駅前で／＃、友達に／＃会った。

さらに、以下の例が示すように、格助詞の「省略」とは見なしにくい場合がある。

- (2) a. 時間#／ハ／ガある？
b. それ#／ハ／ガきれいだね。

近藤・姫野(2012)は、(2)では、ハは対比的に何かを取り立て、ガは排他的に何かを取り立てるが、#（無助詞）には他の選択肢が含意するような意味合いがなく、このようなハでもガでも置き換えることのできない#は、助詞の省略ではなく、実質的な音声を伴わない独立した機能を持つ助詞と考えられると指摘している(cf. 加藤 2006、山田・中川 1995)。

また、日本語記述文法研究会 (2009)でも、名詞は格助詞「が」「を」「に」「へ」「で」「から」「より」「まで」「と」によって表されるだけでなく、無助詞「Ø」で表されることもあると述べられている。すなわち、日本語では格助詞が付加されていない場合、単に格助詞の省略と考えられるものだけではなく、実質的な音声を伴わないが、独立した機能を持つ助詞（以降、「ゼロ助詞」と呼ぶ）が存在することになる(cf. 加藤 2006、山田・中川 1995)。

省略同様、ゼロ助詞も、いつでも格助詞に代わって使えるわけではない。荻宿(2014)は、無助詞に関する先行研究でわかったことを以下のようにまとめている。

- (3) ① 助詞がない形式が現れる格はガとヲと「ニの一部」である。
② 話し手や聞き手を表す名詞、現場指示の指示詞が使われた名詞など現場にあるものを表す名詞が主題の場合、「無助詞」となる。
③ ②の場合、ハの対比、ガ(またはその他の格助詞)の排他的意味を表さな
いために「無助詞」となる。
④ 新たな話題を提示する場合、「無助詞」となる。

このように、日本語では、省略であろうと、ゼロ助詞であろうと、無助詞の生起には厳しい制約が課されている。以降、独立した機能を持つ無形の(格)助詞を「ゼロ助詞」と呼ぶ。また、通常はあると考えられる有形の助詞が付加されていない場合、すなわち、省略とゼロ助詞を区別せず言及する場合は、「無助詞」と言う。

3. 有形と無形の格助詞の交替現象

塚本(1991)で考察されているように、日本語には多様な格助詞の交替が存在する。

- (4) a. 僕がヨットを**を**買いたい。(塚本 1991)
 b. 僕がヨット**が**買いたい。

(4)のように日本語では「を」と「が」が交替可能である。しかし、(4)に対応する(5)のビルマ語では、「を」に相当する格助詞-ko_ωを「が」に相当する格助詞-ka.によって入れ替えると非文になる。

- (5) a. canO_ **ga.** ywE' hle_ **go_** wE_ jiN_ dE_
 僕-**ka.** ヨット-**ko_** 買いたい
 「僕がヨットを買いたい。」
 b. *canO_ **ga.** ywE' hle_ **ga.** wE_ jiN_ dE_
 僕-**ka.** ヨット-**ka.** 買いたい

しかしながら、格助詞を伴わない以下の文は、文法的である。

- (5) c. canO_ ywE' hle wE_ jiN_ dE_
 僕 # ヨット # 買いたい
 「僕がヨットを買いたい。」

^①ビルマ語のローマ字転写は、原則、加藤(2013)に倣う。また、ビルマ語では -ka.→ -ga.、-ko_→-go_、-tE_→-dE_等のように有声化が起こる場合がある。

もし主語か目的語が区別できないために(5)b が非文となっているなら、(5)c も同じように不可になるはずである。ところが、(5)c は、まったく問題ない。しかも、(5)c のほうが明示的に格助詞を伴う(5)a よりもよく使われ、格助詞が省略されているという感覚でもない。

3.1 省略かゼロ助詞か

通常、格助詞の「省略」には、次のような特徴があると考えられる。

- (i) 有形の格助詞が用いられるのが通常であり、ある限られた場合に、省略されることがある。
- (ii) 省略できるのは、省略しても意味が復元できるからである。別の見方をすると、省略された場合と有形の場合とでは基本的に意味が同じである。

山田・中川(1995, 1996)も、助詞を付けないと聞き手が理解できなかったり、理解しづらかったりする場合、つまり、助詞がないと名詞句の意味役割が定まらない場合に、助詞が用いられると述べている。これは裏返せば、聞き手が理解できたり、名詞句の意味役割が定まったりする場合は、助詞がなくてもいいということになる。日本語で助詞がない形式が現れる格はガとヲと「ニの一部」である(cf. 荻宿 2014)。文法格と呼ばれるこれらの格は、それだけで個別に具体的な意味役割を示せず、それを特定するには、動詞等の述語が必要である。これは、格助詞が省略されても、述語がその意味役割の復元を可能にしてくれるということを意味する。また、日本語では格助詞を伴うのが通常で、無助詞は原則、話し言葉に限られる。

では、ビルマ語ではどうだろうか。ビルマ語において、主語は格助詞を伴わないのが最も自然な表現である。

- (6) a. canO_ pyO:dE_
私 # 言った
「私言った。」
- b. canO_ga. pyO:dE_
私-ka. 言った
「私が言った。」

藪(1992)は、主語に-ka.が付加されていない、つまり、無助詞である(6)a が中立的な普通の文であるのに対し、(6)b は、「ほかの人ではなくて、この私が」というニュアンスがあり、-ka.を伴う名詞を《とりたて》る文となると述べている。もし(6)が-ka.の省略現象であるなら、-ka.を伴う場合よりも省略された方が通常の状態であるということになる。これは、「省略」の特徴(i)と矛盾する。また、-ka.には主語を強調する働きがあり、有形の場合と無形の場合でニュアンスが異なるため、(ii)の特徴とも合わない。さらに、(7)の「次の月曜日」に付く-hma_と異なり、(8)の「この前の月曜日」に付く-ka.は落とすことはできない。

- (7) a. la_mE.taniN:la_ne.hma_ Twa:mE_
次の月曜日-hma_ 行く
「次の月曜日に行く。」
- b. la_mE.taniN:la_ne. Twa:mE_
次の月曜日 # 行く
「次の月曜日に行く。」
- (8) a. pi:gE.dE.taniN:la_ne.ga. Twa:dE_
この前の月曜日-ka. 行った
「この前の月曜日に行った。」
- b. *pi:gE.dE.taniN:la_ne. Twa:dE_
この前の月曜日 # 行った
「この前の月曜日に行った。」

いずれの#も「省略」であるなら、なぜ「次の月曜日」と「この前の月曜日」

で適格性が異なるのかが不可解である。主語の・ka.が「省略」できるということを考えてとなおさらである。

ビルマ語にも音形を持たないゼロ助詞を想定する考えがある(cf. 藪 1992)。上記の例が・ka.の省略ではなく、ゼロ助詞という別の格助詞が関わった現象、つまり、・ka.とゼロ助詞の交代現象であると考えれば、主語において、格助詞を伴わない方が自然であること、・ka.の有無で意味が異なること、そして、時を表す用法において・ka.と・hma_で振る舞いが異なること、などの現象が存在するのは、不思議なことではなくなる。交替には、単なる省略にはない、「複雑な」条件が関与するからである。

第2章で、指摘したように、日本語では、無助詞の生起に厳しい制約が課されている。そして、日本語の無助詞の多くは省略の特徴を示す。一方、ビルマ語では、格助詞を伴う場合よりも伴わないほうが無標、すなわち「通常」である場合が少なくなく、両者で意味が大きく異なることもある。従って、ビルマ語における無助詞は、省略ではなく、それ自体独立したゼロ助詞の現れであると捉えるべきである。このような相違点も背景としてあることによって、日本語よりもビルマ語のほうが無助詞の生起環境が広く、それゆえ、生起頻度が高い。

3.2 無助詞はいつ現れるか

日本語では格助詞を省略できるかどうかは述語との結びつきとも関わっており、例えば、格助詞「で」は省略できない。山田・中川(1995)は「で」を省略できないことについて次のように述べている：述語と結びつきが弱い意味役割の場合には、たとえ名詞句の意味要素が典型的な場合でも、助詞が必要となる。例えば動詞「食べる」では、手段や場所といった意味役割は重要ではない。

- (9) 箸 で/*# 食べていい？
- (10) 学生食堂 で/*# 食べようか。

当該の文が正しいとするなら、無助詞の名詞は、動詞と最も結びつきの強い意味役割である「対象」として解釈されてしまう。また、「対象」や「動作主」といった結びつきの強い意味役割が埋まっていて、それ以外の意味役割しか可能性がない場合でも、やはり助詞は必要となる。

(11) これ私フォーク **で** ~~/*#~~ 食べていい？

ビルマ語でも場所を表す於格の *-hma* は付加しなければならないし、具格の *-nE* も通常、そうである。従って、例(9)~(11)に対応するビルマ語も、日本語と同様に格助詞がないと非文になる。つまり、ビルマ語でも、これらの格助詞は、ゼロ助詞と交替できない。

当該の格助詞が無助詞になれない理由は、省略にしろ、ゼロ助詞にしろ、無助詞は個別の音形がないために、それ自身のみで明示的にその格機能・意味役割を示すことができないからである。その意味機能を「復元」するためには、当該の名詞が項となる動詞等の述語（の意味）の「助け」が不可欠である。動作主や対象は、通常、主語や目的語という動詞の項になるため、動詞との関係が強い。それ故、無助詞（省略）があっても、動詞の助けを受けられる。一方、手段や場所といった意味役割は述語と結びつきが弱いため、その復元を助けてもらえない。すなわち、当該の意味役割は、格助詞自身で示さなければならない。

無助詞が生起できるかどうか動詞の結び付きの強さが関わっていることを示す、興味深い現象がビルマ語にある。また、その現象は、無助詞が省略ではなく、ゼロ助詞との交替であることを示す。ビルマ語の格助詞 *-nE* には、共格と具格の機能があるが、通常、この機能を担う名詞は無助詞にできない。しかし、具格の用法の中には、*-nE* を伴わなくてもよい場合がある。

(12) a. *co:nE* *tou'tE*
 ロープ *-nE* 縛った
 「ロープで縛った。」

ここに動詞の意味が関係していると考えることが可能となる。

ゼロ助詞が可能な(12)d とゼロ助詞が不可である (13)d では、動詞との結び付きの強さが異なると考えられる。さらに、同じ動詞でも(13) b ではゼロ助詞が許容されていることは、同じ動詞でも、動詞と名詞の結び付きの強さが変化することを示唆する。(12)の動詞は(13)の動詞に比べると対象に変化をひき起こす度合いが高く、そこには動詞の概念構造や他動性が関わっていると考えられる。

以下の図式は、動詞と同じレベルの<>内にある名詞のほうが外側の<>内にある名詞よりも動詞との関わりが強いこと、また、動詞から受ける影響が大きいことを示している。

- (12) a/b <ロープ 縛る>
c/d <犯人 <ロープ 縛る>>

(12)の図が示すようにビルマ語では、目的語の有無にかかわらず、「ロープ」という道具は、動詞「しぼる」と強い関わりを持っている。それ故、主語や目的語を加えても道具名詞と動詞の関係、つまり、「ロープ」と「しぼる」の結び付きの強さはそのまま保たれているため、-nE.が付加されなくても非文にならず、-nE.とゼロ助詞との交替が許されるのだと考えられる。

一方の(13)では、目的語である「獲物」は、動詞の行為によって大きな(明示的な)影響を受ける。従って、それを図示すると、(13')になる。

- (13') a/b <槍 刺す>
c/d <槍 <獲物 刺す>>

具格名詞のみの場合は、(13')a/b で示されるように、それが唯一の項として動詞と強く結びつくことが可能であり、(13)b では-nE.が付加されなくてもよいと考えられる。しかし、目的語が加わった(13)d では、動詞からもっとも影響を受け、関係が強まるのは、具格名詞ではなく、目的語の「獲物」になる。

つまり、具格名詞単独の場合と、目的語が加わった場合とで、具格名詞と動詞の関係の強さが異なる。それゆえ、目的語が加わると、具格名詞は、単独の場合と異なり、動詞との関係が弱まり、その結果、-nE.の脱落の許容度が低くなり、非文になると考えられる。

日本語の「壁塗り交替」と言われる現象も、上のビルマ語と類似した振る舞いを示す。

- (14) a. ペンキで^{/*}# 壁を# 塗った。 <ペンキ <壁 塗る>>
b. ペンキを# 壁に^{/*}# 塗った。 <壁 <ペンキ 塗る>>

(14) a の具格助詞「で」は、省略できないが、(14) b のように格助詞が 「を」に交替すると省略が可能となる。格助詞が「を」になっていることから、(14) b では名詞句「ペンキ」における動詞との結び付きが強くなったことがわかる。その結果、省略が可能となるのである。「壁」のほうは、その逆で、動詞との結び付きは、(14) b では弱く（遠くなった）ため、省略ができなくなっている。なお、ビルマ語の(12)(13)と日本語の(14)の相違として、以下の点を指摘しておきたい。日本語では、まず「で」が「を」と交替し、その後、「を」が省略され無助詞となっているが、ビルマ語は、具格助詞-ne.が直接、ゼロ助詞と交替している。

動詞との結び付きが強いとなぜ無助詞になれるかという点、当該の名詞の意味役割が動詞の意味構造をもとに復元できるからだを指摘した。それゆえ、

（多くの場合）動詞との結び付きが弱い手段や場所を示す格助詞を伴う名詞は、無助詞になると、その意味役割を復元するために動詞からの助けを受けられないため、不可となる。これは、別の見方をすると、手段や場所等を示す格助詞は、そもそも動詞の助けを必要としない、自立性の高い格助詞だと言えるだろう。

3.3 日本語とビルマ語における格助詞の自立性

ビルマ語におけるゼロ助詞の必要性を論じた際に、主語を表す・ka.のように、格助詞を伴わないほうが伴う場合よりも自然な場合があると述べた。日本語でも格助詞「が」を無助詞にできるが、省略は、話し言葉に限定されるし、それがゼロ助詞との交替であっても、それができる場合は限定されていることはすでに述べた。前節では、格助詞の省略やゼロ助詞との交替には、動詞との結び付きの強さが関与していることを指摘した。そして、この点では、日本語もビルマ語も同じである。それにも関わらず、なぜビルマ語では無助詞のほうが自然で、その結果として、生起頻度が高く、一方、日本語では無助詞の生起が限られているのだろうか。そこには、前節の最後に指摘した、格助詞の自立性が関わっていると考えられる。

鈴木(2015)の表を利用して、日本語とビルマ語における格助詞の体系・機能を対比させると表1のようになる。これを見ると、ビルマ語の基本的な格助詞は、日本語より数が少ない。日本語にも格助詞「に」のように幅広い機能を担うものがあるが、相対的に言って、ビルマ語の方が日本語よりも一つの格助詞が担う機能が多いことが窺える。

特に、ビルマ語の・ka.と・ko_については、主格や対格（・与格）といった、いわゆる文法格と、奪格や向格のような、いわゆる意味格との両方にまたがって、幅広い意味機能をもっている。日本語で「～が」と言えば、それが文法格であり、主格であると特定でき、「～から」といえばその名詞が起点の意味役割を担う意味格であると解釈され、両者が明確に区別されている。ところが、ビルマ語の「～ka.」は、それが主語であるのか、起点であるのか（過去の時点であるのか）は、それだけでは判断できない。それを特定するためには、それが付随している名詞がどのような意味素性を持っているのか、どのような動詞や名詞句と共起しているのか等を知る必要がある。もちろん、日本語の「が」が常に動作主を表すわけではなく、その具体的な意味役割の特定には動詞が必要であるが、すくなくとも、それが主格という格機能をもつものであり、「から」のような意味格でないことはわかる。

表1 日本語とビルマ語の格助詞

日本語	格機能	ビルマ語
が	主格	-ka
から	奪格	
(に)	時点格 1	
を	対格	-ko_
へ	向格	
に		
で	於格 1	-hma_
	於格 2	
		具格
と	共格	
の	属格	-yE.
まで	到格	-athi
より	比格	-thE'

「時点格 1」：過去の時点

「時点格 2」：未来の時点

「於格 1」：存在場所や時間

「於格 2」：動作の場所

格助詞の意味機能の特定において、ビルマ語は、動詞等、文中にある別の要素に依存する程度が日本語より大きい。これは、日本語の格助詞の自立性は高く（強く）、ビルマ語の格助詞の自立性は低い（弱い）と言い換えることができるだろう。

さらに言えば、日本語では、格助詞が省略されたり、ゼロ助詞と交替したりした場合、格助詞が自立的に強く示していた意味機能の損失の程度が大きい。一方、ビルマ語では、もともと有形格助詞でもその自立性は弱く、その意味機能を特定するには、文中の動詞や名詞句に強く依存する必要がある。それゆえ、

それが無形のゼロ助詞と交替しても、意味機能を特定するために必要な情報の損失は日本語と比べると大きくない。日本語とビルマ語におけるこのような格助詞の特性の相違が、無助詞に関する両言語の相違点、すなわち、日本語では、無助詞の生起が限定されているのに対し、ビルマ語では無助詞（ゼロ助詞）の交替が頻繁に起こることの背景にあるのではないかと考えられる。

4. 結論

本稿では、日本語において「無助詞」の生起が限定されているのに対し、ビルマ語では「無助詞」の生起頻度が高いこと、すなわち、日本語に比べ、ビルマ語の方が有形と無形の格助詞の交替が頻繁におこるのは両言語の格助詞の特性の相違に由来するとの提案を行なった。

ビルマ語では、格助詞の機能の幅が日本語よりも広く、そのため、格助詞のみで格機能を特定するのは相対的に難しい。所与の格助詞の意味機能を特定するにおいては、文中の動詞や名詞句への依存が不可欠である。これは、言い換えると、ビルマ語の格助詞の自立性が日本語より低い（弱い）ということである。それゆえ、自立性が高い日本語は有形格助詞が無助詞になると、格助詞自身が示していた意味機能の情報が大きく損なわれる。一方、ビルマ語では、有形格助詞の自立性は弱く、そもそも有形であっても、動詞などへの依存度が大きいために、無助詞（ゼロ助詞）と交替しても、意味機能を特定するために必要な情報の損失は日本語ほど大きくないと考えられる。

日本語とビルマ語における「無助詞」の生起頻度の差や有形と無形の格助詞の交替現象に見られる差は、両言語における有形格助詞の自立性、そして、それに付随する他要素への依存度に起因していると言えるだろう。

<参考文献>

加藤昌彦 (2013) 「ビルマ語発音表記の一例」 ms.

加藤重広 (1997) 「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』

27, pp.19-82.

- 加藤重広 (2006) 『日本語文法 入門ハンドブック』 研究社.
- 荻宿紀子 (2014) 「無助詞」研究の現状と課題『学術研究(人文科学・社会科学編)』第62号, pp.147-162.
- 金智賢 (2016) 『日韓対照研究によるハトガと無助詞』 ひつじ書房.
- 近藤安月子・姫野伴子 (2012) 『日本語文法の論点 43』 研究社.
- 鈴木孝明 (2015) 『日本語文法ファイル・日本語学と言語学からのアプローチ』 くろしお出版.
- 高見健一・久野暲 (2006) 『日本語機能的構文研究』 大修館書店.
- 高見健一・久野暲 (2014) 『日本語構文の意味と機能を探る』 くろしお出版.
- 塚本秀樹 (1991) 「日本語における格助詞の交替現象について」『愛媛大学法文学部論集.文学科編』 .vol.24, pp.103-127.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』 くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法 2 第3部格と構文 第4部 ヴォイス』 くろしお出版.
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』 くろしお出版.
- 藪司郎 (1992) 「ビルマ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』, pp.567-610 .三省堂
- 山田剛一・中川裕志 (1995) 「助詞・ゼロ助詞・無助詞」『電子情報通信学会技術研究報告. NLC, 言語理解とコミュニケーション』 95(429), pp.31-38.
- 山田剛一・中川裕志 (1996) 「助詞・無助詞の意味と役割」『情報処理学会全国大会講演論文集第52回平成8年前期(3)』, pp.57-58.

タイにおける初級段階の漢字教育のためのシラバスの提案
—漢字力診断テストの結果に基づく事例研究—

A Proposed Course Syllabus for Basic Kanji Courses in Thailand:
A Case Study of the Result of Kanji Proficiency Test

ロードスク・ルディーマード

チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科

外国語としての日本語修士課程 修了生

要旨

本研究は、漢字の持つ「形態」「読み」「意味」「用法」の4つの情報処理技能に関して初級タイ人学習者の到達状況を漢字力診断テストを基に分析し、その結果を用いて初級漢字教育のためのシラバスを作成することを目的とする。

分析の結果、学習者は漢字字形の識別能力を見る問題と、単漢字における字形とタイ語の意味との連合を見る問題はよくできるが、以下の3つの問題に関しては弱い項目が見られた。それらは1) 漢字の構成要素の識別問題、2) 単漢字と熟語漢字における音の識別問題、3) 形—音—義—用法の統合的な処理問題の3つである。また、タイ人教師のインタビューの結果から、教師は大量に繰り返し書くことによる漢字練習を重視していることが分かった。このような練習により、学習者は漢字の筆順に関する技能は身につけているが、漢字の構成要素の認識上の技能については不足している状況である。

以上の結果から、学習者は漢字を勉強している時、漢字の構成要素を見る練習の重要性に気づかず、漢字を部分に分けることによる練習もあまりしておらず、漢字の部分を見る能力が十分ではないことが分かった。また、漢字や漢字語の用法処理上の問題もあり、文法的共起性を持つ漢字語に関する知識も不足していると思われる。本論文では、漢字力診断テストの結果から学習者の問題点を捉え、その問題点を基に漢字学習項目を検討し、漢字学習項

目の一覧表として初級漢字教育のためのシラバスを提案する。

キーワード：漢字力診断テスト、初級タイ人学習者、漢字情報処理、形態、意味、読み、用法

Abstract

The objective of this research was to study the orthographic processing skills in shape, pronunciation, meaning, and usage of the Thai learners in the beginning level and to create syllabus for Kanji courses in the beginning level and the syllabus would be created according to the result of the Kanji evaluation test.

The result of the research was found that the learners were able to understand the Kanji and integrate the Kanji shape and meaning in Thai. However, the main problems of the learners were 1)the learners had a problem in recognizing the structure and component of Kanji, 2)the learners had problem in recognizing the pronunciation of radicals and compound Kanji, and 3)the learners had problem in Kanji radicals and Kanji. The result showed that the learners did not only have problem in recognizing the Kanji component and pronunciation, but the learners also had insufficient skills in Kanji usage and Kanji vocabularies. According to the interview, it was found that the teachers perceived the importance in practicing Kanji by rote writing. Even though the technique enabled the learners to use the writing technique to remember Kanji, it caused the learners the lack of practicing in recognizing the components of the Kanji radicals.

According to the result, it could be assumed that during the Kanji learning, the learners did not realize the importance of the recognizing Kanji components. Therefore, the learners did not learn the skills in decompounding Kanji leading to the problem in recognizing Kanji and compound Kanji. Moreover, learners were also unable to understand

grammar and vocabularies in the sentence level and were lack of knowledge in Kanji vocabularies with grammar condition. In this research, the researcher realizes the problems of the Kanji learner and the result was analyzed for the suitable topic for Kanji courses in the beginning level. Finally, the topic related to Kanji learning was presented in terms of syllabus.

Keywords: Kanji Proficiency Test, Thai beginner, Kanji information processing, Shape, Meaning, Pronunciation, Usage

1. はじめに

タイの高校では、現状、主要教科書の漢字導入に沿って正しい読み書き能力の向上を目指す漢字教育を実施しており、漢字の識別・運用能力には目が向けられていない。このような漢字教育では、高校生は漢字の認知より漢字の機械的練習により漢字を学習していくことになる。また、現場においては、独立した漢字の授業が開かれておらず、教師は日本語の授業の終わりの限られた時間で漢字を教えるしかないのが現状である。

このような環境で行われている漢字のテストは、漢字や漢字語彙の読み書き能力を確認する目的で行われているようである。読み書き能力の測定のみを中心とした漢字のテストでは、タイ人学習者が漢字や漢字語彙の意味理解と、漢字の運用に関する能力を身につけているかどうかは、未だ明確にされていない。また、授業の基となるシラバスに関しても、漢字教育に特化したシラバスは、タイでは未だ見当たらない状況である。従って、漢字教育に適した学習項目から成るシラバスを作るため、筆者はタイの初級段階の漢字教育に相応しい学習項目を検討したいと思う。

本研究では、日本語初級レベルのタイ人学習者を対象に、まず漢字の持つ形一音一義一用法の総合的処理能力を測定できる漢字力診断テストを行い、漢字に関するタイ人学習者の到達状況を分析する。それから、その結果を基にして

初級段階の漢字クラスで教えるべき学習項目を検討し、クラスで教えるべき学習項目の指針を一覧表にして示し、シラバスを提案したい。本研究の目的は、以下に示す通りである。

- 1) 漢字に関して日本語初級レベルのタイ人学習者の到達状況を理解する。
- 2) 学習者の到達状況を踏まえ、初級の漢字クラスで教えるべき学習項目を明確にする。
- 3) タイの初級漢字教育に適した学習項目の一覧表としてシラバスを提案する。

2. 先行研究

本稿は「漢字力診断テストを基にして初級漢字教育のためのシラバスを作成すること」を目的とするため、本節では、漢字教育のためのシラバスに関する先行研究と、漢字力診断テストに関する先行研究に分けて述べる。

2.1 漢字教育のためのシラバスに関する先行研究

高見澤ほか（2004：41-43）によれば、「シラバス (syllabus)」とは日本語では「教授項目」あるいは「教授細目」と訳されているが、簡単に言えば、教えるべきことの一覧表を意味する。加納（1994：42）によれば、従来の漢字教育におけるシラバスは、単なる学習漢字及び漢字語彙の一覧表であることが多かったが、このような漢字の成り立ちや漢字の構造について書かれていないシラバスは非漢字圏学習者にとって大きな負担となる。従って、漢字の成り立ちや漢字の構造について書かれているシラバスがあれば、非漢字圏の外国人学習者向けの漢字の授業を計画するのに役に立つだろう。

初級段階の漢字教育のためのシラバスの提案については、酒井（1990）、加納（1994）、カイザー（2000）などがある。

酒井（1990）と加納（1994）は特定のテキストを基に漢字教育のためのシラバスを提案しているが、酒井（1990）は東京外国語大学で担当している日本語学習の新テキストである『初級日本語』による漢字導入600字を基に初級段

階の漢字教育のためのシラバスを提案し、漢字導入の進め方も指摘している。このシラバスは、漢字の読み方および書き方を教える練習や漢字のまとめテストの形式は整えられているが、漢字の意味理解、運用力、識別力を発達させるための指導方法への言及はない。

一方、加納（1994）は非漢字圏学習者の漢字学習に対する必要な学習項目を検討するため、漢字学習の主要教科書である『基本漢字 500』による基本漢字 500 字を用いている。そして、その学習項目の一覧表としての初級段階の漢字教育のためのシラバスを提案している。つまり、酒井（1990）、加納（1994）は初級教科書を基にシラバスを提案しているが、初級漢字教育のためのシラバスに関する従来の研究においては、初級教科書を基としたシラバスの提案ばかりでなく、ボトムアップ式で漢字学習を中心としたシラバスについて検討した先行研究も見られる。

カイザー（2000）は漢字・漢字語彙のボトムアップ式で漢字学習を中心として非漢字圏学習者のための漢字教育に適したシラバスの在り方を検討している。そして、初級段階からの漢字字形の識別・弁別練習の重要性も主張している。トリーニ（1992）もカイザー（2000）と同じく、入門期において非漢字圏学習者に漢字の「形の構造」を理解させる練習から始め、次に複雑な文字体系としての漢字の識別能力を発達させる練習の重要性を述べている。

この他の漢字教育のためのシラバスの提案には酒井（1993）があるが、中級段階のものである。酒井（1993）では、中級レベルの日本語テキストにある漢字導入を基にシラバスを提案しているが、学習項目から成るシラバスの構成を考慮するには至っていない。

一方、加納（1994）の中級段階の漢字教育シラバス作成は、阿久津ほか（1992）の漢字力テストの結果を用いている。このシラバスは、学習者の漢字力を測る漢字力テストの結果を採用しているため、学習者 1 人 1 人の漢字力の問題点を捉えることができ、学習者の漢字学習・習得状況を考慮したシラバスであると言える。また、加納（1994）は漢字の持つ「形態」「読み」「意味」「用法」に関する技能を促進できる学習項目とその指導方法についても指摘している。し

かし、同時に提案した初級段階の漢字教育のためのシラバスは、中級段階の漢字教育のためのシラバスと同じく必要な学習項目も検討しているが、漢字力テストの結果を基にした学習項目の検討は見られない。

2.2 漢字力診断テストに関する先行研究

これまでの研究で、漢字力診断テストの結果を基にした漢字教育のためのシラバス案については、中級段階の漢字教育のためのシラバスを提案した加納（1994）の他に見当たらないが、漢字力診断テストそのものについての研究には、加納・清水（1992）、加納（2001）、加納・酒井（2003）、ブッサバーほか（2010）がある。

加納・清水（1992）は漢字圏・非漢字圏学習者の「読み」「書き」「意味理解」「運用」の4つの漢字能力を見るための漢字力テストを提案しているが、この漢字力診断テストには、漢字の意味と用法に関する技能を測るテスト項目も少なく、加納（2001）では漢字字形と読み・意味・用法との関連性を見るテスト項目を追加して漢字処理技能測定テスト（以下、「漢字力診断テスト」）を作成している。しかし、漢字圏学習者と中級以上向けの項目があったことから、加納・酒井（2003）は初級段階の非漢字圏学習者の漢字力のレベルに合うテスト項目を検討してテスト項目を変更している。また、漢字字形と音声処理との関係を見るためのテスト項目も追加している。

一方、タイの漢字教育では、ブッサバーほか（2010）も加納・酒井（2003）の漢字力診断テストを基に初級前半終了のタイ人学習者における漢字力の実態を分析しているが、ブッサバーほか（2010）のテストは主に「形態」「読み」「意味」「用法」の4つの漢字力を確認する目的で行われ、音声情報処理に関する能力を問うテスト項目は除いている。

以上の先行研究には、漢字力診断テストの結果を基に中級段階の漢字教育のためのシラバスを提案したものはあるが、漢字力診断テストの結果を基に初級段階の漢字教育に適したシラバスを提案した実証研究は、管見の限り見当たらない。そこで、本研究は漢字力診断テストの結果を基にタイの初級段階の漢字

教育に適した必要な学習項目を検討し、学習項目の指針としての一覧表を示し、初級段階の漢字教育のためのシラバスを提案したい。

3. 研究方法

本節では、漢字に関するタイ人日本語学習者の到達状況を明確にするための調査（以下、「調査」）の概要、本調査の研究対象データ収集とデータ分析について順に述べる。

3.1 調査概要

本研究では、タイにおける初級段階の漢字教育のためのシラバスを提案することを目的に調査を行う。まず、初級レベルのタイ人日本語学習者を対象に、ブッサバーほか（2010）にあるテスト項目を基に漢字力診断テストを作成し、漢字に関する総合的知識や運用力を測り、漢字に関するタイ人学習者の到達状況を分析する。それから、その結果を基に初級段階の漢字教育に適した学習項目を検討の上、学習項目の一覧表を提示し、シラバスを提案する。

3.2 調査協力者

初級レベルの日本語が教えられているタイの高校2校（以下、「A校」と「B校」）2、3年生計48名を対象に、2016年2月中旬に調査を行った。本調査の調査協力者の詳細は、表1の通りである。

表1. 調査協力者の情報

調査協力者	A校		B校	
	高校2年生	高校3年生	高校2年生	高校3年生
学年別の学習者数	15名	9名	15名	9名
	男5名 女10名	男3名 女6名	男7名 女8名	男2名 女7名
主要教科書(漢字数)	『あきこと友だち』(漢字305字)			
既習漢字数	228字	305字	228字	305字
学校別学習者数	24名		24名	

3.3 データ収集

本研究は、アンケート（漢字力診断テストを含む）とインフォーマル・インタビューにより調査を行う。

3.3.1 アンケート

3.3.1.1 アンケートの構成

アンケートは、第1部と第2部から成る。第1部は、性別や日本語能力試験のレベルや漢字学習など調査協力者の一般的な情報を問うもので、第2部は漢字力診断テストである。漢字力診断テストは、ブッサバーほか（2010）のテスト項目を基に、「形態」「意味」「読み」「用法」の4つの情報処理に関する技能を測る目的で作成した。テストは、高校生の主要教科書である『あきこと友だち』の漢字、言葉、文法に含まれる内容を範囲とし、作成した。テスト項目は12項目あり、各項目に質問を5問ずつ設定し、合計60問である。また、このテストの回答時間は約30分である。

3.3.1.2 実施時期

A校のアンケート調査は2016年2月18日、B校のアンケート調査は2016年2月19日に実施した。所要時間は第1部が3分、第2部が20分であった。

3.3.2 インフォーマル・インタビュー

高校における漢字教育の実態の詳細を知るため、時間に制限を設けず自由に話してもらう形でインフォーマル・インタビューを行った。対象者はバンコク近辺の高校で漢字を教えている教師でICレコーダーで音声を録音しながら、半構造化インタビューを行った。調査への協力が得られた教師はA校、B校各1名の計2名である（以下、「教師A」と「教師B」）。両者とも、タイ人教師であり、教師Aの日本語教育歴は16年、教師Bは5年である。

3.3.2.1 実施時期

教師Aへのインタビューは2016年2月25日に、教師Bへのインタビューは2016年3年2日に行った。インタビューの所要時間は約20-40分であった。

3.4 データ分析の種類

漢字力診断テストを含むアンケートとインフォーマル・インタビューのデータについて、以下の2つの点から分析を行う。

- 1) 漢字に関する学年別のタイ人学習者の到達状況を分析するため、「形態」「意味」「読み」「用法」の4つの情報処理技能におけるアンケートの各テスト項目ごとに学習者の正答率を算出する。また、誤答とその誤用の原因についても分析する。
- 2) タイ人日本語教師のインタビューデータを基に、タイの高校における漢字教育の現状を分析する。

4. 結果

本節では、漢字力診断テストの結果をまとめ、各テスト項目ごとに学習者の正答率を基にしてその結果について述べる。また、タイの高校における漢字教育の現状についても述べる。




4.1 高校2年生と高校3年生の漢字力診断テストの結果

漢字に関する高校2年生と3年生の到達状況を分析するため、漢字の持つ「形態」「意味」「読み」「用法」の4つの情報処理技能の各テスト項目における学習者の正答率を算出し、表2、表3、表4、および表5にまとめる。形態情報処理の技能、形態－意味情報処理の技能、形態－読み情報処理の技能および形－音－義－用法の統合的処理の技能という4つの技能におけるテスト項目の正答率に関しては、後述する。

表2に示すように、高校2年生の学習者は漢字の字形と字形構造パターンが80%以上識別できる。高校2年生の字形構造パターンの識別問題に対する正答率は84%となっている。80%以上の学習者は複雑な字形を持つ漢字の構成要素に気づき、漢字を部分に分けて漢字の全体的構造を認識することができると分かった。

表2. 形態情報処理の技能における高校2年生と高校3年生の正答率

形態情報処理の技能	正答率	
	高校2年生	高校3年生
1) 漢字の字形識別問題	93.3%	90.0%
2) 字形構造パターンの識別問題	84.0%	76.6%
3) 構成要素の識別問題	52.6%	82.2%

一方、高校3年生における字形構造パターンの識別問題に対する正答率は76.6%である。この問題では、「語」のような複雑な字形を持つ漢字の構成要素の間違いが少なくない。「語」という漢字の字形構造パターンはh. であるが、学習者の回答はc.  (言+舌)であった。「語」という字形構造パターンをしっかりと見ると、字形の右の要素は「五」と「口」の要素から成り、さらに分けることができる。「語」の漢字は「語」を「言+五+口」という要素に分けられ、最も適切な構造パターンはh. である。

成要素の識別問題に対する正答率は、2年生が52.6%で、3年生が82.2%だった。この結果から、高校2年生は、漢字の構成要素の問題がうまく処理できていないことが分かった。テスト項目で使用した漢字には「村」と「働」の高校3年で学習する字が混ざっている。学習者の誤答の多さから、40%以上の学習者は漢字の要素を正しく識別できていないことが分かった。例えば、「いもうと」という読み方を持つ漢字の要素を問う問題は、正しい答えは「c末」であるが、学習者の回答は「b.市」と「d.子」だった。誤答率は53.3%だった。「いもうと」という読み方を持つ漢字の要素を問う問題を処理できない学習者は、53.3%に上るという結果から、学習者は漢字の構成要素の識別力上問題があるだけではなく、既習漢字が使われる漢字語の記憶力についても、未だ知識が不足していると考えられる。

以上のように、漢字の形態情報処理の技能のうち、70%以上の学習者は、漢字の字形と字形構造パターンの識別についての知識を身につけているが、漢字の構成要素の認識上技能についての能力は不足している状況である。

表3. 形態—意味情報処理の技能における高校2年生と高校3年生の正答率

形態—意味情報処理の技能	正答率	
	高校2年生	高校3年生
1) 字形・語形とタイ語による意味の連合問題	63.3%	90.0%
2) 対義字・対義語の識別問題	46.6%	77.7%

表3に示したように、高校2年生は字形・語形とタイ語の意味との関連性を見る問題が60%以上処理できる一方で、対義字の識別問題に関しては、対になっている意味を持つ単漢字を識別できない学習者が50%以上もいる。字形・語形とタイ語による意味の連合問題に対する正答率は63.3%である。学習者は字形と意味との連合を60%以上が理解できていたが、間違いも少なくない。60%以上の学習者はタイ語の意味に相当する単漢字を正しく選択できた。学習者がうまく処理できない問題は「หนัก」というタイ語の意味と漢字字形との関連性を見る問題である。この問題を誤答率は60%であった。一方、高校3年生における字形・語形とタイ語による意味の連合問題に対する正答率は90%である。この問題の選択肢は、単漢字だけ示されていたが、学習者は単漢字の字形とタイ語の意味を正しく結びつけることができた。

対義字・対義語の識別問題の正答率は、2年生が46.6%で、3年生が77.7%という結果だった。高校2年生の誤答を見ると、63.3%の学習者は「弱」という漢字と反対の意味である漢字を問う問題を処理できなかった。さらに、73.3%の協力者は「軽」と対になっている漢字を適切に識別できないという結果が得られた。

つまり、形態—意味情報処理の技能におけるテストの結果から見ると、学習者はタイ語の意味だけを見て単漢字の字形が連合できるが、対になっている漢字の知識においては、学習者の理解は未だ不十分である。つまり、反対の意味を持つ漢字の識別に関する技能は不足していると考えられる。

表4 形態－読み情報処理の技能における高校2年生と高校3年生の正答率

形態－読み情報処理の技能	正答率	
	高校2年生	高校3年生
1) 字形・語形と読みの連合問題	57.3%	73.3%
2) 読みと字形・語形の連合問題	67.3%	75.5%
3) 同音字の識別問題	34.0%	60.0%

表4に示したように、形態－読み情報処理の技能のうち、高校3年生は字形・語形と読みの連合問題と、読みと字形・語形の連合問題を70%以上が処理できていた。しかし、2年生でこの問題が処理できたのは70%以下である。2年生がうまく処理できていたのは、読みと字形・語形の連合問題で、67.3%の正答率だった。字形・語形と読みの連合問題における文脈は、高校3年の文法から構成されているが、5つの質問項目に現れた漢字語の読み方は、既習漢字語である。従って、学習者が文脈情報を見ないで漢字語の読み方に相当する漢字字形を選択する可能性が高い。実際、この問題を間違えた学習者は少なくなかった。間違えた例としては、「しつもん」という読み方の漢字字形を問う問題は正しい答えが「a. 質問」であるが、多くの学習者の回答は「c. 質門」だった。学習者は「門」の漢字も「もん」という音読みを持つという知識があり、「門」の漢字が「しつもん」の「もん」で使われる漢字だという勘違いを招いた。それだけではなく、学習者は「質問」という熟語漢字における字形を覚えられず、「しつもん」の読み方に相当する漢字字形を問う問題に遭遇すると、漢字字形を理解できておらず、「しつもん」の読み方から見てその字形を正しく選択できなかった。

字形・語形と読みの連合問題に対する正答率は、57.3%だった。5つの質問項目で用いた漢字語は高校2年ですでに勉強したものである。学習者の誤答から、40%程度の学習者は熟語漢字の読み情報をうまく処理できていないことが分かった。例えば、「世界中」などの漢字語の読み方を問う問題は正しい読み方

が「d.せかいじゅう」であるが、学習者の回答は「a.せいかいじゅう」と「b.せがいじゅう」と「c.せかいちゅう」に分かれた。この問題の誤答率は 76.6% である。誤答の内訳は、「c.せかいちゅう」が 46.6%、「b.せがいじゅう」が 20%、「a.せいかいじゅう」が 10%である。誤答を招いたのは、学習者が似ている音に混乱しただけでなく、音読みから成る熟語漢字の記憶力も影響していると考えられる。

また、単漢字の音読みを問う問題についても、高校 2 年生と 3 年生は非常に弱かった。学習者は単漢字の音読みを想起できず、例と同じ音読みを持つ漢字を問う問題がうまく処理できなかつた。同音字の識別問題に対する正答率は 2 年生が 34%で、3 年生が 60%である。

2 年生の 60%以上は例と同じ音読みを持つ単漢字が適切に識別できず、例えば、「強」と同じ音の単漢字を問う問題の正しい答えは「a.教」で、「きょう」という音読みを持つ単漢字であるが、学習者の回答は「a.界」と「c.習」と「d.験」だった。誤答率は 63.3%である。63.3%のうち、「a.界」が 16.6%、「c.習」と「d.験」がそれぞれ 13.3%である。残りの 20%は未回答である。

一方、3 年生の 40%がうまく処理できないのは、「研」という漢字と同じ音の単漢字を問う問題である。「研」と同じ音の単漢字を問う問題に対する正しい答えは「a.県」で、「けん」の音読みを持つ単漢字であるが、回答は「b.頭」と「d.軽」に集中し、誤答率は 50%であった。50%のうち、「b.頭」が 38.8%で多く、「d.軽」は 11.1%である。

以上の結果から、高校 3 年は『あきこと友だち』における漢字や漢字語を全て勉強してきてはいるが、勉強した漢字と漢字語における音の識別力上の問題があり、特に、単漢字レベルでの音読みの識別に関する能力に問題があることが明らかになった。

表 5 に示すように、2 年生の学習者は形一音一義一用法の統合的処理の技能を問う問題の処理能力が低い。この技能におけるテスト項目のうち、漢字の送り仮名の用法問題、漢字語の品詞の識別問題、文脈（文法的共起性）による漢字語の選択問題、および文脈（意味的連語知識）による漢字語の選択問題に対

する正答率は全て 60%以下である。一方、3 年生は 4 つの問題をそれぞれ 60%以上が処理できているが、誤答も多く見られる。

表 5. 形－音－義－用法の統合的処理の技能における高校 2 年生と高校 3 年生の正答率

形－音－義－用法の統合的処理の技能	正答率	
	高校 2 年生	高校 3 年生
1) 漢字の送り仮名の用法問題	44.0%	68.8%
2) 漢字語の品詞の識別問題	55.3%	72.2%
3) 文脈(文法的共起性)による漢字の選択問題	54.6%	66.6%
4) 文脈(意味的連語知識)による漢字の選択問題	39.3%	64.4%

まず、漢字の送り仮名の用法問題に対する正答率は 2 年生が 44%で、3 年生が 68.8%である。2 年生の 50%以上は形容詞の送り仮名から見て単漢字を適切に識別できなかった。漢字語の品詞の識別問題に対する正答率は 2 年生が 55.3%で、3 年生が 72.2%という結果だった。2 年生の 42.2%は形容詞と形容動詞である漢字語の品詞を識別できなかった。この結果から、学習者は「古い」「元気」「便利」などの漢字語がどの品詞に分類されるかという品詞の用法を理解できておらず、これらの漢字語の品詞に関する知識が不足していると考えられる。

文脈(文法的共起性)による漢字の選択問題に対する正答率は 2 年生が 54.6%で、3 年生が 66.6%であった。2 年生の誤答率は 45%である。次に示すのは質問項目 53 番の例である。

53. まいにちこのバスでいって 28 ばんのバスに()、タマサートびょういんでおります。

- a 行って b 着いて c 入って d 乗って

上の 53 番の質問では、53.3%の学習者は文脈に適する漢字語を選択することができた。この問題の正しい答えは「d 乗って」であるが、誤答は「a 行って」

と「b.着いて」と「c.入って」に分かれた。46.6%の誤答のうち、「a.行って」と「c.入って」がそれぞれ16.6%、「b.着いて」が3.3%で、未回答が10%あった。この質問項目における文脈も移動の到着場所を表す「に」の格助詞情報と「バス」という共起単語情報があるが、学習者は「バス^に」のような格助詞情報と単語情報を手掛かりにして動詞である漢字語の用法に関する知識を使いこなせなかった。

文脈（意味的連語知識）による漢字語の選択問題に対する正答率は2年生が39.3%で、3年生の学習者が64.4%である。以下は質問項目57番の例である。

57. じかんがないから、[] たべましょう。

a.話して b.聞いて c.急いで d.持って

57番で、文脈に適する漢字語の正答率は23.3%である。この問題の正答は「c.急いで」であるが、学習者の回答は「a.話して」と「b.聞いて」と「d.持って」で、誤答は76.6%に上った。76.6%のうち、「a.話して」が33.3%、「b.聞いて」が13.3%、「d.持って」が20%である。正答の「急いで」という動詞の漢字語は高校3年で学ぶ未習の漢字語だが、文中の単語情報から見て文の意味をきちんと考えれば、学習者は「話して」「聞いて」「持って」という動詞の漢字語は、いずれもこの文脈と共起できる意味を持っていないと判断できるはずである。従って、文法構造上の情報と単語情報を手掛かりにして文脈を知るだけでなく、選択肢における未知語の意味の類推能力も必要であると考えられる。

つまり、形一音一義一用法の統合的処理の技能のうち、漢字の送り仮名の用法でも、漢字語の品詞識別でも、文脈による漢字語の選択でも、学習者は漢字や漢字語の運用力が未だ不足していると考えられる。そして、学習者は『あきこと友だち』における漢字や漢字語や様々な構文を習ってきて、単漢字の読み情報と意味情報に対する十分な処理能力を持っておらず、文レベルでの漢字語の用法情報に対する処理上の問題もある。

以上のように、高校2年生と高校3年生を対象に漢字力診断テストを行い、

漢字に関する学習者の到達状況を分析することによって、学習者における漢字学習の問題点を捉えることができた。その問題点は以下のようになる。

- 1) 漢字の字形構造と構成要素の識別
- 2) 単漢字の音の記憶
- 3) 反対の意味を持つ漢字の識別
- 4) 漢字の音訓の記憶
- 5) 字形・語形と読みの連合
- 6) 読みと字形・語形の連合
- 7) 音読みから成る熟語漢字の処理
- 8) 漢字の送り仮名の用法
- 9) 漢字語の品詞の識別
- 10) 文中の他の言葉と意味的に共起する漢字語の用法
- 11) 文法的共起性に関する情報を手掛かりにして文脈に適する漢字語の用法

4.2 タイの高校における漢字教育の現状

バンコク近辺の高校2校で漢字を教えている2名のタイ人教師にインタビューを行うことによって、漢字教育の実態が明らかになった。現在、高校における日本語授業は1週間に6コマ行われ、1コマは50分である。漢字教育は、日本語授業の1コマで行われ、主要教科書である『あきこと友だち』の漢字導入に沿って漢字の書き順や正しい読み書き能力の向上を目指す教育を実施している。

授業では、主要教科書である『あきこと友だち』の他に、漢字練習のためにワークブックを使用している。ワークブックでは漢字を繰り返し書くことを中心としている。教師の観点から、初級段階から漢字を繰り返し書くという練習を重視しているようである。たくさん書けば書くほど、漢字の画数を覚えられ

ると答えた教師 A の話から、学習者は漢字の筆順や漢字の書き方に関する技能を身につけていると考えられる。しかし、漢字に割ける時間が非常に少ないため、漢字の読み・意味理解や用法など漢字に関する他の技能・知識を授業で充実させることは難しいようである。従って、漢字に関する他の技能を補うため、日本語学校へ勉強に行ったり、本屋で漢字練習の本を買って自分で練習したりするなど、授業外で自分で漢字学習に取り組まなければならないという。

また、学校で単独での漢字の授業が開かれていないと答えた教師 A、教師 B の話から、教師は日本語の授業の限られた時間で漢字を教えることが分かった。そして、漢字教育のシラバスを作成したことは未だないと述べていた。

4.3 タイにおける初級段階の漢字教育のためのシラバス

本稿では漢字力診断テストの結果を基に漢字に関する初級タイ人学習者の到達状況について分析した結果、学習者が今までどのような漢字力を身につけているか、どのような漢字力が不足しているかという学習者の漢字力や問題点が見られた。そこで、筆者は学習者の問題点を基にして初級段階の漢字クラスで教えるべき学習項目を検討した。学習項目の一覧表として初級段階の漢字教育のためのシラバスを提案したい。表 6 に初級漢字教育のための学習項目の指針を示す。

表 6. 初級漢字教育のための学習項目の指針

漢字学習項目	『あきこと友だち』による漢字(課)
1. 象形文字 指事文字 会意文字	象形文字: 日月火水木金土山川田目口耳手足人女子車門魚雨牛 指事文字: 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 上 下 中 大 小 本 円 半 会意文字: 男 好 間 開 分 明 問 森 林 など
2. 漢字の筆順 画数の数え方	(第 2 課) 日本人父母友 (第 3 課) 上 中 下 男 女 子 木
3. 漢字の音と訓の 読み分け	(第 3 課) 上 中 下 男 女 子 木
4. 動詞や形容詞の漢字 の送り仮名	動詞グループ 1-2: 来 行 飲 食 作 見 開 切 買 泳 使 書 読 言 入 出 着 住 帰 持 待 洗 閉 休 歩 知 思 乗 教 考 借 歌 合 始 送 集 貸 会 終 走 開 売 習 働 死 建 通 起 動 急 引 困 立 晴

漢字学習項目	『あきこと友だち』による漢字(課)																														
4. 動詞や形容詞の漢字の送り仮名	形容詞 : 赤青小大新古安高広楽暑長近多白黒寒悪早正少短暗弱 遠太重軽低強																														
5. 漢字熟語の品詞の用法による分類	動詞グループ3 : 説明電話勉強料理旅行見学見物入院運転卒業研究など 形容動詞 : 元気便利特別有名など 名詞 : 学校学生病気試合試験など																														
6. 漢字の部首による分類	<table border="0"> <tr> <td>偏の部首</td> <td>つくりの部首</td> </tr> <tr> <td>木:校林村</td> <td>リ:利別</td> </tr> <tr> <td>日:時明映晴</td> <td>頁:顔頭題</td> </tr> <tr> <td>女:好姉妹始</td> <td>斤:新所近</td> </tr> <tr> <td>イ:作使住仕休便借体</td> <td>口:知和</td> </tr> <tr> <td>彡:海泳洗池洋注</td> <td></td> </tr> <tr> <td>言:説語読話計試</td> <td></td> </tr> <tr> <td>かんむりの部首</td> <td>脚の部首</td> </tr> <tr> <td>宀:家安寒室客</td> <td>貝:買員貸</td> </tr> <tr> <td>艹:薬花茶英苦草菜</td> <td>心:悪思意急</td> </tr> <tr> <td>たれの部首</td> <td>構えの部首</td> </tr> <tr> <td>广:店広度</td> <td>口:回国</td> </tr> <tr> <td>尸:屋</td> <td>門:間開問閉開</td> </tr> <tr> <td>にょうの部首</td> <td></td> </tr> <tr> <td>辶:週道送通遠</td> <td></td> </tr> </table>	偏の部首	つくりの部首	木:校林村	リ:利別	日:時明映晴	頁:顔頭題	女:好姉妹始	斤:新所近	イ:作使住仕休便借体	口:知和	彡:海泳洗池洋注		言:説語読話計試		かんむりの部首	脚の部首	宀:家安寒室客	貝:買員貸	艹:薬花茶英苦草菜	心:悪思意急	たれの部首	構えの部首	广:店広度	口:回国	尸:屋	門:間開問閉開	にょうの部首		辶:週道送通遠	
偏の部首	つくりの部首																														
木:校林村	リ:利別																														
日:時明映晴	頁:顔頭題																														
女:好姉妹始	斤:新所近																														
イ:作使住仕休便借体	口:知和																														
彡:海泳洗池洋注																															
言:説語読話計試																															
かんむりの部首	脚の部首																														
宀:家安寒室客	貝:買員貸																														
艹:薬花茶英苦草菜	心:悪思意急																														
たれの部首	構えの部首																														
广:店広度	口:回国																														
尸:屋	門:間開問閉開																														
にょうの部首																															
辶:週道送通遠																															
7. 反義の漢字と漢字語	父母/上下/男女/大小/新古/安高/暑寒/長短/右左/多少/近遠/借貸/閉開/始終/強弱/買売/重軽/高低/前後/中外/入出など																														
8. 文脈(文法的共起性)による漢字語の用法	行来帰入着乗会住閉開通終注意など																														
9. 漢字の接辞的用法	接頭辞 : 毎今先来全両不以最など 接尾辞 : 時曜週百千万度台番号語屋室所館員者化県村用様 など																														
10. 同音の漢字による分類	コウ : 校高口工 キョウ: 強教 シュウ: 週集終習 シン : 新親真心 キユウ: 九休究急 ゴ : 五語後午など																														
11. 会話や文章による漢字熟語の用法	第2課－第3課における漢字熟語 *注意: 字形が同じで、音が異なる字 (同形異音字) 一年中、世界中 ↔ 午前中 会場 ↔ 場所 先月 ↔ 何月 学校 ↔ 学生																														

5. 考察と結論

漢字力診断テストの結果を基にした学習項目の一覧表として初級段階の漢字教育のためのシラバスについて、以下に5つの考察を示す。

(1) 象形文字、指事文字、会意文字から導入を行い、漢字の種類についての知識を充実するべきであろう。クラスで漢字学習の面白さを喚起するためには、教師は象形文字、指事文字および会意文字を表す面白く分かりやすい語源の絵を準備する必要がある。そして、漢字の書き方の規則や、音訓の読み分けなど漢字学習の基本的な知識についても教えなければならない。

(2) 漢字の音訓に関しては、筆順の他に、漢字における音と訓の読みを覚えることも漢字学習の基本となっている。しかし、初級学習者の問題は、音読みの記憶力の不足である。更に、漢字のもう1つの読み情報である訓読みも、読み自体が名詞や動詞や形容詞である語に関わるものなので、初級学習者にとって覚えるのは容易なことではないだろう。従って、漢字の音と訓の読み分けを教える時、音と訓とをすぐに使えるような練習を準備しておかなければ、学習者は習っただけで忘れてしまい、漢字の音読みと訓読みを覚えることに時間がかかると思われる。

(3) 動詞や形容詞である漢字学習では単漢字はもちろん、それに対する送り仮名の用法についても知っておく必要がある。特に、字形が異なるが、送り仮名が同じ漢字には注意が必要である。例えば、「赤い、古い、広い、暑い」など「[]い」という送り仮名が使われる漢字などである。また、名詞やサ変動詞や形容動詞の品詞の用法を教えるための文レベルでの練習も必要である。

(4) 漢字の構成要素に気づかせる練習についても初級から重視すべきである。漢字全体を覚えることは画数が少ない基本的な字なら、初級学習者は容易に覚えられ、問題はないが、画数が多く複雑な字だと、覚えることに時間がかかり、苦勞している学習者がいるだろう。

漢字の意味上情報に関しては、漢字に相当する意味の他に、すでに習った漢字と対になっている漢字を勉強し始めるとき、対の漢字をペアとして覚える練

習も必要である。学習者が反対字・反対語の識別能力を身につけていることから、反対の意味である漢字が混ざっている漢字熟語に遭遇すると、未知の漢字熟語における一部の意味を類推することができるのではないだろうか。

また、表6の学習項目8に示したように文脈による漢字語の用法に関しても、漢字語の意味に関する知識を使いこなすためには、文中の文法的共起性に関する情報を持つ文レベルでの漢字語の練習を整備しておくべきであろう。例えば、「行きます、入ります、乗ります、注意します」のような動詞の漢字語に共起する格助詞情報（「に」「が」など）である。そして、『あきこと友だち』での学習漢字は、接頭辞と接尾辞を示すものがあるため、漢字の接辞的用法に関する学習項目を取り上げ、接辞的用法についての知識も教えるべきである。どのような漢字が接頭辞か接尾辞を示すかという知識を持つことは、初級学習者が語彙量を増やす一助となるだろう。

(5) 同音の漢字による分類に関しては同じ音読みを持つ様々な単漢字の識別上能力を向上するために、漢字学習の活動の1つとしてこのシラバスで取り上げた。このような練習は、同音の単漢字を知らせるだけでなく、音読みから成る漢字熟語の読み方を類推するのに役に立つはずである。

本研究で提案したシラバスは、漢字力診断テストの結果を基に初級段階の漢字教育に適した必要な学習項目を検討したことにより、学習者の漢字力の実態を理解できるだけでなく、体系的に「形態」「読み」「意味」「用法」の4つの漢字情報処理上の技能を充実させる指導法や練習について検討することも可能である。

しかし、本研究で扱ったデータは、対象者が限定的であり、漢字力に関する学習者の結果の信頼性に影響を及ぼす可能性がある。従って、今後の課題は、より信頼性の高いデータ取得のため、対象校の数を増やし、本研究と同じ高校2年生と3年生を対象に「形態」「読み」「意味」「用法」の4つの漢字能力の実態について調査を行うことである。また、インタビューにより、現場で漢字を教えている教師はタイ人教師も日本人教師もいることが分かったので、高校における漢字教育の現状に関して偏りが無い情報を得るために、それぞれの学校

において漢字を教えているタイ人教師と日本人教師へのインタビューも行う必要があるだろう。

<参考文献>

- 阿久津智・清水百合・加納千恵子・谷部弘子・石井恵理子（1992）「中級漢字の指導法—漢字圏・非漢字圏の学生に対する指導の違いを中心に—」『日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.7-12
- カイザー・シュテファン（2000）「非漢字圏日本語学習者のための漢字・語彙教育のシラバスに関する考察」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 7号、pp.25-34、筑波大学留学センター
- 加納千恵子・清水百合（1992）「漢字力の測定・評価に関する一試案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 7号、pp.177-191
- 加納千恵子（1994）「漢字教育のためのシラバス案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 9号、pp.41-60、筑波大学留学生センター
- 加納千恵子（2001）「外国人学習者による漢字の情報処理について—漢字処理技能の測定・評価に向けて—」『文藝言語研究言語編』 39号、pp.45-60、筑波大学大学院人文社会科学研究科
- 加納千恵子・酒井たか子（2003）「漢字処理能力測定テストの開発」『筑波大学留学生センター日本語教育論集大』 18号、pp.59-80、筑波大学留学生センター
- 酒井順子（1990）「漢字教育のシラバス（初級）—一定着度をめぐる—考察—」『日本語学校論集』 17号、pp.95-119、東京外国語大学
- 酒井順子（1993）「漢字教育のシラバス（中級）—一定着度をめぐる—考察—」『留学生日本語教育センター論集』 19号、pp.109-139、東京外国語大学
- 高見澤孟・伊藤博文・ハント蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由香子（2004）『新・初めての日本語教育 基本用語辞典』アスク（新）
- トリーニ・アルド（1992）「非漢字系学習者のための入門期における漢字学習指導の一考察」『世界の日本語教育』 2号、pp.65-76、国際交流基金日本

語国際センター

ブッサバー・バンチョンマニー、カノックワン・L片桐、パッチャラポーシ・
ケーオキッサダン、ソムキアット・チャウエンギジワニット、スニー
ラット・ニャンジャローンスック、松田佳子（2010）「診断テストから
見たタイ人学習者の漢字処理能力—初級終了程度の高校生を対象に—」
『タイ国日本研究国際シンポジウム 2010 論文報告書』 pp.255-273、チ
ュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座

浦島伝説の利用について

The Use and Adaptation of Urashima Folktale

ワカバヤシ・ポンティップ

チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科

日本文化・日本文学博士課程 D3

要旨

浦島伝説が残る三つの町—京都府与謝郡伊根町、愛知県知多郡武豊町、長野県木曾郡上松町—で浦島伝説がどのように利用されているかを文献資料の調査と聞き書き調査をした。その結果、伝説の重さ、つまり伝説の持つ歴史や権威が、町おこしの過程に大きく係わっていることがわかった。また、浦島伝説交流サミットの失敗は、各町がそれぞれの独自性を超えたところで連帯しようとしても限界があることを浮き彫りにしたことが確認できた。

キーワード：浦島伝説、利用、町おこし、うらしま伝説交流サミット

Abstract

The purpose of this article is to study the use and adaptation of Urashima folktale that has been passed down orally for generations especially in three towns, namely Ine Town, Yosa-gun in Kyoto Prefecture; Taketoyo Town, Chita-gun in Aichi Prefecture; and Agematsu Town, Kiso-gun in Nagano Prefecture through document analysis and interviews. The result of the study shows that a legendary possibility, or to say, the tale's origin and history as well as the impact of the story in those towns greatly influence the Revitalization of Town. Moreover, the mistakes discovered in the Urashima Legend Alternating Current Summit holding reveal the limits of cooperation, even though each town had already shown its distinctive

features.

Keywords: Urashima folktale, The use and adaptation, The Revitalization of Town, The Urashima Legend Alternating Current Summit

1. はじめに

浦島伝説を持つ自治体は高橋（2005）によれば、全国で27だが、本稿では、調査地として京都府与謝郡伊根町、長野県木曾郡上松町、愛知県知多郡武豊町という三つの町を取り上げる。この三町は2000年から2004年までに行われた「うらしま伝説交流サミット」の開催地である（2000年と、2001年は伊根町、2002年は上松町、2004年は武豊町）。また、伊根町は『丹後国風土記』の逸文にその名が表れる町であり、上松町は海から離れた土地でありながら浦島伝説を持つ町であり、武豊町は「浦島探検隊」を結成して、浦島伝説の普及に力を入れている町¹⁾である。

「浦島太郎²⁾」の話の初見は、奈良時代かそれ以前にさかのぼる。『日本書紀』の雄略天皇二十二年の条に、話の前半部が簡潔に書かれてされるが、実際に、この時代にこの話が生まれたことを示す証拠はない。重要なのは、その前半部が、鎌倉時代後期に書かれた『日本書紀』の解説書である『釈日本紀』に引用されて残った『丹後国風土記』の逸文と似ていることである。これらの話の主人公は浦島太郎ではなく、浦嶋子である。また、平安時代から鎌倉時代のはじめごろまでに書かれた漢文の書物でも、主人公の名は浦嶋子である。この話はその後、『御伽草子』に引き継がれたのだが、『御伽草子』では主人公の名前が浦島太郎に変わっている。『御伽草子』では、それまでの神仙思想的な世界に代わり、報恩を契機に物語を始め、竜宮や乙姫という言葉を使うようになる。この後、元来亀が姫であった話は、亀と姫とが分離し、大きく変化する。

この変化を受け継いで明治時代に『日本昔噺』の一編として浦島太郎を著し

¹⁾武豊町公式サイトによる。

²⁾「浦島太郎」のように鍵かっこを付す場合、浦島太郎のみならず、浦嶋子を含めた広い意味を表す。

たのが巖谷小波である。彼のこの作品は文部省の国定教科書に昭和 28 年まで掲載され続け、広く日本人に浦島太郎の話を固定化させていったのである。それゆえ、現代の浦島太郎を考察するとき、巖谷小波に始まり、国定教科書による話の固定化を経て、絵本や童話や、アニメ、また au のコマーシャルなどを通して受け継がれている浦島太郎と、何らかの事情で昔の丹後国以外で受け継がれてきた浦島伝説を持つ地方の浦島太郎の話を混同しないようにすることが大切である。一般的な浦島太郎の話が、地方の浦島太郎の話に影響を与えている面もあるが、地方の浦島太郎の話は独自の歴史や地理や文化的な背景から生まれてきたものであり、その点を見逃すと、地方の浦島太郎の話が何故言い伝えられてきたのか、はっきり理解できないことになる。地方の浦島の話は「突飛なもの」、「馬鹿げたもの」として価値を認めない向きもあるが、地方では地域の豊かさを追い求め、真摯に浦島の話を支えようとしている人々がいるのである。今回取り上げた三つの町において、地方の人々が浦島伝説をどのように解釈し、それをどのように地元を活かそうとしているかを見ていくのが本稿の主な狙いである。

現在、日本の自治体が直面している大きな問題は少子高齢化であり、将来人口の増加は望めない。三町にとっても事情は同じである。町おこし、つまり経済の活性化によって、若者等の就職人口を増やしたり、税収を増やしたりすることが大きな課題になっている。その課題克服のため、地元にある浦島伝説の利用は容易であり、中でも、観光に利用することがもっとも可能性の高い方法だと思われる。そのために浦島伝説を他の地域の人々に受け入れてもらうために改変する必要も出てきた。また、浦島太郎の話は明治時代以後、小学校低学年の教科書に掲載され、子供が対象になっている。それゆえ、特に将来を担う子供たちの郷土愛を育て、それによって将来の生活設計を地元で行うように促す文化的な取り組みは重要なことであろう。ここではこういう取り組みをすべて「利用」として捉え、(1) その地における浦島伝説について、(2) それを生かした町おこしの現状、(3) 文化的教育的な活動、という三つの視点から考えてみることにする。

2. 先行研究

浦島伝説は初めから現在知られている話があったのではなく、古くからその内容は変遷を繰り返している。三町の浦島伝説も同じものでなく、浦島伝説の現代の利用について述べる前に、様々な浦島伝説について知る必要がある。

三浦（2007）では浦島伝説の現代までの変遷について詳しく書かれている。伊根町の浦嶋子伝説についても言及している。三船（2009）でも「浦島太郎」の話の古代から現代までの変遷を語っており、伊根町にある宇良神社（浦嶋神社）、上松町にある寢覚の床の浦島伝説についての考察もある。両者の研究は「浦島太郎」の話の流れを的確に記述している。

山田（2008）は江戸時代から風光明媚な寢覚の床が浦島伝説と結びつき、臨川寺を中心として、観光地として発展してきた過程を述べている。現代の上松町の観光の原型がここにある。

浦島伝説については上記のもの以外に非常に多くの研究がなされているが、浦島伝説を利用して、町おこしに役立てる活動がどのように行われているかについて述べているものは、管見の限り見当たらない。本稿はこのことに焦点を当て、浦島伝説の現代的な意味を考察する。

3. 調査方法

本稿では、文献資料とともに、聞き書き調査による資料も用いて考察する。聞き書き調査の詳細は以下の通りである。

表1：聞き書きの詳細

調査地	調査日	話者
京都府与謝郡伊根町	2016.12.8	1.T氏 2.宮司の奥さん
愛知県知多郡武豊町	2017.5.25	I氏
長野県木曾郡上松町	2017.6.11 2017.6.12	1.M氏 2.K氏

4. 調査地①：伊根町

伊根町は京都府与謝郡、丹後半島の東部にある町である。面積は 61.95 平方キロメートル、人口は 2017 年 11 月 1 日現在で 915 世帯、2151 人である。海に面しているところから、基幹産業は漁業である。また、観光資源として船の収納庫の上に住居がある全国的にも珍しい舟屋がある。町の大きな問題は人口の減少で、漁業従事者も減っているという。また、65 歳以上の人数が人口に占める割合は 40% を超え、これもまた、町おこしにとって深刻な問題を生み出している。^③

4.1 浦島伝説の内容

伊根町の浦島伝説は『丹後国風土記』逸文の内容が中心に置かれている。また、浦嶋子を祀る浦嶋神社があり、この神社に伝わる「浦嶋子口伝記」や「讀浦嶋子伝記」などもその話を裏付けている。しかし、伊根浦ゆつくり観光の会が発行した「浦嶋まち歩き Map」には浦嶋子の弟とされる曾布谷次郎の屋敷跡や、三男とされる今田三郎屋敷跡、さらに、龍穴といわれている浦嶋子が常世から帰ってきたときに通ったとされる穴が保存されている。また、浦嶋子の両親を祀る大太郎嶋神社もあり、これらは『丹後国風土記』逸文の内容と相容れないものもある。

「浦嶋神社の栞」に掲載されている神社の伝記の要約は、以下の通りである。

雄略天皇二十二年秋七月七日、丹後国、与謝郡筒川庄、水乃江乃里に住む、容姿端麗な水乃江乃浦嶋子は、ひとり船に乗り、海上に浮んで釣りを楽しんでいました。ところが一匹の魚も釣ることができず、三日目には諦めて竿を上げようとしたところ、一匹の五色の大亀を釣り上げました。嶋子は恐る恐る船の中に入れ眺めているうちに、やがて居眠りをしてしまいました。しばらくして目を覚ますと亀はたいそう美しい乙女の姿となって、

^③伊根町公式サイト及びT氏への聞き書き調査による。

嶋子を常世の国へ誘い、二人して船にて常世の国へ行きました。(中略)
乙女の両親に結婚を許され、二人は毎日楽しい日々を過ごした。

三年経ったある日のこと嶋子に故郷への思いがあることを知った神女は、嶋子に美しい衣を着せ、神女の分御霊の入った玉櫛笥(玉手箱)を与えて『再会を期するならば、けっしてこの玉櫛笥の蓋を開けてはなりません、お約束をしてください』と告げて、二人は約束の後嶋子は常世の浜から船に乗りお供の人達の手によって送り帰されて来ました。水乃江乃里に帰った嶋子は、故里の人跡は絶えて、古い松、古い杉の聳える変わり果てた有様を見て驚き悲しみました。やがて、筒川の川の辺で洗濯する老婆に出会い『三百年もの昔、嶋子というお人が、海に釣りに出かけられたまま帰ってこられなかったそうだ』という言い伝えがあることを聞かされました。嶋子は常世の生活が、三百年にもあたることをさとり、その後十日間ほど生きていました。その間、日毎に神女を思う心がつり、玉櫛笥の蓋をあけてはならないと言う約束を忘れて、その蓋を開けてしまいました。すると中から紫のけむりが蘭の香りをただよわせて立ち登り、常世の国の方へたなびき、そのむらさきのけむりを追っていくうちに、白髪の老翁となり亡くなりました。

子細には『丹後国風土記』の内容との違いが見られるが、大筋においては合致している。しかし、このような歴史書の内容が町の浦島伝説の中心部分を占めていれば、これを変化させるのは困難であろう。次で論じる武豊町のように、町おこしと平行して、伝説を変えていくようなことは伊根町では起こりにくいと考えられる。

4.2 町おこしの現状

日本の自治体のほとんどは少子高齢化が進み、町の活性化をはかることが最重要課題となっているため、観光に重きを置くところが多いと思われる。しかし、伊根町には由緒ある浦嶋神社があり、伝統の安易な変化を嫌う神社の存在

が観光を推進しようとする行政側と噛み合っていないのが現状である。

2016年12月8日に聞き書き調査を行った伊根町役場のT氏によれば、町は浦嶋子の町としての評価はあるが、それがすぐに観光に結びつかない。それよりも全国に珍しい舟屋をアピールし、日本海の珍味を売り出したほうが、はるかに高い集客率を生み出せるという。また、浦嶋子の話を観光化すれば、先述したように、浦嶋子の実在性を目に見えるように変容させなければならず、それは必ずしも神社側の了承を得ているものではないという。このようなところから、伊根町では町をあげて浦嶋子を取り上げるのは難しい状況があるようだ。

利用という点から言えば、浦嶋子伝説の中心である浦嶋神社には、お守りや絵馬、木彫りの神亀などが置かれていたが、浦嶋子の名を冠しているところやそれにまつわる場所以外、一般の神社のものと変わりはない。また、神社の近くに浦嶋公園があり、そこに浦嶋館があった。その中に「PIENO」というイタリアレストランがあり、そのメニューに地元筒川のそばと並んで「竜宮パスタ」と「浦島ばすた」があった。その他、お土産屋があり、さまざまな浦島グッズが置かれていたが、店員がおらず、減額の表示がある商品もあった。また、舟屋が見える道の駅の商品の中には、浦島に関するものは一つもなかった。



写真1・2：浦嶋神社で売られているお守りや絵馬



写真3・4：浦嶋館で売られているグッズ

このように、浦島伝説発祥の地と考えられる伊根町では、行政は浦嶋子伝説の町と宣伝はしているものの、他方では、舟屋の観光事業を中心に考えており、浦嶋子神社は観光よりも学術的活動に力を入れ、観光化の推進を全面的には認めず、浦嶋子伝説を観光のための安易な利用に制限している。上述の状況と併せて考えると、伊根町では、浦嶋子伝説が観光資源として、十分な力を発揮できない状況にある。また、伊根町が「うらしま伝説交流サミット」の発起人になったのも、他の自治体の活動を手本にして、自らの道を模索したかったのだと推測されよう。

4.3 文化的教育的活動

伊根町では、古代からの浦嶋子の話が存続しているため、話の内容を作り変えたり、新しい人物を加えたりすると、浦嶋子伝説と対立する。事実、町歩きマップの中には、浦嶋の弟やその屋敷跡などが書かれているが、伝説の歴史的重みの中ではその存在感を示せていない。伝説の話になると浦嶋神社が中心になるが、神社側は連綿と続いてきた浦嶋子の話を参拝者を通して広めようと活動をしている。神社に参拝したとき、宮司の宮嶋氏は不在だったが、その奥さんから室町時代制作といわれる「浦嶋明神縁起絵巻掛幅形式」を使った絵解きを受けた。そこで話される浦嶋子の話は一般に流布している浦島太郎の話とは大きく異なっている。こうした絵解きもむろん、歴史を軸にした教育活動であり、宮司の活動には地元の人を対象にしたものもあるが、何か町を挙げての活

動とは言い切れないものだった。

伊根町では浦嶋神社が文化的な支えであるがゆえ、町おこしに一致して浦嶋子伝説の利用ができていない実情が垣間見られた。

5. 調査地②：武豊町

武豊町は愛知県知多郡にあり、知多半島の中央部の東側に位置している。面積は 26.38 平方メートルで、2017 年 11 月 1 日現在の人口は 43,205 人で、その内 900 人は外国人である。臨海部には旭硝子をはじめとした多くの会社が工場を持ち、中部電力の火力発電所もある。ここ十年間は、人口の緩やかな増加傾向にある。しかし、とりわけ目立った観光スポットがないがゆえに、浦島太郎伝説で町おこしを図ろうとしている（I 氏への聞き書き調査による）。

5.1 浦島伝説の内容

浦島探検隊の作った「浦島太郎の故郷、武豊」というパンフレットには武豊町での浦島の話が次のように簡単に紹介されている。

太郎は浦之嶋に生まれた。ある日、助けた亀が現れて、蓬莱（竜宮）に案内するという。太郎は浦島川の橋より北側の海岸、負亀（おぶがめ）から、亀の背に乗って竜宮に向かった。南に行くこと一里、やがて、四方から静かな波の打ち寄せる地（後にこの地を四海波（しかいなみ）と呼ぶ）に着く、ここが竜宮の入り口であった。

竜宮でもてなしを受けること三年、望郷の念にかられ、あけずの箱を手みやげに帰郷した。太郎は帰郷した記念に負亀の海を望む丘に塔を建てた。（後にこの地を塔ノ下という。）

しかし、竜宮での三年間は、この世では数有年を経ていた。知る人もいない太郎は、竜宮をしのび、竜宮ヶ浜に竜宮神社を建立し（現在の竜宮保育園のところ）、うめきが浜（四海波の南に隣接し、現在は美浜町布土地内の梅ノ木付近）で、あけずの箱を開いてしまった。白い煙とともに太郎

はたちまち白髪の老人になった。

太郎は、知里付神社に「あけずの箱」を献納し、亀の鬼瓦を上げた。里人は太郎を敬い知里付神社境内に浦島社を祀った。

このように、現在の地名が記載されているところを見ると、かなり地元を意識した話になっていることがわかる。なお、このパンフレットには以下のような続きがある。

小西琴水という新聞記者が半田に住んでいた。大正末に、彼はこの地の地名に関心を持ち、浦島伝説を伝える地として新聞に数回にわたって連載し紹介した。土地の人は喜んで浦島社を建立したというのである。浦島伝説は「徇行記」や「張州雑志」などに出ていない。知里付神社の「神社記」に浦島伝説が出てくるのは、昭和七、八年以降のことである。

つまり、この地には昔から浦島と関係のある地名があった。それがいつごろのものかは分からないが、大正時代末期にそれに興味を持った新聞記者が新聞に連載したことで、地元で浦島伝説が生まれた。それが現在のこの地の浦島伝説の下地になっているということである。

5.2 町おこしの現状

武豊町は全国的な市町村の合併の動きの中でも、合併して市を目指すより、町としてやっていくことに重きを置いているようである。2017年5月25日に聞き書き調査をした浦島探検隊長のI氏によると、武豊町は臨海地への大企業の誘致に成功していることもあって、知多半島にある近郊の町と合併してもあまりメリットがないという考えだった。それで町おこしは、独自に行うしかなくなっているようだ。浦島伝説は町おこし一つの手段であるが、活動を担う浦島探検隊には自治体職員も含まれ、町ぐるみの取り組みができています。

町の中には浦島伝説に出てくる史跡が、標識によってはっきり分かるように整

備されており、二つのコースが設定されている。一つは史跡探索コースと言って約4キロのコースであり、もう一つは自然散策コースで約14キロのコースである。また、この4キロのコースに関して言えば、四つのトイレも設置されており、観光客への対応もされている。これは武豊町企画政策課が発行している「ゆめたろう史跡ウォーキングマップ」と呼ばれているものに詳しく載っている。I氏の話ではキャラクターとしての浦島太郎は以前からあったが、ゆめたろうを創造することで、新しい活動の基点にしようとしたという。ゆめたろうは太郎と乙姫の息子であり、太郎は再び竜宮を訪れ、乙姫に会っているという。ここまでくれば、大変な浦島伝説の改変になるが、これが伊根町のように浦嶋子伝説が押しも押されぬ状態で収まっている町との決定的な違いだろう。ウォーキングマップの表の部分に、亀に乗ったゆめたろうの絵と次の文が印刷されている。

こんにちは。ぼく、ゆめたろう。ぼくが、町のキャラクターマークだったことは、みんなよく知ってるよね。そして、センゾガ浦島太郎だったことも。じゃあ、そのぼくの先祖が武豊生まれの武豊育ちだったということは？えっ、知らないって!?うん、それは残念ー。それじゃあ今からぼくが、現在も町内に残ってる、先祖浦島太郎の史跡を案内するよ。そうすれば、本当にこの町にぼくの先祖がいたということがわかってもらえるんじゃないかな。さあ、ぼくと一緒に、浦島太郎の史跡めぐりに出発しよう！

このようにゆめたろうを登場させることによって、おじいさんの浦島と違って、新しい世代である子供の中に違和感無く入っていける可能性を生み出している。また、ゆめたろうが語る話が現在の話として語られるので、より親近感が生まれているようにも受け取られる。

一方、地元の商店街では「ゆめたろうカード」というものが発行されている。40ほどある加盟店で買い物すると、特典があるというもので、武豊町内の金融機関で300円分の預金ができたり、教育・福祉助成も兼ねているものだ。その

加盟店の一つ、菊乃屋菓舗に入ってみたが、ここでは、「龍宮饅頭」「たまてばこ」など、浦島伝説に係わりを持つ和菓子が売られていた。ここの主人の話では、町をサポートするために新しく浦島太郎に関するお菓子の製造を始めたという。

このように、特出した観光資源を持たない、小さな町である武豊町は、古くより言い伝えられてきた浦島伝説を現代的に改め、地域を巻き込んで、町おこしの一手段として実用的に利用しているのである。



写真5：ゆめたろうカード



写真6：龍宮饅頭



写真7：たまたまばこ

5.3 文化的教育的活動

浦島探検隊のI氏の話では探検隊はいつも町の行事に積極的に参加し、機会があれば、その会場で紙芝居を通して浦島の話をするようにしているようだ。また、学校の活動にも参加し、同じく紙芝居を中心とする活動を行っていると言う。全国的に普及している浦島の話とは別に、武豊町に伝わる浦島の話と、町内に点在するその史跡を活用して、子供たちに自分は浦島太郎のいた町で生まれ育ったという思いを培ってほしいという願いが浦島探検隊の活動指針の底流にあるとのことである。

6. 調査地③：上松町

上松町は長野県南部にあり、東側に中央アルプス、北西には御嶽山を望み、町の中を木曾川が流れる自然豊かな町である。また、江戸時代の五大街道の一つ中山道が通り、奈良井宿、妻籠宿などがある。木曾川が作り出した景勝地、寝覚の床やヒノキの森の中にある赤沢自然休養林など、多くの観光スポットを有している。人口は2017年10月末日現在4665人で、減少傾向にある。以前の基幹産業は林業だったが、今では観光に従事する人口が増えている。⁴⁾

6.1 浦島伝説の内容

上松町の浦島伝説は浦島太郎を丹後の国の人とし、『御伽草子』を踏まえた話になっている。『上松町誌』（第二巻、民族編）には「浦島太郎の話」として、次の話が載っている。

むかし、丹後の国、竹野郡浦島というところに、水江という領主が住んでおりました。

この領主を、人々は浦島とよんで、大層親しんで敬まっておりました。

ある日のことです、この浦島の息子太郎は、一人のお供をつれて、浦島

⁴⁾上松町公式サイトによる。

の浜から、小船を漕いで沖へ出ました。

しばらく糸をたれて、魚を釣っておりましたが、その日はどうしたわけか、一向に釣れません。そのうちに、糸に強い手ごたえがあって、今まで見たこともない、大きな亀を釣り上げました。

これを見た、太郎のお供は、櫂を振り上げて、亀をなぐり殺そうとしました。太郎は、その亀をよく見ると、これは普通の亀と違って、靈気があふれており、これは万年も生きている亀だろうと、思ったので早速お供のものに「乱暴はよせ。」と、いって親切にいたわって、海へ放してやりました。

— (中略) しばらくして、太郎は美しい少女に出会い、請われるままに付いて行くと、そこは常世の国・竜宮城で、太郎は竜王に娘を助けた礼をいわれ、しばらくの間、遊んでいくようにいわれる。しかし、ある日のこと、かすかに聞こえる鶏の声に望郷の念がこみ上げてくる。—

故郷が恋しくなると、もう矢も楯もたまらずに、太郎は竜王に、おいとまごいを、申し上げました。竜王は、

「貴男が家に帰って見て、もしも故郷がいやになったら、またここへ来なさい。貴男が信心をしている、弁才天の尊像と、ここにある万宝神書という書物を一巻、貴男にさしあげましょう。またこの筐は、どんなことがあっても、開いてはいけないという、玉手筐というもの、これを貴男にあげましょう。」と、いって、太郎に贈物を、渡しました。

太郎は喜んで、竜王や乙姫様に、別れをつげると、竜王のかしてくれた、竜馬に送られて、故郷へ帰ってまいりました。

太郎が思うには、たった二、三年のことだから父母も達者で、暮らしているだろうし、近所の人たちも元気で働いて、おるだろうと、胸をときめかして、家へ帰って見ると、顔の見知らぬ人ばかりで、浦島の太郎だといえば、三百年ほど昔、沖へ釣りに出たまま、帰らない人だろうといい、せめて近所の人とはと、見ればこれまたどの人も、見知らぬ人ばかりでした。

太郎は、すっかり驚いて、途方にくれ万宝神書を開いて見ると、それに

は飛行の術をはじめ、長寿の薬法などが書いてありました。太郎はこれを読むと、足にまかせて諸国を歩き、ねざめの床にまいりました。その附近の美しい風景が、すっかり気に入って、ねざめの里に住んで毎日床岩で、釣りをしておりました。

ある日のことです。太郎は里の翁におもいでをして、玉手篋を開くと、中からぱっと紫の煙が立ちのぼって、その煙が太郎の顔にふれると、たちまち顔色が劣えてしまい、近くの池に姿を写して見ました。三百歳の翁になってしまいました。それから、その池を姿見の池と呼ぶようになりました。

翁は、そののちも人々に霊薬を授けておりましたが、天慶年間にどこへともなく、立去ってしまったといいます。

里の人々が、その跡を見ると、竜宮の竜王からいただいてきた、弁才天の尊像を、床岩の上に残してあったので、これを祠に祀って寺を建立しました。これが寢覚山臨川寺だと伝えられています。

この話の特徴は、太郎が見知らぬ人ばかりの故里から、竜王にもらった万宝神書を持ち、全国を漫遊した末に、寢覚の床に行き着くことである。さらに、玉手篋を開いて翁になり、竜王にもらった弁才天を置いていなくなり、地元の人がそれを祀り、臨川寺が生まれるという話である。謡曲「寢覚」にはこの話がないことから、制作は江戸の初期だと考えられているが、臨川寺に残る「寢覚浦島寺畧縁起」は古いもので宝暦六年（1756）の年号が記されているため、これまでに話が作られていったと推測される。2017年6月11日に聞き書き調査した臨川寺の和尚（M氏）からも、ほぼ同じ内容の話聞いた。

6.2 町おこしの現状

上松町は木曾路に位置し、森林資源に恵まれている。赤沢自然休養村は江戸時代から保護されてきたヒノキ林の中にあり、木曾森林鉄道は、以前木材の積み出しに使っていたものを新しくしたものだ。このような観光資源の中では、

「寢覚の床」は一つの資源にすぎないと、上松観光協会のK氏は話し、浦島伝説を中心に据えるのではなく、観光資源の一つ一つを重要なものとして売り出していこうという姿勢がうかがえた。上松町の観光面の組織は、信州長野県観光機構下の木曾観光連盟に属しているが、自分の裁量権を持っており、町政と歩調を合わせながらも、武豊町のような町ぐるみの観光政策とは幾分異なる活動が行われている。

寢覚の床は室町時代には風光明媚なところとして知られていたという。『角川日本地名大辞典』には「十六世紀の『東国陣道記』や十七世紀の『岐蘇路記』にすでに景勝地として明確に紹介されている」との記述がある（山田 2008 : 33）。これが浦島伝説と結びついていくのだが、山田（2008）は「臨川寺は寢覚の床と浦島伝説を取り込み、寺の経営の手段の一つとして利用していたといえないだろうか」と疑問を呈しており、また、寢覚の床の周辺部から、たとえば『木曾路之記』（1709）では「寢覚のちや屋あり」と寢覚の床を生活の手段にする者が現れるという（山田 2008 : 40）。そして、「寢覚の床では名物が生まれ、御休所を設けるといったように、寢覚の床を生活の手段とするバリエーションが増えている。」（同上）と述べている。これはホテルや民宿があり、「ねざめ亭」というお土産屋で、浦島グッズや長野県の特産であるハチの子やそばを売っている現状と、基本的には変わっていないと思う。現状をより詳しく言えば、上松町も「太郎ちゃん」のLINEの公式キャラクタースタンプを販売したりするなど、昔以上に官民協力が強くなっている。寢覚の床は今では全国的に有名な景勝地になり、そこに根付いた浦島伝説を確かなものとしてアピールすることによって、より大きな観光資源として活用しており、伝説を的確に利用した例となっていると言えよう。



写真8：ねざめ亭



写真9：ねざめ亭で売られているグッズ

6.3 文化的教育的活動

この町にはキャラクターとして「太郎ちゃん」と「美林ちゃん」がある。このキャラクターの名は上松町の町民を含む、全国応募で決まったそうである。二つのキャラクターがあるのがこの町の特徴となっている。浦島太郎に関しては、先述のK氏の話によると、観光協会では紙芝居活動にも取り組んでいるという。目の前でその紙芝居を見たが、話の内容は『上松町誌』の「浦島太郎の話」と同じものである。老人ホームや保育園、小学校や町のほかの行事で行うこともあるが、委託を受けて行うことが多いということであった。話を聞いている中で、武豊町のように、子供たちに郷土の誇りを持たせるというほどの情熱はなかったが、町内のそれぞれの観光地の観光に責任を持つというこの町のあり方が出ていた。

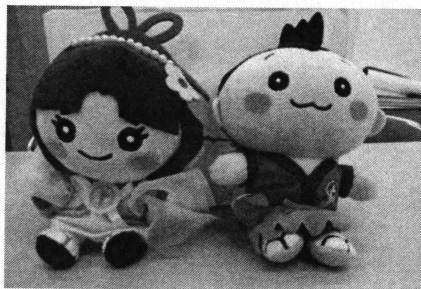


写真10：美林ちゃんと太郎ちゃん



写真11：上松町の紙芝居

7. うらしま伝説交流サミット

「うらしま伝説交流サミット」は2000年に伊根町の呼びかけで、浦島伝説の残る市町村がその伝説を通じて、親交を深めようとしたところから始まったという。第一回のサミットで採択されたうらしまサミット宣言には「私たちは、薫り高い文化と美しい自然を愛する心を育み、うらしま伝説を活かして、それぞれの故郷で魅力あふれるまちづくりを進めていくことを確認しました」との言葉が見られる（うらしま伝説交流サミット記録集 2001：1）。このサミットは、一回目には七市町村が集まったというが、翌年同じ伊根町が主催した二回目は四つの町になったという。この四つの町というのは伊根町、網野町、武豊町、それに上松町である。伊根町と同じく、網野町は丹後半島の西側にあり浦島伝説にゆかりを持つ神社がある。特に網野神社は鴨長明の『無名抄』に「丹後の国与謝の郡に、浅茂川の明神と申す神います。（中略）これは昔、浦島の翁の神になれるとなむ、言ひ伝へたる。」（久保田 2013：39）とあって、伊根町と並ぶ浦島信仰の中心をなすところである。2003年にはサミットは上松町で行われた。このとき、武豊町の当時の浦島探検隊の会長が以下のように発言している。

第一回のうらしまサミットに参加させていただいて印象に残ったことがあります。今回欠席された詫間町さんが、香川県と岡山県とで「三太郎サミット」ということで10年ほど集まりを続けてきたところ、10年目にして行き詰ったというものを目にしてまいりました。今回サミットも3回目を数えたわけですが、先ほど議長さんも申された中で、「水」、「環境」など、毎回何かのメインテーマを設けていかないと、このまま回を重ねると、そのうち立ち消えるかなと案じております。（第3回うらしま伝説交流サミット記録集 2002）

これはこのサミットにおいて、どのようにしたら宣言のように、互いが協力しながら、自分の町づくりをしていけるか、はっきりした展望がなく、具体的

な行動もできなかったことを示している、どの自治体もサミットより前に浦島伝説を利用し、すでに町おこしを企てているというが、そこには各自治体が持つ特異性が影響し、表面的な協力関係を打ち出すだけでは、乗り越えられない壁があるのではないかと考えられる。第四回のサミットは 2005 年に、武豊町で行われたが、会長の不安通り、第五回の開催は実現するに至らなかった。I 氏にこのあたりの事情を聞いてみると、当時は町村の市への合併の動きが活発で、網野町は京丹後市に組み込まれたため、サミットどころではなかったという。浦島伝説を通して協力し合い、自らの町づくりを進めていこうという新しい試みが挫折したことは、浦島伝説がそれぞれの町の中で、それぞれの独自性を持っているということの意味する。それゆえ、その伝説を上手に利用しようとするなら、他所を真似するよりも、独自に自分の道を切り開くより他はないと、それぞれの町が結論付けたのではないかと考えられる。

8. まとめ

ここまで、浦島伝説を持ち、うらしまサミットの開催地になった三つの町の浦島伝説との係わりを見てきた。少子高齢化の波の中で、どの町も、観光によって町おこしをしようという展望を持っている。しかし、どの町も浦島伝説の利用はその一手段でしかない。そして、その利用度は、その町の浦島伝説の重さが影響しているのではないかと思われる。伊根町がどうしても舟屋のほうに重心を置くのは、浦嶋神社に伝わる浦嶋子の話に重みがあるからである。それを観光資源化するには、どこかで伝説の変容を容認することになるが、それが難しいというのが現状のようだ。それに対して、武豊町では変幻自在で、太郎の子供のゆめたろうが観光の導き手になっている。この町の浦島伝説には伊根町のような重みのないことが、自由な発想の浦島伝説を生み、町おこしにつながっているように見受けられる。また、上松町には江戸時代から臨川寺とその周辺の住民との協力により作り上げられた浦島観光がすでにあった。町はこれを変更するのではなく、さらに発展させるためにはどう手を加えたらいいのか、その一点のみを考えればよかったのである。上松町にとっても 300 年を超える

歴史を持つ浦島伝説は重みのあるものであったが、すでに浦島伝説は観光に組み込まれていたため、伝統と対立せずに済んだのである。こうしてみると、浦島伝説の置かれた立場が異なっている三町では、それぞれの持つ浦島伝説の歴史性の重みによって、町おこしの利用の様子がかなり変わってきており、一括りにはできないものがあるのである。

<引用文献>

- 上松町教育委員会（2000）『上松町誌』第二巻、民族編
市古貞次（校注）（2006）『御伽草子（下）』岩波書店
久保田淳（訳注）（2013）『無名抄』角川学芸出版
坂本太郎他（校注）（2013）『日本書記（三）』岩波書店
高橋大輔（2005）『浦島太郎はどこへ行ったのか』新潮社
中村啓信（監修・訳注）（2015）『風土記 現代語訳付き（下）』角川学芸出版
三浦佑之（2007）『浦島太郎の文学史 恋愛小説の発生』五柳書院
三船隆之（2009）『浦島太郎の日本史』吉川弘文館
山田栄克（2008）「寢覚の床と浦島伝説」『昔話伝説研究』 第二十八号

<資料（パンフレット）>

- 「浦嶋神社の栞」浦嶋神社（京都府与謝郡伊根町）
「浦島太郎の故郷、武豊」浦島探検隊 2013年2月9日
「うらしま伝説交流サミット記録集」2001年9月30日
うらしま伝説交流サミット実行委員会（京都府与謝郡伊根町）
「浦嶋まち歩き Map」伊根浦ゆっくり観光の会（京都府与謝郡伊根町）
「第3回うらしま交流サミット記録集」2002年6月9日
第3回うらしま交流サミット実行委員会（長野県木曾郡上松町）
「ゆめたろう史跡ウォーキングマップ」武豊町企画政策課
（愛知県知多郡武豊町）

＜ウェブサイト＞

上松町公式サイト：<http://www.town.agematsu.nagano.jp/gyousei/>（2018.1.4 閲覧）

伊根町公式サイト：<http://www.town.ine.kyoto.jp>（2018.1.4 閲覧）

武豊町公式サイト：<http://www.town.taketoyodg.jp>（2018.1.4 閲覧）

Aims and Scope

Japanese Studies Journal is an academic journal of Arts published by Japanese section, Department of Eastern Languages, Faculty of Arts, Chulalongkorn University, and Studies in Language and Society, Graduate School of Language, Osaka University, and Studies in Japanese Literature, Graduate School of Letters, Osaka University. It is a semi-annual journal, published twice a year in April and October. It publishes academic articles in the field of Japanese language, Japanese language education, Japanese culture and literature. The journal seeks to promote research and share knowledge among researchers and to be a channel for the dissemination of research outputs related to those academic fields. Submission can be made throughout the year. Articles can be written either in Japanese or in English. Articles previously published cannot be accepted. All articles will receive a single-blind peer review by referees in those academic fields. Contributors should follow the guidelines for contributors at the end of the issue or visit the journal's website.

(website:<http://www.art.chula.ac.th/~east/japanese/japanstudiesjournal>)

原稿執筆について

- 書式
 - A5 用紙
 - 横書き
 - 35 字 28 行
 - 余白 上：15mm／下：20 mm／左右：17 mm／フッター：7.6 mm
 - 文字フォント：MS 明朝（タイトルの場合はMS ゴシック）
英文と数字のフォント：Century
 - 文字サイズ 10pt
 - ページ番号：不要
 - 脚注：各ページの最後、文字サイズ 9pt
脚注の番号は上付き文字の(1)、(2)等

- 第 1 ページの書き方
 - 1 行目中央に題目（MS ゴシック太字 11pt）
 - 1 行空けて中央に執筆者氏名（10pt）
 - 氏名の下に肩書き 例) 大阪大学大学院 コース名 M○
 - 脚注に執筆者の肩書きと連絡先（メールアドレス）を示してください。
 - 2 行空けて要旨（要旨の最後にキーワードを入れてください）
 - 1 行空けて Abstract（英語の要旨）
 - 1 行空けて本文

- 枚数：15-20 枚程度

- 送付先：
 1. OPEN JOURNAL SYSTEM
<http://www.arts.chula.ac.th/~eastjapanese/japanstudiesjournal>
 2. メールアドレス
japsect@yahoo.com

- 締切：

4 月号	: 毎年の 2 月 28 日
10 月号	: 毎年の 8 月 31 日

編集後記

本誌は2017年8月に、チューラーロンコーン大学で行われた「第19回大阪大学・チューラーロンコーン大学大学院研究交流会」で発表された7本の論文と、同年6月に大阪大学文学部で発表された1本の論文を収録しています。領域としては日本文化、日本語学、日本語教育、日本文学と4つの領域から論文が集まりました。

日本文化をテーマとしたものでは、永原先生は芝居絵をめぐる文化伝承を取り上げられ、孫さんは日本におけるトイレ掃除文化について考察し、またポーンティップさんは浦島伝説の現代的利用について、伝説が残っている3つの町を事例に比較検証を行いました。いずれも過去と現在をつなぐ「伝承」に焦点を当てつつ、独自の視点で日本の現代を見つめようとしている点、大変興味深いものになっていると思います。また、タチアナさんは第15号に引き続き、玩具の外交的な役割を扱いつつ、日本とタイの少年赤十字団が関与した玩具贈呈の経緯などをより深く掘り下げ、日タイ交流史の新たな視座を提示したことは評価に値すると思います。

日本語学と日本語教育では、松岡さんはライフヒストリ研究という手法を使い、日本にルーツを持つ学生の日本語学習に対する意識を明らかにし、またトゥ トゥ スェ エーさんは日本語とビルマ語の格助詞の比較を行い、その自立性の違いに起因する両言語の様々な現象や差異に注目しています。一方、ルディーマードさんは初級タイ人学習者の漢字学習到達状況を、漢字の持つ「形態」「読み」「意味」「用法」という4つの情報処理技能に関する漢字力診断テストを基に分析し、初級漢字教育のためのシラバス作成に対して提案しています。

文学の領域からはシャヤーポーンさんの論文1本のみですが、津島佑子の『ナラ・レポート』において作者が描いた孤児像を浮き彫りにしようとしている意欲的な論文となっています。

本号の刊行に当たり、編集においては、大阪大学の加藤均先生、そして大阪大学大学院生のチュラ係の皆さん、また査読では、査読委員の先生方に大にお世話になりました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

なお、今回の出版もタイ国トヨタ自動車株式会社から助成をいただいております。編集者を代表して厚く御礼申し上げます。

チューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座

チョムナード・シティサン

『日本研究論集』第17号
Japanese Studies Journal No.17

2018年4月発行

April, 2018

編集代表

Editor in Chief

チョムナード・シティサン (チューラーロンコーン大学助教授)

Chomnard SETISARN (Assistant Professor, Chulalongkorn University)

編集長

Issue Editor

チョムナード・シティサン (チューラーロンコーン大学助教授)

Chomnard SETISARN (Assistant Professor, Chulalongkorn University)

副編集長

Associate Editor

加藤均 (大阪大学日本語日本文化教育センター教授)

KATO Hitoshi (Professor, Osaka University)

査読委員

International Editorial Board

岩井茂樹 (大阪大学日本語日本文化教育センター准教授)

IWAI Shigeki (Associate Professor, Osaka University)

ウォラウト・チラソンバット (チューラーロンコーン大学助教授)

Voravudhi CHIRASOMBUTTI (Assistant Professor, Chulalongkorn University)

岸田康浩 (大阪大学日本語日本文化教育センター教授)

KISHIDA Yasuhiro (Professor, Osaka University)

真嶋潤子 (大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻教授)

MAJIMA Junko (Professor, Osaka University)

水野亜紀子 (大阪大学日本語日本文化教育センター准教授)

MIZUNO Akiko (Associate Professor, Osaka University)

Printed in Thailand

© Japanese Section, Department of Eastern Languages, Faculty of Arts, Chulalongkorn University
(japsect@yahoo.com)

© Studies in Language and Society, Graduate School of Language and Culture, Osaka University
ISSN 1906-8891

印刷・製本

Parbpim Limited Partnership
296 Arun-Amarin 30, Bangkeekan,
Bangplad Bangkok, THAILAND 10700
Tel : +66 (0)2433 0026-7
www.parbpim.com

